

工2N85

78-3



文學士高山林次郎著

世界文明史

東京博文館藏版



提 世界文明史自序

從來我邦に於て歴史に關する著譯甚だ多しと雖も文明史に到りては殆ど稀なり。是れ斯學の爲に大に恨みとすべき也。

文明史は人類社會の統一的歴史なり。故に個々事實の研究に憑依すべきは素より論を待たず。然れども個々の事實が一般人文の間において如何の關係位置を占得すべきかを説明するものは、翻て是を文明史に待たざるべからず。文明史の意義價值是に存す。

文明史の可能に對する二個の批難は是を序論の中に辨解せり。然るに世には其可能を疑はざるも尙ほ其尙早を説くものあり。曰く、今や資料拾收の時代なり。未だ其統一的説明の期に到達せずと。資料の拾收と研究とは將來歴史學者の益々盡瘁すべき所なり。然れども

一切資料の拾収を待て初めて文明史成り得べしとせば、吾人は何れの時にか是統一的歴史の知識に到達し得べき。史的発展の主腦は大體の觀察に依傍するを以て足れりとすべし。無限の資料は却て是に依りて初めて其繁縛と散漫とを免れ、歴史の明晰なる觀念はた是に於て初めて成立し得べし。

予が是小著必ずしも是目的を充實せりと謂はず、予自らも其不完全なるを熟知せり。良し事志に伴はずと雖も、本書著述の精神は實に是目的を充實し、以て本邦史學の建築に一片の瓦石を寄與せむとするにありし也。眇たる一小冊子、名實恐らくは相稱はざらむ。而かも馬骨も時に千金の價あり。尙ほ以て將來學者の完全なる文明史を喚起するを得ば、著者の事業亦必ずしも徒勞に非ざるなり。

是書筆を佛蘭西革命の前に擱けり。蓋し最近世に於ける文明の進歩は、更に細心精緻の研究を必とす。乃ち更に稿を起し、『十九世紀文明史』と題し、別に一卷となせり。其出る數月を出でざるべし。是書殊に眼を世界現今の大勢に着け、東西人文の交渉、西力東漸の趨向を明にし、以て史學研究者の外、經世時務を知るもの、爲に將來の畫策に資せむことを期せり。庶幾くは本書と踵跡相接して一部世界文明史の大觀たらむか。

紙數に限りあることは、著者をして一々事實の説明に遑なからしめたり。是れ著者の大に遺憾とする所なり。讀者或は其談理に精にして記實に粗ならむを咎めむ。然れども文明史の躰裁として亦已むを得ざるなり。想ふに固有名詞の送迎に忙殺せられて史的発展の大

主腦を捉ふるに由無きは、一般政治史の通弊なり。故に本書は故らに事實の豊富を貪らず、専ら讀者をしては大主腦の那邊に存するかを知らしめむと欲す。是を以て著者は本書の讀者に向て一般政治史の知識を預想せり。

本書は其大さに於ては敢て誇るに足らず。然れども著者が研究の勞は甚た少からざるなり。但著者學尚ほ淺く、識尚ほ博からず。素より所期の十一だも達する能はざりしと雖ども、目下の事情に於て爲し得べき十分の力を效したりと信ず。幸に先輩諸氏の批評を得て完成を他日に期せむ。

明治三十一年一月

東京

高山林次郎識

例言

- 一 本書の目的は初學者をして歴史發達の精神を會得せしむるにあり。されば専ら方今史家の通論を紹介するを旨とし、故らに私己の臆斷を避けたり。若し夫れ歴史全粹に関する著者の一家言は、本書を紹介して公にせらるべき。十九世紀文明史の卷末に附すべし。
- 一 人種に關する知識は歴史の根本問題なり。故に其異同遷徙に就きては、本書の大きに比して稍、精細なる説述を試みたり。讀者は地圖を参照して、本書に依傍せらるへし。
- 一 固有名詞の發音は成るべく其原音に隨へり。然れども從來の慣用に係るものは、直に襲用して故らに異を樹てず。
- 一 本書は主として政治、宗教、哲學、文學、美術の五點より人文の發達を觀察せり。されば經濟實業等の諸點はあつから粗なるを免れず。讀者備を求むる無くんば幸也。
- 一 著者は事情の許す限り最も多くの書典を涉獵せり。繁を避けて一々書中に記せず。是を卷末に掲げて讀者の參考に供せり。

重要參考書

- Andrews: Institutes of History.
- Barth: Religions of India.
- Brace: Manual of Ethnology.
- Burckhardt: The Renaissance in Italy.
- Caird: The Evolution of Religion.
- Carriere: Die Kunst im Zusammenhang der Kulturentwicklung.
- Draper: Intellectual Development of Europe.
- Falckenberg: Geschichte der neueren Philosophie.
- Fisher: Outline of Universal History.
- Gothein: Aufgabe der Kulturgeschichte.
- Grupp: System und Geschichte der Kultur.
- Guizot: General History of Civilization in Europe.
- Honegger: Kulturgeschichte.
- Johnson: Indian Religions.
- Klemm: Allgemeine Kulturgeschichte der Menschheit.
- Lübke: Grundriss der Kunstgeschichte.
- Möbius: Deutsche Litteraturgeschichte.
- Priestley: The History of the Corruption of Christianity.
- Sale: Koran, a preliminary Discourse.
- Schwegler: Geschichte der Philosophie.
- Stein: Weltlitteratur.
- Taine: History of English Literature.
- Weber: History of Indian Literature.

提要
世界文明史

文學士 高山林次郎著

序論 文明史とは何ぞや。

政治史と文明史と。——二者の關係は必ずしも全分的ならず。——研究方法の差違。——材料取捨の差違。——特殊歴史と文明史との關係は、猶ほ自然科學と純理哲學とのそのの如し。——文明史の可能を否定する二説及其駁論。其一。——其二。

エドワード・ギボン氏は英國の大史家。其椽大の史筆もて述作せし羅馬衰亡史は、洵に歴史文學の一大偉觀なり。然るにヤコブ・ブルクハルト氏は是書を賤して大體に通せずとなし、以爲らく羅馬帝國の没落が歴史上の眞意義は異教者の基督教化したる一事實に歸すべしと。

其説の當否は暫く論せず、是二者の反對は、やがて文明史と政治史との差別を表はす。即ちギボン氏の歴史眼は政治史的にして、ブルクハルト氏のは文明史的

政治史と文明史

なり、
 政治史とは何にぞや。一言すれば、國家生活の過程の中に起りたる事件の順序及び關係を誌せる歴史なり。而して其關係は主として外面上の現象に終始せるものにして、是の如き事件の由て生起し來りたる時代及び個人の内面的の探索を旨とするものに非ず。人文史は則ち然らず。其目的とする所は、人類社會一般の發達を其精神的方面より觀察し、其外部に表はれたる政治、經濟、宗教、文藝、其他もろく、の文物に對して、其成立變遷の説明を與ふるにあり。政治史は即ち國家を中心とし、其盛衰興亡に關して一切の文物を查照す。人文史は則ち人類社會を對象とす。苟も人類社會の進化に與かるものは、凡て人文進歩の過程を成すに於て欠如すべからざるの要素となす。己に欠如すべからざるの要素と爲すを以て、彼此の間に輕重の別を立てず。宗教も、文學も、哲學美術も、政治經濟も、觀するに人文を經緯するに須要の線條を以てす。何れを先とし、何れを後とすべき謂はれ無きなり。政治史其物も亦是の如き人文發達の根本的説明に依傍することによりて、初めて其精透なる敘述を遂げ得べきを以て、是點より見

二者の關係は必ずしも全分的ならず。

研究方法の差

る時は、人文史は政治史の所依なりと謂ふべきか。
 然れども是二者は必ずしも全軌と部分との關係に於て成立するものに非ず。政治史は國家生活に起りたる過去の出來事をありのまゝに描寫し、讀者をして當時の社會を回想せしむるに足るべき寫實的分子を要す。所謂「現在の生命を以て過去の時代に魂する」は政治史に欠くべからざるの要素なり。故に政治史家は冷灰枯淡の文字を列ねて抽象的敘述を以て能事とすべきに非ず。其筆墨點染に於て一段文人的の技倆を要す。之れレオポルド・ラング、氏が政治史家として尤も優秀なる位地を占むる所以の一なり。人文史は自ら其ゆきかたを殊にやる所あり。然れども政治史として單に事實の記録を以て満足すべきに非ず。究りなき局面の變化を通じて動ざる發達の原理を認識するに非ざれば、國家生活の説明は遂に其統一を期し難からむ。是點に於ては兩者は、其軌を同くす。又研究の方法に關して、政治史と文明史とは、劃然たる區別あり。即ち政治史は主として既に起りたる事件を以て發足點とし、吾人に告ぐるに是事件の進行發展する過程を以てす。而かも是の如き事件の由來する所の幾多の勢力に就て

材料取捨の差違

は多く語る所あらず。故に其の方法は概ね総合的なり人文史は則ち然らず。先づ人類社會に活動せる勢力そのものを捉へて其性質を研究し、そが中に常住なるものと流轉するものとを區別し、其情性及動力より來るべき自然の結果としてこゝに外部の事件を解釋す。もとより時に敘述を事とする場合なきに非ざれども、大體に於て其方法は解析的なり、

兩者の間已に是方法の差別あり、材料の取捨に就て亦自ら徑庭無き能はず。政治史は國家の生活に與れる事件の綜合的敘述なり。故に事苟も國家と重大の利害を有するものは、其由來の必須と希俾とを問はず、其性質の常住なると一時なるとに論なく、すべて網羅把住せざるべからず、然かれども文明史にありては、事件そのものは何等の價值を有せず、只是の如き事件によりて發現せられたる勢力思想に價值あるのみ。

政治史と文明史との差別是の如し。されば政治史家が人文史を以て空理となすことの失れるは、猶人文史家が政治史を以つて迂濶なりとするの正しからざるが如し。要するに二者其目的を異にするを解せざるの罪のみ。然れども

特殊歴史と文明史との關係は、猶自然科学の純理哲學に於けるが如し。例せば物理學は物質運動の法則を、植物學は植物の分類生理を、天文學は天體動行の系統を研究す。然れども是等の法則若くは系統が、主觀的には吾人の認識と如何の關係を有し、客觀的には宇宙の全體に對して如何の地位を占得せるものなりやに就いては、是等の自然科学は何等の解釋をなし得ざるなり。是の如き根本的原理の說明

政治史は獨り以て歴史的職能を完全に盡し得べきものに非ず。一般人文の一現象たる國家生活は、一般人文其物の究明に待つに非ず、其内面的因果の連鎖を解釋すること能はざるや素より論無し。之れ夙に近時政治史家の着眼したる所なり。試みに世界歴史若くは各國歴史と稱するものを意に任せて繕き見よ。是等は其本來の面目に於て全く政治史たるにも係らず、其中には人種の特質、文藝の進歩、若くは時代の精神に關して條章を設けざるもの無し。然れども編述の體制に伴ふて自ら主客幹枝の別あり、是種の書に於て人文發達の理路を尋ねむこと甚だ難しとす。

蓋し政治史若くは人類社會の一面の活動を對象とする特殊の歴史の一般文明史に於けるは、猶自然科学の純理哲學に於けるが如し。例せば物理學は物質運動の法則を、植物學は植物の分類生理を、天文學は天體動行の系統を研究す。然れども是等の法則若くは系統が、主觀的には吾人の認識と如何の關係を有し、客觀的には宇宙の全體に對して如何の地位を占得せるものなりやに就いては、是等の自然科学は何等の解釋をなし得ざるなり。是の如き根本的原理の說明

は、一切科學の綜合的知識に本ける純理哲學の組織を待て、始めて爲され得べきものなりとす。幾多特殊歴史は、各自の範圍に於て興亡盛衰の聯絡を説き得べきも、人類の全活動に關しては遂に人文史の説明に依らざるを得ず。

文明史の可能
を否定する二
説及其駁論。

其一。

或一派の史家は今日尙ほ文明史の可能的なることを否定するものあり。其理由とする所は自ら二種あるが如し。一は個々の特殊なる歴史を離れて別に人文史なるもの有るべき理無し、所謂文明史は特殊の歴史に根本的説明を與ふと揚言するも、是れ哲學者の理想より打算し來りたる空理に過ぎずと。是れ哲學界に於て純理哲學の存在を疑ふものと一般其説の淺薄誤謬素より取るに足らざるなり。古代若くは中世の形而上學に見たる所のものを以て、直に自然科學の結果に對する歸納的方法によりて成立せる現今の純理哲學に擬し、荒唐不稽を以て之を難するものは、全く哲學の歴史的發達に盲なるものなり。之と同じくヘーゲル氏、ヘルデル氏一輩の歴史哲學と、最近人文史家の攷究とを同一視するものは、菽麥河嶽を辨せざるものと謂はざるべからず。文明史の由來を

尋ねるに、素と純理哲學と均しく人智の統一的傾向に本けるものにして、中世紀の世界觀に於て夙に其萌芽を發せり。中世紀は何人も知る如く、基督教のドクマの維持を以て哲學の職能となし、一切自由の討究を容認せざりし時代なり。アリストテレス氏の形式論理が、所謂「スコラ」的學者の唯一の武器となり、聖典の教義は其三段論法によりて凡ての方面の極端に至るまで推演發展せられたるの時代なり。是の如き時代にありては、歴史は其の形而上的、はた宗教的系統に隨て思索せられ、社會の發達人類の運命は全く信條として制定せられたり。是故に當時人文史の原則として見るべきアウグスティヌス氏の宿罪説を超越することとは、中世學者の敢てし得ざりし所なり。文藝復興期に至りて歴史的人世觀は漸く其面目を革め來りしが、純正人文史はヘルデル、シュレーゲル諸氏に至るまでは其完全なる軀制を成する能はざりき。然れども是れ等も亦當時の純理哲學の思想につれて演繹的説明を旨とせるものなるを以て、むしろ彼等の哲學主義の敘述として見るべきもの、人文其物につきて忠實なる客觀的考索を遂げたるものに非ず。ヘーゲル氏以下の所謂理想派に屬する獨逸史家にありて

は、是弊殊に甚し、是等は何れも中世及び近世獨逸の純理哲學と一般の攻撃を辭する能はざるものなり。

然れども今日の文明史は又昔日の文明史に非らざるなり。地質學、比較言語學、及人種學、比較神話學、人類學等の最近の研究の上に確乎たる科學的基礎を有するに至れり。クレム、ベシエル、ベール、ヘルツ、リッペルト諸氏の著述はたしかに此傾向を代表す。人文史を斥けて空理なりとするものは現今學界の實勢に通せざるものなり。

文明史に對する第二の批難は、人文の概念の廣大に失し、隨て其發達に關して統一的原理を發見し得べからずと謂ふにあり。是れ尤も有力なる批難なり。抑も人文史とは何ぞや。想ふに何人も疑問に答ふる數學的精密と、論理的確實とを以てする能はざるべし。そは難者の言の如く人文の範圍及び種類は無限の廣表を有すればなり。然れども明白なる概念を寫象し得ざるの事物は、必ずしも吾人が研究の對象となり得ざるにあらず。誰か預想無くして一の概念を作り得べきか。物理學とは何ぞやと問はば、物理學者は物質運動の法則を研究す

る學なりと答へむ。物質とは何ぞと問はば、エチルギーの所住なりと答へむ。

然れども更にエチルギー其物の何たるを問ひ、又更に其何たるの何たるを問はば、茫々として究まる所を知らじ。物理學の概念と雖も極めて不明瞭なるものなるものを發見すべし。吾人今人文史を定義して、時間に於て繼續せる人類活動の原理を攻究する學なりと云はば、難者は其漠然たるを咎めむ。然れども吾人は凡て彼に向て世間何の科學か漠然たらざる概念を有するかを問はむ。

蓋し概念にして明瞭ならば、吾人豈是の如き概念を説明する尠然たる書冊を要せむや。一個の科學の概念は數行の文字を以て悉くす能はざるを以て、茲に時として之を解釋するに等身の書をも要するのみ。もし強て吾人に向て文明史の定義を求むるものあらば、吾人即ち是一卷を以て之に答ふべきのみ。

文明史の性質は以上論じたる所によりて略々明瞭ならむと信す。之を要するに、文明史は人類活動の主腦を把へて、縦に之を歲時に繋げ、横に之を方處に照し、精神的及び物質的を全範圍に亘りて、社會發達の真相を究明せむことを企つる統一的歴史なり。世人動もすれば政治史を以て歴史の本領となす。之れ外

觀の壯大に眩惑して内部の發動を顧みざるもののみ。吾人は現時の我邦に於て殊に是弊を見る。中學以上の教程にも政治史ありて人文史なし。時は限り無く進み、史料は限りなく増殖し、今より數世紀の後に至らば、政治歴史の攷究は實に非常の時間を費やすに非ざれば研究し得べからざるに到らむ。人文史は是繁縟を貫くに統一を以てし、是冗漫を律するに原理を以てす。庶幾くは政治史と相並びて其欠陥を匡救するに足らむか。

第一編 非文明的人類

第一章 原始人

人類の起原は遙遠なり。人類の起原に関する基督教の傳説。——是傳説の虛妄。——人類は發達の能力を有する動物なり。——人類創生の時代。——洪積層中に人類の祖先を見るべし。——人類學者カーヘル氏の説。——洪積層時代の想像。——木工家屋。——金屬の使用。——鉄と硝星。——物品の交易。——木工に関する希臘史家ヘロドツス氏の記録。——木工事の發見。

抑、原始時代の人類は如何なる状態に於て生活せりや、是の如き原始時代より所謂人文なるものは如何にして發達するを得たりしや。

近世科學の證明する所に據れば、吾人人類は甚だ遙遠なる起原を有す。其始めは實に動物の伴侶にして生活し、更に是の如き動物の退滅し了りたる後に於ても、人文進歩の速度は極めて遅々たるものなりしなり。夫の一個の細胞漸く分化し、初め單純なるものは漸く複雑となり、初め渾沌なるものは漸く清明となり、遂に無數の細胞を統一し調和して高等なる生活を營み得る所の儼然たる一個

人類の起原は遙遠なり。

人類の起原に
關する基督教
の傳説。

の有機體を形成するの過程はやがて移して以て人文發達の狀況を想はしむるに足る。人類の進化は一定時に於て突如として起り來りたるものにあらず、所謂生物學的進化の繼續として觀察するに至當となす。是れ已に前世紀の末年より職者の夙に注意せし處にして、殊に近年マルキソンの進化説以來殆ど確實なる科學的根據を得たる者あり。今是を述ぶるに先ち近年迄殆ど一般世人に信憑せられたる基督教的傳説の概要を擧げむ。

人類は造物主たる神の手によりて造られ、生れながらにして正義直實の徳性を具へ、博大なる智力と高潔なる感情を稟有せり。其住處は「エデン」と稱する樂園にして、其處には美はしき天然は潤まざる草木を茂らし、地には清泉湧き、空には佳禽翔り、豊麗なる獸群の野に充つるあり、人は其間にありて永遠の春光に浴し、無限の淨樂を享く。其事業は是樂園を「理め之を守る」にあり。而して「國のすべての樹の果は意のままに食ふことを得」舊約全書創世記二ノ十五、十六。人は又神の命に隨ひて一切の禽獸に命名せり(同二十)。

然れども人は神の許さざりし菓物を食ひし罪を以て、永く是樂土に棲居すること

とを許されざりき。是に於てか彼は先に彼に與へられし一切の慈惠を褫奪せられ、是地球上に墮落せり。然れども其言語と共に樂園と其神聖なる生活とに對する愉快追懐の情は永く彼に賦與せられ、且つ信仰高德の限なき精進によりて、其失へる天國を恢復することは彼が永久の義務として規定せられたり。

斯くして人は神の暗示に本き、動植物の中に就きて其生活に用ひ得べきものと用ひ得べからざるものとを甄別し、以て育成補充收穫の道を習へり(同四ノ二乃至四)。

幾くもなく彼は木石を以て家屋を建築することを知れり(同四ノ十七及六ノ十四)。

金屬の練鑄も亦遂に知らる(同四ノ二十二)。

是事ありしは、其代を以て其歳を推算すれば、初代の原人より凡そ一千年の後なるべきか。

是傳説の虛妄

以上は舊約全書「モーゼ」の第一卷創世記の所載に本く。之れ實に千數百年の間、基督教の勢力の傳播につれて歐羅巴人の一般に依憑せし説なりとす。其殆ど荒唐無稽特殊の解釋によるにあらずれば、毫も取るに足らざることは、素より言を待たざるなり。畢竟之れ宗教々義の爲に事實を捏造、若くは想像したる

人類は發達の能力を具へたる動物なり。

ものにして學術其物の爲に忠實の研究を遂げたるに非ず。されば是問題の解釋は、近世經驗科學の結果に待たざるべからざるや明けし。最近の人類學は、原始人を以て動物中殊に發達の能力を有せるものに過ぎずとなす。蓋し原始人に關して科學と稱すべきもの、興起せしより日尙ほ淺く、未だ遙に其十全を稱すべからずと雖も、最近四十年間に於ける探究の結果は、嘗て人類始原の狀態に就て大體上最後の判斷を下し得べきものあり。吾人の生息する地球の年齢は到底測知し得べからず。宇宙は無數の世界より成り、無始よりありて無終に至るべきもの、其間念々流轉して已まざり、已に過ぎ去りたる宇宙は、已に無限の變形を經たるべく、將に來らむとする宇宙亦無限の化成を遂ぐるなるべし。地球も亦其始め、所謂「アゾイック時代」(Azoische Periode)にありては、一の生物だも有せず、今日地球上に生息若しくは曾て生息したりし千種萬別の動物は、其始めは唯一若くは極めて少數の種原より出で、非常に長久なる歲月の間に受けたる極めて緩慢なる變形によりて、漸々進化し來りしものにて

人類創生の時代。

外ならず。其最初の生物の出で來たりたる状況、もしくは時代に關しては、遂に精確なる科學的知識を得難きが如し。

夫れ原始の人類は、何れの時代に於て初めて生存せしものなりや。是れ一に地質學上の研究に依らざるべからず、何となれば原始人に關する吾人の知識は、専ら其遺物に依るの外なく、而して其遺物は或地層の中に發見せらる。故に原始人の時代は是の如き遺物の發見せられたる地層の時代によりて、決定せらるるの外無ければなり。

人類の遺跡の發見せられたるは地層歴史の近世紀なる第三紀層、及び洪積層(Mitteleozän und Diluvial Periode)なりとす。第三紀層中に於ける人類最初の生息を唱へたるものは、佛蘭西のブールゴア氏及び葡萄牙のラペーロー氏なり。然れども今日多くの學者の説によれば、是第三紀層は水力の爲に著しき變動を被りたる時代なるが故に、其中に發見せられたるものは未だ以て直に當代の産物と断定すること能はず、之れ或は他より漂流し來れるものなるや俄に知るべからざる

洪積層中に人類の祖先を見らるべし。

なり。故に是説は更に一層確實なる根據なき以上は、未だ一般の認容を得る能はざるが如し。

洪積層中に人類の祖先を見得べしとは、今日人類學上の通説なるが如し。然れども是説も比較的近年に至りて行はれたり。夫のデオルマ、キユビエー氏(一七六九—一八三二)が、地皮の猛烈なる變狀ある毎に其生物は悉く絶滅し、新地皮上に更に全く新しき生物を創生す、人類はた是創生物中の一なりとの大膽なる設想は、近世地質學者の一時代を作りたる、チャールズ、ライエル氏(Charles Lyell Principle of Geology)の出る頃まで、歐洲學術界に行はれたりき。ライエル氏其大著「地質學の原理」を公にし、精透なる實驗に本きてキユビエー氏の説を駁して曰へらく、地皮は決して猛烈なる急激の變化を爲せるものに非ず、實に無數の年月によりて漸次殆ど覺知すべからざる變形を累積し、遂に現今の狀態を成したるものなりと。マル井ン氏が動植物の種類は決して不變なるもの非ず、所謂同科目に屬する種類は同族中多くは消滅したる他の種類の變化せるものなりとの進化説は、畢竟ライエル氏が地質學上の意見を生物學上に應用したるものとして

人類學者カ、ヘル氏の説。

見ることを得べし。蓋し現今生存する動植物の祖先を過去紀の地層中に發見し得べくむば、人類の祖先も亦是中に求め得べきと明なりと謂ふべし。實に洪積層中に於ける人類先祖の生存は、多くの地質學者及人類學者によりて立證既明せられたり。今左にカ、ヘル氏が記述を轉載すべし。

洪積層時代に在りては、現今に比すれば北極の氷田尙非常に宏大にして、スカンジナビアの半島は勿論、イングランドの如きも、ティムス河以北は全く其下に没せられ、獨逸もライン河口、ハルツ山及びエルツ山の如きは此大氷田の南界なりき。亞細亞に在りては、カムサツカ半島、オコック海及びバイカル湖に至り、北米に在りてはカナダ全土を没してオハイオ州に達したり。又歐羅巴に於ては此の大氷田の外に、アルプス及びピレニース兩山の氷田あり、以て南歐諸半島の西部及び中部を蔽ひたり。前記の大氷田の南端と、此二氷田の北端との中間に在りし一帯の土地は、氣候の凜烈なりしに似ず、植物繁茂して動物蕃殖したるは、今其遺骨に徴して之を知るを得べし。學者此の時代を氷雪時代と稱す。

當時の動物類の遺骨を掘出し、解剖學的の想像を以て之れに皮肉を附し、詳説を加へたる書類多しと雖も、吾人は就中主要なる種類のみを説かん。從來シベリア地方より出る象牙と呼ぶものは、現今の象牙にあらざりして、『マンムート』(Mammoth)と稱する象に似、長毛を生じたる巨獸の牙なることは、其シベリアの氷田中に埋没せられ、腐爛せずして存在せるものを發見して之を知り得たり。此の巨獸の皮肉尙は新鮮にして僅かに數日を經たる屠牛の如く、胃中には多く唐檜の綠葉あるを見たりと謂ふ。故に此の巨獸は雜草の外樹葉をも食ひしものなり。聞くフンブルグなる動物園の巨象には、夜間百斤以上の藨草を與へ、晝間數十斤の蕪菁と巨大なる麵飽とを食はしむるを要すと、然るに象に比すれば更に長大なる『マンムート』の群棲したる時代には、實に莫大なる食料を要したるならん。當時植物の繁茂せる狀況推して知るべきなり。種々の咬嚼族及び犬族の動物の外、穴熊、鬣狗、山羊、羚羊、麝香牛、及び馴鹿等多く、第三紀層時代より連綿其跡を絶たざる種類も亦た寡なからざりし。(フンブルグ、カイベル氏、人類及人種、關氏和譯)是洪積層時代に人類の生息せしことは歐洲諸國に於いて同層中より發掘した

る骨片、及び石器等によりて十分の信を置くに足る。而して當時已に『マンムート』の如き巨獸を制御して其生存を維持し得たる人種は曾て絶滅せること無く連綿相傳へて今日の歐洲人種となれること、其骨格の變更せざることを恰も洪積層時代の馴鹿と今日の馴鹿との如きこと、又各種族の生存は其時代を均ふし沖積層時代に遷る以前已に完全なる骨格を有し、決して劣等人種を代表せず、唯だ開化の低度なる國民の體格に同じきこと、及び現に歐洲人種中にも其純粹なる原型を維持せるもの希にして多くは混淆種族なること(カイベル氏人類及人種は確實なるに庶幾きが如し)。

今試に是等諸種の遺物に本き、洪積層時代に於ける人類生活の狀況を想像して、其人文を描寫せむか。是時代の人類は、『マンムート』穴熊、羚羊、馴鹿等の伴侶として、森林又は巖穴の中に棲み、是等の野獸を狩獵して其衣食となすの勇氣と智力とを有せしならむ。樹木の根節、及び燧石より、釘、矢、鏃、鎗尖等を造り、又は石材をとりて斧、槌を造り、乾麻を以て之を結合するを解せしならむ。是時代の後期に至りては、家畜の飼養は普く知られ、耕作も亦次て行はれ、麥を挽きて麵飽を作り、麻を

洪積層時代の想像。

杙工家屋。

つむぎて絲繩を製することを知りしならむ。人は皆家族を組織し、父は家長として絶對の權威を有し、諸種の分業も亦老幼男女の間に行はれしならむ。貝葉の中央を穿ち、之を連貫して獸の牙列を摸し、戦勝の標章として頸邊を飾りたるも此時代ならむ。氷雪時代の後期に至りては、杙工に成れる矮屋は自然の巖洞に代りて人間の住居となり、諸種の家具は木板によりて造られ、其表に描かれたる輪圈螺旋等の紋様は、後代美術の濫觴を示せり。今や死者を葬るにも、一抔の土封を以て満足せず、巨大なる石材を樹て、其三面を圍み、蓋ふに他の均しく巨大なる石材を以てし、以て其墓標となせり。是の如き標墓の今日亞弗利加、亞細亞、歐羅巴、及亞米利加の各地に發見せらるゝもの一にして足らず。以て原始人の間に於ける死者崇拜の遺蹤を認むべく、又以て靈魂不滅敬神等の宗教的感情の萌芽を見るに足るべし。石片の衝突、樹木の摩擦が、一度び人工を以て火を作るとを訓へしより、生肉は烹られ、麥粉は炙られ、諸種の什器は焼かれたる粘土によりて製作せられ、金屬の鎔鑄も亦漸く行はるゝに至れり。爐邊を繞れる家族の團樂は、尤も自然に來るべき結果にして、それが人心の和衷協同を奨進するに於て、少

金屬の使用。

ざる效力を有したること蓋し亦疑ふべからず。

鐵の殞星。

金屬の使用は、人文の發達に於て一新時期を劃したるものなり。其始めて用ひられしは銅なり。是れ是金屬がまゝ自然の状態に於て發見せられ、又他の鑛物と混在せる者も容易に分解せられ得べければならむ。錫と銅との合金は、大に其硬度を増加するを以て、青銅の用は夙に知られたるが如し。鐵に至りては頑硬鋼脆にして、甚だ洶治し易からざるを以て、其使用法は比較的後代に知られたる。然れども一たび是貴重なる金屬の使用法にして知られたる後は、人文の面目も更に一段の新を加へたるべきは蓋し疑を容れざるなり。而して人類の初めて知りたる鐵は、想ふに殞星中に包有せられたる物なりしならむ。之れ希臘語の *σίδηρος* (鐵) の *σίδηρος* (星) に於ける、埃及語の *banep* (鐵) が同時に「天より落ちたるもの」の意義を有する等の事例によりて、略推斷し得べきが如し。而して原始人は、金屬の鎔鑄を以て一種不可思議なる技術となし、之を火神の靈力に歸せり。希臘の神話に於ける『キクロプ』は、即ち是傳説を繼承したるものなり。又原始時代にありては、人類の居處一定せず、東漂西泊常無かりしを以て、物品の交易亦

物品の交易。

弘く行はれ、一の部屬によりて發明もしくは創始せられたる事物は、比較的狹隘なる範圍に生息せし、全人類に傳播せられむことは、甚だ困難なる事にては非りしなるべし。希臘最古の史家ヘロドツス氏が、ウラル、アルタイ間の地方より多くの商隊が金屬の奪掠物を希臘に輸送せしことを記載せるは、原始人漂泊の當時尙其跡を絶たざりしことを示めせるものなり。

金屬、殊に鐵が人類の所有に歸せしより、人類は又昔日の人類にあらず。石骨、象牙等の自然物に依頼せざるは勿論、種々の器物は任意の型樣によりて作られ、相稱線條の美を具へたる素朴なる美術品も亦漸く現はれたり。夫の杙の上に造築せられたる家屋の如きも、蓋し是時代の産物ならむ。是杙工事に關しては、カウソンスの「スキユタイ」人に對するヘロドツス氏の記述あり、其文に曰く。

プレシ阿斯なる湖の中央に、長杙の列ね植えられたる上に小舎立てり。只一條の狹き橋ありて、陸に通ずるのみ。是杙は太古は市民の共同して樹立したるものなりしが、後に至りて一の法則を設けたり。即ち人若し結婚する時は、其新婦の爲に三本の杙をオルベトスなる山より切り下ろし、之を湖中に樹つ

杙工に關する
ヘロドツスの
記録。

杙工事の發
見。

ることなり。人々は杙の上に各々一個の小舎を有して之に住む。舎には一個の下降口ありて湖水に通ず。小兒は其過て水に溺れむことを恐れ、繩を以て繫縛す。家畜を飼ふには、魚類を以てす。云々。(ヘロドツス、五ノ十六)

是杙工の事は、是希臘史家の記録に名のみ傳はりて、人永く其何物なるかを知らざりしが、西曆一千八百五十三年、歐洲の大旱魃に際し、瑞西チユーリヒ洲の湖水の涸落によりて、端なくも幾多の古杙、水面上に現出したり。時の學者はヘロドツス氏の記録を追憶して、忽ち之に注目し、杙内の水底を探りて、礮石、木炭、斧鈞等種々の貴重なる遺物を採收し得たり。是發見の一度、喧傳せらるゝや、歐羅巴の人類學者及び考古學者は、競ふて諸國の湖水を探索し、今日まで無慮二百有餘の杙工の遺跡を數ふるに至れり。是等の杙工及び其遺物に據りて、原始人の状態に關する知識は一層の確實を加へたり。

今是の如き水中の住居は如何なる理由ありて然るやを考ふるに、蓋しこれ敵人、殊に熊狼等の野獸の襲撃に對する防禦の手段に外ならざるべし。湖心に家し、出入一橋あるのみ、進退座作、一に小舎の中に限られ、奔馳縱横の便を欠く。殊に

四面水に圍まるゝを以て濕潤甚だしく、冬季の如きは其の生活に非常の困難を感ずべし。是の如き困難不便を忍びて尙ほ且是水中に棲息せしを以て之を見れば、當時外來の危害の如何に激烈なりしかを想ふべきなり。然れども人文漸く進み、社會の躰別亦漸く具備し、隨て比較的永續の平和を見るに及びては、代工上の小舎も亦漸く廢棄せられしこと、猶中世紀の末年に於て平和の克復と共に、人民漸く其山林の生活を捨て、平原に市邑を建設せしが如かりしならむ。

以上原始時代の人類の狀態は素より其詳細を盡せるものに非ずと雖も亦以て大躰の記述となすに足らむ。若し夫れ斯の如き原始的民族か如何にして所謂歴史的民族となりしとを得しか、地球上一切の民族は必ずしも人文史上に其位置を占得せるものに非ず、所謂自然民族(Naturvölker)と所謂人文民族(Kulturvölker)との差別は、今日尙歴然として辨すべし、是の如き區別は如何にして生ぜしか。又所謂自然民族の生活狀態は如何。是等は次章に於て説明すべし。

第二章 自然民族

自然民族。
人文民族と自然民族との差別。

人文民族と自然民族との差別。——自然民族は自然に制せられ、人文民族は自然を制す。——自然民族の生活狀態。——熱帯及極帯地方に人文の發達せざる理由。——自然民族と人文民族との差別は程度的にして種類的に非ず。人視的説明。——宗教的意識の發達。——自然宗教。——感情思想の發表。——美的感覺。——歌謠。——食人俗。——食人俗の起原。——黒人の生活。——黒人の詩歌及俚諺。——極帯地方の自然民族。——極帯民族の宗教心。——牧畜民族。——熱帯極帯兩地方の自然民族の發達。——「モンゴロ」人の詩歌。——結論。

一切人類は必ずしも一樣の資性を稟有せず。思索辨證に長ぜるものあり、空想信仰に富めるものあり、現在世を尙びて多樂的なるものあり、未來世に憶れて多苦的なるものあり、其思想は超絶的形而上的なるものあり、實驗的形而下的なるものあり、道德を崇ぶものあり、宗教を旨とするものあり、情に冷熱の差あり、智に明暗の別あり、意に強弱の異あり、世界を通じて一律に規する能はずと雖も、然れども苟も其名を世界人文の史上に列ねたる人類には、一の欠如すべからざる特性ありて存す。何ぞや、他無し、自然に制せられずして却て自然を制するの

自然民族は自然に制せられ、人文民族は自然を制す

自然民族の生活状態

特性なり。換言すれば自然界に對するの態度は、常に受動的にあらすして能動的なるの特性なり。是特性の有無もしくは多少は、やがて人文民族と自然民族との差別の存する所以なり。今日地球上の人類を通觀するに、世界人文の過程と全く隔絶して毫も爲す所無く、其れ自身の間にも何等觸目すべき程の人文を有せざる、所謂自然民族の群團を處々に散見す。幾多の旅行家、探検家等の告ぐる所によりて其生活を察すれば、彼等は其名に呼ばるゝ如く、殆ど自然界の一部として存在し、水土たらず、動植たらずして、人類たる所以の殊性を發揮すること、極めて微々たるものなり。彼等は専ら外界の勢力に依頼し、其與ふる物を取りて與へざるものを取らず、自然の強迫あるに非ざれば行動せず、其隨從する所のものは先天の本能のみ。一に感情の奴隸となり、時に隨て推移す、素より一定の意志あるに非ざるなり。猶は歳序の経過は四時の反覆に盡くるが如く、彼等の一生にも大なる變化なし、一朝又一夕、茫々として起伏するのみ。若し彼等に思想あり、道徳ありとせば、その慣習によりて固定せられたる第二の本能ならむのみ。彼の精神は不自由なり、

自ら其意志を撰擇決定すること能はず。將來の謀慮に乏しく、只眼前の満足を求む。苟も眼前の自然的慾望にして満足せられむか、安飽逸樂、又進歩に意なく、改善に志なし。彼等は土地の耕作を解せず、只森林水涯、其食のある所即ち其住所たり。彼等は財産てふ觀念を有せず、故に又權利なく、制裁無し。自然民族は是の如き何れの點に於ても、人文民族と對角線的對比を呈す。

熱帯及極帯地方に人文發達せざる理由

熱帯及極帯の地方に人文の發達無きは、皆人の知る所なり。食物豊富にして毫も收穫の方役を要せざること、及び其の高度の炎熱とは、自ら熱帯地方に於ける人類の懶惰心を誘起し、極帯地方に於ける衣食の欠乏は、ちのづから人類の過度の勤勞を必とするを以て、僅に生存を維持するの外、其幸福を増進するの餘裕なければなり。故に世界の人文の隆盛は、自ら其兩極端の中間たる温帯地方に於て初めて見得べしとなす。

自然民族と人文民族との

然れども自然民族と人文民族とは、程度の差にして種類の別に非ざること

自然宗教。

動的態度を取れる者に非ず。之れ野蠻人の宗教が遂に永く荒唐瑰異なる自然教に留住し、他の民族のそれの如く高尚なる一神教として、哲學科學と並行の發達を見る能はざる所以なり。

感情思想の發表。

内部の感情思想を發表するに、自然民族は言語手態及び身態の手段に依る。蓋し熱心なる談話には不用意に身態の運動の隨伴する者なり、殊に諧調の節度に合したる歌謠は、感情の強弱緩急に應じて四肢の運動を催促す。是れ歌謠に於ける節調は即ち身態の生理的節調の一表章に外ならざればなり。是の如くにして舞踏は一種の技藝として、歌謠と共に性情を發表するの要具となる。亞米利加印度人の如きは、單に沈黙の身態によりて戰鬪、獸獵、戀愛等の事情を最も明白に表示するの技能ありと云ふ。

美的感覺。

自然民族にも審美的感覺の全く欠如せるに非ず。夫の多くの民族間に昔ねく行はるゝ文身の如きは、畢竟衣服其他の附屬物の代りに自己の身態を裝飾せるものに外ならず。更に一步を進むれば、自己の身態の器物に於て、其形骸紋理の相稱を求め、單純なる直線に代ふるに複雑多様な曲線を以てす。而して是の

歌謠。

如き無數の曲線が、壺瓿等の口邊に見るが如く、中央の一點より出で彎曲一番互に離合交錯して再び元の點に集注するは、即ち多の中に一を求むる美的意識に達したるものより。弓矢に施せる裝飾の如きは、明に其美感の醒覺を示せるものなり。

歌謠は多くの野蠻人之を有す。概ね昔戰鬪漁獵に關係し、對句韻に富みて極めて簡單なるを常とす。中夜敵人の陣營を見て奮起せる湖心の杙上に住める北米印度人の歌を聞け。

いざや人々鎗を提げよや。

あつものゝ鍋を釣り上げよ。

吾等は髮に油し、

又顔に彩る。

吾等は歌ふ血汐の歌を、

又つはものゝ酒の歌を。

死者を喜はさむが爲には、

敵者は復讐せられざるべからず。

(同考) 吾等をして敵の血を啜らしめよ。

吾等をして敵の肉を啖はしめよ。

(カリエール氏の翻譯に依る)

食人俗。

是軍歌の中に敵人の血肉を食ふことを言へり。自然民族は、僅に牧者を省きては、殆ど悉く過去に於ける食人俗の痕跡を有し、又或民族にありては今日尙ほ往々之を實行せり。是俗は主として、敵者に對する激怒深怨を漏洩せむが爲には、單に其生命を奪ふを以て足れりとせざるの感情に本く。然れども又同族間にも之を行ふことあり。之れ彼等が人類を見ること甚だ軽く、一個の骨架肉塊に過ぎざればなり。又性慾の満足を得むが爲に、婦人を殺して之を食ふことあり、亞米利加印度人は孱弱者を生ながら墓穴に陥れて之を絞殺す。幼少者は之を

食人俗の起原。

繞りて踊りながら歌て曰く、「生命の神よ、吾等を慈めよ、吾等は彼を吾等の父なる神に送る。希くは彼れ他界に於て幸なれ、而して再び來て吾等と共に穢せよ」と。スマトラの土人は老衰者を樹上に乗せ、家族集りて之を搗滅し、且歌ふて曰く、「時は來れり、菓物は實れり、最早や落ちざるべからず」と。スペインセル氏は其社會學に於て是種の幾多の事例を記載せり。

食人俗が野蠻人間に普ねく行はるゝ一の主要なる原因は、疑もなく食物の欠乏より起る所の外部の強迫に存すべし。野蠻人は元來耕作を知らず、一に其食を漁獵に求む。然れども漁獵の收穫は極めて不定なるものにして、耕地の産物の定時不易なるの比に非らず、故に時としては十數日の間全く其食料を欠くことあり。彼等は是の如き生活に慣れたるを以て、定時食を要すること文明人の如くならずと雖も、然れども忍耐の極限を越えれば、同類相食むに至るを免れず。之れ生存の必要上已むを得ざるなり。又各自の食料は各自之を辨するを要するが如き社會にありては、幼童老者は單に壯年者の負擔を重からしめ、隨

黒人の生活。

て社會全般の生活を困難ならしむるの事情あり。之れ野蠻人が往々衰殘の白首を殺害する所以なり。之れ亦食人俗の一原因なり。後世東洋諸國に行はる隠居の制度の如きは、社會生活に餘裕を有したるより、是の如き食人俗の漸く其形を改めたるものに外ならず。(種族陳重氏隱居論參考)。

黒人は尤も野蠻なる人種なりと稱せらる、然れども彼等の中に歌謠もあり舞踏もあるなり。彼等は資性概ね快調、笑詼に富みて涕涙を知らず。宴遊に當りては極めて奇異なる扮装を凝し、高歌亂舞飽くことを知らず。不幸は直に忘れられ、快樂は停むることを知らず。敗軍の際にありても生殘者は踴躍して其生還を喜び、其親戚朋友の新墳を繞りて長夜の歌舞を催すなり。彼等の宗教は多くは拜物教なり。山や、河や、風雨や、雷電や、其他禽獸草木に至るまで、一舉一物各、其神を有し、其威力を現はすと信ぜらる。彼等は之に對する拜禮によりて幸福を享受し得べしとなす、而して未だ自然現象の間に統一の主宰を想像する所謂一神教的傾向を示めず、に到らざるなり。

黒人は戀を歌ひ、戰を歌ひ、狩獵椰子酒を歌ふ。セナガムピアには世襲の歌人あり。

黒人の詩歌及但歌。

り、其歌に寄せたる褒貶は彼等の社會の一大勢力なりと云ふ。ダホメーに於ては歌人は即興諷諧の詩人たると同時に、古傳説の保存者たり。人民は彼の口より其祖先の功業と冒險とを聞くことを樂む。彼等の歌は抑揚に富み、對句の反覆に煩はし。其節調、鏗利、彫琢の痕なき代りには、自然の人情の流露を見る。蓋し對句の反覆は古代の詩歌に多く見る所の特徴なり。人心の單純にして記憶力の薄弱なるを示めず。希伯來、支那、日本の古歌は、多少是對句の反覆を見さること無し。獨乙の古詩に頭韻の繁きも同じ事情の下に生じたる文學上の一現象なり。

黒人の詩歌にも其想像の優麗なる者少からず。其戀人の容貌を叙しては、「其額
は月の如く、其眼は雲間を漏れし新月の如く、鼻は虹の如く、其唇は甘きこと蜂蜜
の如く、冷かなること清水の如し」と云ひ、又其動作を形容しては「輕風に搖らるゝ
柳の枝の如し」と云へり。其俚諺には警拔なるもの少からず、曰く、「希望は世界の
柱なり」曰く、「天は忍耐するものゝ上を覆ふ」曰く、「灰は之を吹くものに反る」曰く、「凡
人は草の如く多く、善人は眼よりも貴し」。是の如きは吾人の耳にも多少の興味

を感ず。又黑白兩人種の始元を説明するに一の比喩を以てして曰く、昔し世の初めには黒人は白人に優りたりき、然るに智慧と黄金との贈物を得たりし時、白人は智慧を擇び、黒人は黄金を取れり、是貪慾の爲に黒人は永く白人の奴隷となりと。

極帯地方の自然民族。

黒人は熱帯地方の自然民族なり。若し夫れ極帯地方に於ける自然民族に到りては、大に其面目を異にするものあり。彼等は食物の欠乏の爲に將來の準備を爲さざるべからず、積雪を防ぐの住居を作らざるべからず、長夜を照らすの燈火と、酷寒に耐ゆるの衣服とを具へざるべからず。故に彼等は勢ひ勤勉節儉勇悍ならざるを得ず、然れども天然の彼等を福することの薄きや、畢生の盡瘁も僅に其生を保つに足るのみ、之れ彼等が熱帯地方の野蠻人と共に、永く自然民族の範圍を脱すること能はざる所以なり。今其生活の狀態及思想信仰の一斑を左に記せむ。

グリーンランド人の冬時の住居は、土石を以て壁を作り、覆ふに角材、藁、及び積

極帯民族の宗教心。

雪を以てす。夏期に至れば天幕の中に棲む。「エスキモウ」人の家屋は、透明なる氷板又は堅牢なる雪塊より成る。内部の温度によりて溶解せるもの、外界の寒氣に觸れて再び凝結し、天然の結晶を形る。其外觀の壯麗は旅行者の嘆美する所なり。

グリーンランド人は他の多くの極帯地方の自然民族の如く、現世を超えて彼岸の世界ありとなし、其處には人々皆不斷の日光の下に其神と共に永遠の生命を保ち、現世の苦痛欠陥を補充して餘あるへき十分の福祉を享受し得べく、又其處には馴鹿、雪犬、其地鳥魚の類は坐ながら捕獲し得べしと信ぜり。「チニクエン」人は死後の世界には黄金の角ある馴鹿を到る所に發見し得べしとせり。而して是の如き宗教心は多少死靈の信仰と結合せざるもの無し。即ち以爲らく専念の渴仰によりて死者の靈魂と交通するを得べく、依て以て未然の吉凶を卜知することを得べしと。又自然界及び人事界に於ける一切の事變を以て死靈の所爲に歸し、犠牲祈禱によりて死者の歡心を得れば、禍を轉して福と爲し得べしとなす。是れ神託、咒咀、魔術、の彼等の間に依信せらるゝ所以なり。夢の如きは彼

等の尤も不可思議なる現象とする所にして、夢中に遭遇したる所のものを移して直に現實の世界に擬し、以て他界神靈の觀念を固定するは、蓋し尤も自然の徑行なりとす。

牧畜民族、熱帯極帯地方の自然民族との差違。

牧畜民族に至りては、前に述べたる熱極兩帯地方の自然民族と、多少其面目を殊にするものあり。彼等は剝喰の爲に狩獵を事とせず、却て獸類を保存し、馴致し、其繁殖を計り、以て永續の利源を求む。故に彼等の生活は、他の自然民族と異り、目前の利害を超越して多少未來の爲に設備を怠らず。其圍牀の間にあるや、人各温和柔順を以て家長、若くは族長の指令に服従し、敢て睽離狼戾の行爲なし。是れ牧畜的生活によりて自ら訓練せられたる氣質なり。彼等が幾世紀の間連綿不斷の生存を保ち得るは、一に是れ一致従順の氣質の致す所なり。極帯地方の牧民にありては、馴鹿は其至寶なり。其乳と肉とは食となり、其毛皮は衣となり、其骨髄は什器となる。温帯地方の「モンゴル」人は鹿羊及び馬を飼養す。

「ラップ」人「オステアク」人「ツングス」人等は皆其民歌を有す。而して彼等は他の自然民族の如く、興に即して不用意の歌を作るに工なりと云ふ。

「ラップ」人「オステアク」人「ツングス」人等は皆其民歌を有す。而して彼等は他の自然民族の如く、興に即して不用意の歌を作るに工なりと云ふ。歌人は殊に尊敬せらる。「モンゴル」人は歌舞に長ず、沈憂婉微の悲曲につれて、戀愛の哀情を舞ふが如きは、楚々人を動かすの風趣ありと云ふ。其歌の一に戀人を形容して、「其姿は檜樹の如くなよやかに、其秋波は朝紅の如く觸るゝものに幸す」と云へり。亦以て自然の景物と人間に擬することの已に彼等の間に知られたるを見るべし。彼等は又彼等の英雄、殊に成吉思汗(Dschingis-khan)に關する頌歌を愛す。其形式は野蠻人の詩歌に普通なる對句に富む、殊に管に韻脚を履むのみならず、二行毎に其頭語の同音なるを常とす。是れ英雄歌は「アール」民族に於ける叙事詩の發達せざるものと見るを得べし。

結論。

以上記する所によりて自然民族の生活及思想の一斑を想像するに足るべし。之を要するに、是等の民族が、人文史中の國民となり能はざるは他なし。外界の勢力に制せらるゝのみにして、自己の思想の發動によりて外界の勢力を制

御する能はざればなり。是れ素より其土地氣候の自ら然らしむる所多きに居る。熱帯地方は天然の産物饒多にして生活の爲に勤勞するを要せずと雖も、其極熱は人をして放懶無爲ならしむ。極帯地方は之に反し、其極寒は人をして勤勉力行の氣性を起さしむと雖も、而かも天然の産物極めて匱乏して、其畢生の力行も屢に生命を維持するに足るのみ。故に人文發達の爲に活動の餘裕無し。人文は素人間精力の餘裕に本く、是の如き地方にありて其發達を見る能はざるは、素より礙れざるの勢なり。若し夫れ牧畜民族の温帯地方に在るものは、是等の障害を有せざるを以て、一定の土地に定住するに及びては、其間に人文の成立及發達を見るところを得べし。今日亞細亞、歐羅巴の文明國民と稱するものも、其祖先は多く牧畜民族にして、其進化の一階段に於て一定の土地を占得し、耕作によりて始めて永住の基礎を固めたるものなり。蓋し人文の發達は、必ず國家の成立を要し、國家の成立は主權人民と共に一定の土地を必とす。故に游牧の民族が水草を追うて隨時轉居する間は、遂に人文民族たるを得べからざるなり。故に游牧民族は自然民族と人文民族との推移の階段に立てるものと見ることを得べし。

得べし。

第二編 東洋の文明

第一章 總說

東洋の名稱——東洋の邦國及人種——世界の三大思潮及其外的關係

茲に所謂東洋は、歐羅巴全洲を西洋(Occident)と呼稱するに對し、亞細亞及び亞弗利加を指す。西人の所謂「オリエント」(Orient)と同義なり。元來是、オリエントなる語は、羅旬語の日出の義より轉訛し、東方諸國の總稱となりたるものにして、素小亞細亞、埃及、中央亞細亞より印度に至る諸地方を云ふ。支那、朝鮮、日本等は西人別に呼ぶに「極東」若くは「經東」を以てするを常とす。然れども茲には地中海以東の凡ての邦國に對し凡て東洋てふ名稱を適用せり。邦を以て之を名くれば、其主要なるものは支那、日本、印度、波斯、埃及、アッシニウリア、バビロニア、及びパレスチナ。人種によりて之に名くれば「アールヤ」人種、「ハム」人種、「セム」人種、及「ツラン」人種是なり。是中にて支那、日本は「ツラン」人種に、印度、波斯は「アールヤ」人種に、埃及は「ハム」人種に、バビロニア、アッシニウリア、及びパレスチナは「セム」人種に屬す。

東洋の名稱

東洋の邦國及人種

世界の三大思潮及其外的關係

歴史を通觀するに、世界に三個の人文の潮流あり。支那、印度、及び歐羅巴之なり。大勢の上より見る時は、歐羅巴の人文は、其根本に於ては印度と等しく「アールヤ」人種の人文なれども、「セム」人種より受けたる影響と、其風土の異なるとの二個の原因によりて、印度人文と全く其發達の方向を異にせり。印度人文は、熱帯地方に於ける「アールヤ」人種の思想の自然の發達を遂げたるものにして、其勢力は佛陀教の傳播と共に、東の方「ツラン」人種の思想に多少の影響を與へたり。然れども歐羅巴人文とは殆ど何等の較著なる關係を有せず。支那人文は「ツラン」人種のもそれを代表するものにして、他の二者に對峙して古來一種の面目を維持せり。久しく印度思想と接觸したれども、敢て其本來の殊性を失ふに至らず、今世紀の中頃までは、歐羅巴人文と殆ど全く懸絶せり。若し夫れ「セム」、「ハム」兩人種の思想は、むしろ歐羅巴人文と關聯するの點に於て、其歴史上の意義を有せりと見るを妥當とす。

第二章 「ツラン」人種

「ツラン」人種は亞細亞大陸最古の民族なり。「ツラン」人種に関するマツクス、ミルレル氏の説。——是説の價值。——「ツラン」人種に関する最古の歴史的記録。——「ツラン」人種の範圍。——「ツラン」人種の宗教。——人種學上「ツラン」人種の位置。——支那帝國。——老子は支那の國性を體現す。——支那文化の進歩せざる理由。——保守主義。——形式主義。——國民的活動の中心としての儒教。——支那民族の現世主義。——支那民族の宗教心。——支那に宗教の發達せざる理由。——純理哲學の欠乏。——易。——孔子。——老子。——老佛の比較。——文學。——詩歌。——詩歌の實際的傾向。——戯曲小説。——散文。——歴史的著作。——美術。——結論。

「ツラン」人種は亞細亞大陸最古の民族なり。

「ツラン」人種は、恐らくは亞細亞大陸に於ける最古の歴史的民族ならむ。「アールヤ」及び「セム」諸人種が其遷徙を初めし時に當りて、到る所彼等に先ちて土着の住民を發見せり、是れ即ち「ツラン」民族なりしことは、今日略明なるが如し。支那帝國は恐らくは最古の「ツラン」人種の移住より興りしならむ。其言語は最も幼稚なるものにして、他の諸「ツラン」族と同一視すべからずと雖も、其成立の最初の階段として見るべからむ。

「ツラン」人種に関するマツクス、ミルレル氏の説。

今マツクス、ミルレル氏の説に隨へば「ツラン」人種の移動の方向に南北の二種あり、各前後四回に及べり。其初めて南方に向ひたるものは、メイコン、メイナム、イラツツヂイ、及びアラフマフ、トラ諸河の沿岸に住して、所謂「ティ」民族を成し。其初めて北方に向ひたるものは、アムール、レナ諸江に沿うて所謂「ツンクシツク」Tungusic民族を成せり。次に南方に向ひたるものは、大陸各地の已に占住せられたるを見、海を越えて近傍の諸島に徙れり。所謂「マレー」民族を成せり。次に北方に向ひたるものは、幾多の蒙古民族の祖先となり、アルタイ山脈に沿うて漸く西部に移動せりと考へらる。更に北方に向へる第三次の遷徙は、土耳其民族を成し、西の方ウラル山より、歐羅巴の境界に迫れり。又南方に向へる第三次の移動は、西藏、印度に向ひ、後ヒマラヤ山脈を越えて天竺半島の最初の土人となれり。最後に南に向へるものは、タムール民族の祖先となり、後「アールヤ」人種の爲に滅されたり。又最後に北に向へるものは「フィン」民族の源頭となり、シベリアの「サモイーズ」人、西班牙の「バスク」人等是に屬す。而して是等移動の根據地は中央亞細亞の高地にして、其年代は遙に有史以前なりと想像せらる。

是説の價值。

マックス、ミュルレル氏の是説は、専ら言語學上の比較研究の結果に本き、何等古物學上、若しくは歴史上の基礎あるに非ず。故に言語と人種との必ずしも一致せざることの明なる今日、素より厚く信憑するに足らざるべし。然れども一個の臆説としては、他の有力なる反證の擧らざる限りは、吾人の參考に資するを得べし。

『ツラン』人種に關する事蹟の初めて歴史に顯はれしは、恐くは『スキエタイ』帝國ならむ。是れ希臘の諸史家の記録に散見する所にして、近世ローリソン氏がエウフラート河畔の發見物によりて愈々確定せられたり。是帝國の首府の位置は、後の下カルプアの都府のありし地にして、ニニエが未だ大都會として知られざりし以前に昌へたり。其年代は紀元前二千四百五十八年より二千二百三十四年に到る、然れども其他の詳細なる事は今日競として知るに由無し。

是『スキエタイ』帝國と殆ど同時代に於て、一個の『ツラン』人種の大帝國は、亞細亞大陸の東岸に勃興せり。是を支那帝國となす。是古國の人文に就ては後文述べ

『ツラン』人種に關する最古の歴史的記録。

る所あるべし。

『ツラン』人種の範圍。

是人種は今日尙亞細亞の大部分、及び歐羅巴の一部を包有す。言語學上是に屬するものは、『フロン』、『ラップ』、『マキアール』の諸族、西藏人、土耳其人、韃靼人、蒙古人、『タムール』人、及び印度の『ドラビダ』人等なり。東部多島海の諸島も亦是範圍に入ることを得べし。

『ツラン』人種の宗教。

是人種の宗教は明ならず、唯『アールヤ』、『セム』諸人種に見るが如き高尙偉大なる宗教觀を有せざりしことは決して疑ふべからずとなす。其最古の傳説にも、殆ど神の觀念を見ず。只或學者は古代波斯の魔術を以て『スキエタイ』民族より來れりとするれども、其證據亦極めて不十分なり。所詮是民族の天性は比較的尤も宗教に冷淡なることは争ふべからざる事實なり。

茲に一事の注意すべきあり、即ち『ツラン』人種は、人種學上他の諸人種の如く、明白なる一致を有せるものに非ざること、是なり。即ち『アールヤ』、『セム』諸人種に屬せざるものにして、其言語の多少類似せる一群の民族を總稱して假に是に命名したるが如き觀あり。今日尤も進歩せる人種學者の説亦是に近きが如し。

人種學上『ツラン』人種の位置。

今日『ツラン』人種の人文を代表せるものを支那國民となす。左に其特性を述べ
よ。

支那帝國。

自ら中國中華と號し、一切他邦を輕侮して戎狄蠻夷となす所の支那帝國は、
亞細亞大陸の東部に邦し、面積歐洲より大に、人民は世界人口の三分の一に當る。
建國以來凡そ四千年、其文學歴史經典は世界に於て最古なるものの一なり。
是老帝國の古代史を讀みたる人は、誰か其現状の未開蒙昧に驚かさむや。今
日の支那と先秦兩漢、若くは唐宋の支那と、其人文の程度に於て幾何の差あるべ
きや。西歐羅巴の森林に羅馬の文化の未だ其片趾を著けざりし時に當りて、已
に燦然たる文物制度を有したりし國民は、伯林、巴里が世界文華の中心となれる
今日、尙ほ依然として其故態を改めざるなり。而かも支那の歴史は決して靜平
無爲の歴史にあらず、革命相繼ぎ、爭奪相追ふ。獨り其人文の停滞進まざるは何
ぞや。支那は國老いたりと雖も、年尙ほ穉し、否寧ろ小兒の狀態にして而して老
耄したるものなり。傳ふ老聃母胎に止ること八十歳、生れながらにして白髮な

老子は支那の
國性を體現
す。

支那文化の進
歩せざる理
由。

保守主義。

形式主義。

國民的活動の

りと。然らば則ち老子は善く支那の國性を體現したるものと謂ふべし。
支那の文化は何故に其歴史と共に進まざるか。其國民の性質保守的なればな
り。支那の人文は何れの方面に於ても自由の發展を爲さず。一種の形式に則
して常に回顧退嬰に傾く。而して是の如き形式は、國民が初めて將來に實現せ
むとする所の理想にあらずして、却て既に過去に實現せられたる法制にあり。
國民の正學と稱して一般に遵奉するものは儒教なり。而して儒教なるものは、
孔丘が今を去る二千數百年前、堯舜を祖述し、文武を憲章し、即ち所謂先王の道を
演譯して後世の典謨と爲したるものなり。支那人は時勢の推移と共に政教の
變遷すべきを知らず、一意成憲に法りて其教義を實行せむと據す。故に上は國
家より、下は個人に至るまで、其理想とする所は唐虞三代の國家及び個人なり。
是に至りて儒教は一種の形式主義となり、文化の進歩を箝束する一大勢力とな
れり。支那民族の人文が悠々數十世紀の間、何等顯著の發達を爲さざりしは、實
に是形式主義の副致せる保守的精神に職由せずむばあらず。
儒教は實踐道德の主義なり、宗教にあらず。是主義は支那思想の正統にして常

中心としての
儒教。

に國民的活動の中心核子たり。其体制は内外氣運の變遷に隨ひて多少の變化無きに非ず、即ち三代の文化姬周に到りて其頂點に達せしが、秦六王を一にするや、儒書を焚き、儒者を抗にし、世漢に入りて徳教又振はず、偶、佛陀教の東漸に際し、人心靡然として之に赴きしが、儒教の精神は茲に濯滅せるにあらず、宋に入りて所謂宋學派は、儒佛二教の調和を試みしが、幾もなく所謂古學派の勃興ありて茲に周初の儒學は捲土重來の勢を以て支那思潮の眞面目を發揚せり。故に儒教は其始に於ても、其終に於ても、支那民族が第一の實行主義たりしなり。

然れども、民性に適せざる教義は、決して一國の人心を支配すること能はず。儒教の勢力は、素支那民族の現世主義に本くことを知らざるべからず。

支那民族の現
世主義。

支那民族は恐らくは世界に於て尤も實際的の民族ならむ。之れ哲學、宗教、文學、美術の何れも明かに顯示する所なり。「アールヤ」人種にありても、「セム」若くは「ハム」人種にありても、太古にありては其身邊を圍繞する自然現象の高大威烈に對し、抑畏崇敬の極、所謂自然宗教を構成するを常とす。然れども支那人にありては是の如き自然宗教の著しきものを見ず。支那古代の文學に天命、上天、若く

支那民族の宗
教心。

は帝(天)を言ふものありと雖も、吠陀教、若くは猶太教等に於ける神の意義と大に異なるものあり。寒暑晴雨等の自然現象が神爲なりとして信せられたるは事實なりと雖も、神が自由の意志を以て作爲せるよりは、むしろ人間の行爲に關聯して或賞罰的の意義を有せるものとして考へられき。即ち人間は自然現象の起處に對して一種の能動的勢力を有し、以て能く神意を制限し得るものとして、更言すれば、人間は能く神を驅使し得べきものとして、考へられき。湯王が早魃に際し、剪爪斷髮して六事を以て自ら責めたるが如きは、印度人が天を仰で渴仰讚美の外他なきと同日の論にあらず。詩書に謂ふ所の天は、多くは之れ、自然の法則を表示したるもの、孔老諸子の所謂道と同義なるに似たり。

支那古代の文化は北方に起れり。北方の地荒廢落莫、概ね天恵に乏し。支那人が天を畏れ、之を拜したるは之れ人情の自然のみ。然れども是、民族の實際的性質は宗教心をも現實主義の使僕となし、神を拜する間にも實際の利害を遺却せず、天威を畏るゝの傍ら其意を迎合して、預め吉凶禍福を卜せむことを務めたり。易は即ち是思想の傾向を表示せるものに外ならず。是に於てか支那人の宗教

支那に宗教の發達せざる所以

心は其萌芽に於て抉斷し去られ來世未來彼岸を愉快するの念慮は全く其跡を絶ち却て功利求福の現世主義の發達に資するのみとなりぬ。蓋し現世の不圓滿不如意に憐焉たらず如何にかして如意圓滿なる吾理想に描くが如き世界を實現せむと欲するは宗教心の根據なり而も吾人の理想的世界は是現世に於て到底望み得べからざるを見るや是の如き世界は現世を超越せる彼岸の未來世に存在すとなし而して之に到達するには一切現世の繫累を離脱し専念信仰の力によるの外なしとなす。是の如き究竟の理想界こそ異なれ是れ佛陀教にも基督教にも其他一切の大宗教に共通せる要點なり。即ち一言すれば宗教の要素は非現世的たるに存すと謂ふべし。支那民族は非現世的にあらずして絶對的現世的なり。之れ是老帝國に宗教なき所以なり。

純理哲學の欠乏

現世主義とは一切現世の功利に利益なき事物を排斥するの主義なり。故に現世主義の結果として支那民族は純然なる純理哲學を有せず。易の一經は尤も高遠なる哲理を含有すと稱せらる。其宇宙の分出を説き萬物の進化を論ずるの部分のみを取りて之を見れば實に易は儼然たる一個の哲學なり。然れども是

易

れ理の爲に理を説きたるにあらず實は天地人三者の關係を明にし以て天道に隨て人福を全ふせむが爲のみ。其宇宙論進化論を説述せる根本的動機は現實世界の功利に存せることは繫辭傳を一讀せば昭々として明なり。蓋し以爲らく天地萬有の運行し變化し發達する所以の道唯一のみ。太極より天地剖判し乾坤より男女成り日月以て推移し四時以て代謝し生死以て交はり榮枯以て繼く。皆是れ同一陰陽の理が時と處と位とに隨ひ萬殊の事物に對應して其形を變じたるのみ。易の道即是れなり。是道に隨ふものは昌へ逆ふものは亡ぶ。人事に吉凶禍福あり生死悲歡兩々相對して人は其間に展轉す。是等の現象は易道の順逆に依りて起りたる二氣の反影のみ。是故に身を全ふし生を壽うせむと欲せば須らく是大道に順應せざるべからず。故に君子の安ずる所は易の序なり居る時は其象を觀動く時は其變を見る。是を以て天より之を祐く吉にして利あらずと謂ふこと無しと。是れ進化論其物よりは明に人生の實行を説けるものに非ずや。

孔子

孔丘は是思想の實際的傾向を最も明白に示めしたるものなり。吾れ生を知ら

老子。

ず、焉ぞ死を知らむと云ひ。怪力亂神を語らずと云ひしは、現世主義の套語として見るべきものならずや。後世の支那學者が其學を以て正統とせしは、尙に偶然ならずと謂ふべし。老聃の學は、孔丘其他の學に比すれば、多少純理哲學に關する思想を有し、又明晰なる世界觀を有せり。而かも道德經八十一章の大意は、所詮世に處し、生を全うするの道を講じたるのみ。其世界觀として見るべき分出論の如きも、其人生觀に於ける復歸主義、將た厭世主義を演繹する上に須要なる方便として提起せられしのみ。其實際的は、た現世的傾向は、恐らくは一步も孔丘に譲らざるべし。唯現世の幸福を求むる方法に於て、孔は樂天的にして、老は厭世的なるの別あるのみ。且老聃の復歸厭世の教義と雖も、決して印度、アルヤ民族が、内面的考察によりて解脱を愉快したると同日の論に非ず。印度人にありては、解脱を得る方便は唯心的活動によりて法界を服離し、もしくは之を滅盡するにあり。然れども老聃にありては、則ち然らず。唯大道の自然に結合し、從順し、若くは適應するにあり。故に涅槃と復歸と其形同じきも、其實大に異なり。是を要するに、老聃の説と雖も、其形式こそ多少の特色あれ、其精神に到り

老佛の比較。

文學。

ては純然たる支那的思想の立場に住まりたるものと謂はざるべからず。莊周以下の所謂南方學者の説、亦是變體裡を脱せざるなり。夫れ然り。支那思想の中心として、儒教が支那民族に固有なる現世主義の上に立ち、盛に上代先王の遺訓を祖述したるの結果は、遂に一種の嚴峻なる形式主義となり、國民の一切の活動を箝束し、其自由の發達を拘制するに到れり。是に於てか、『古の道に非ず』てふ一語は、殆ど無上命令として、是民族の行動を支配せり。其人文の停滯腐爛せる、素より其所ならむのみ。進歩の民は、其希望を前途に認めざるべからず、過去を理想とする國民には、退歩あるのみ、滅亡あるのみ。文學も亦徹頭徹尾、是保守主義の模型の中に鑄造せられたり。且其淺薄なる現世主義は、詩歌の中に教訓を予へたれども、空想と詩趣とを予へず。激越なる感情も亦冷刻なる利害の秤量によりて、十分の發揚を見る能はず。是を以て概ね淺薄近實に傾き、詩的情熱を以て能く人心を昂揚するもの少し。其雄大悲壯と稱するものは、むしろ、其格調等の形式によりて重きを爲すもの、如し。支那最古の文學を詩經となす。若し一般書典の中に就て古きものを求むれば、

詩歌。

尙書の今文三十四篇もしくは山海經を推さるべからずと雖も、純文學としては先づ指を詩經に屈すべし。詩は素賦詠嘆の聲にして、人情自然の流露なり。然れども三百詩篇を通覽する時は純粹の抒情詩として見るべきもの甚だ少なく、多くは教訓の意を托したるものなるを發見すべし。偶々真正の抒情詩あれば、後世の註者動もすれば之を附會して勸懲の意ありとなす。(召南草蟲の)。男女の愛情に關するものも、概ね家族制度より打算し來りたる教訓的儀式にかゝる。例せば關雎、葛覃以下然らざるなし。偶々王風大車の章の如き、男女自由の戀愛を抒ふるものあるも、「豈不爾思、畏子不取」と云ひ、「豈不爾思、畏子不奔」と云ふに至りては、形式主義に服従するの意志如何に強固なるかを想見するに足る。之れ吾れ爾を愛すと雖も、士大夫を恐るゝが故に敢て共に走らずと云ふにある也。又召南行露の章に、「厭浥行露、豈不夙夜、謂行多露」と云へり、是れ禮によりて情を抑ふるの意に外ならず。何れも現世の制裁を顧慮するの致す所なり。又鄭風鷄鳴の如き、もしくは唐風蟋蟀の如き、何れも實利形式の一途に偏し、決して自由なる人情の發揮せるものに非ず。其他人事を離るゝ題目を詠するもの甚

詩歌の實際的傾向。

だしく、政治の汚隆を諷し、君侯の德澤を頌したるもの、三百篇を通じて滔々として然らざるは無し。是の如く支那民族にありて、詩は徒に娛樂暢思の爲に作られしものにあらず、實際の人生と爲すあらむが爲なり。されば孔子の之を編纂したるも、其意専ら教育政治の用に資せむが爲にてありしなり。故に「詩三百を誦し、之に授くるに政を以てし、達せず、四方に使用して專對ふる能はず、多しと雖も奚ぞ以て爲さむ」と謂へり。功を論じ徳を頌するは、其美を將順する所以なり。過を刺り失を諷るは、其惡を匡救する所以なり。先王是を以て夫婦を經し、孝敬を爲し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移す。詩の成りたる所以、又詩の用ひられたる所以は畢竟是に外ならず。夫の情に發して禮義に止まるは、實に是教訓主義の自然の結果に非ずや。源泉は以て下流を知るべし。後世に於ける支那文學は、畢竟是實利主義、形式主義の精神を繼承せるものにして、一般に論ずる時は、四千年の文學は遂に是書圈を顛脱せざるなり。以爲らく詩は以て志を暢べ、文は以て意を達す。苟も名教

戯曲小説。

に益なくむば、如何なる絶妙好辭と雖も狂言綺語と擇ぶところ無し。是を以て士君子の文を屬し、詩を賦するや、先づ人心世道に裨益するの如何を思ふ。徒に工を弄し文を舞はすは文士の末技として輕蔑せられしなり。是故に戯曲小説の如き純文學に屬するものは、上代に發達せず、莊列の寓言を初めとして、穆天子傳、飛燕外傳より、五朝小説に輯録する所少からずと雖も、概ね坊間の戯具のみ、士君子と稱せらるゝ上流社會に行はれたるものにあらず。元以降、明清二朝に亘りて雜劇小説漸く流行し、水滸傳、三國志、西遊記、紅樓夢、桃花扇等の名著あり。湯若士、金聖嘆、李笠翁等の名家あり。然れども之れ儒家正經の容れざる所、所謂填詞一道は文人の末技なりとは、士君子が戯曲小説に對する逡遁の意見として見るべきなり。故に小説の作者も務めて自ら抑運し、博奕戯具を以て自ら比し、勸善懲惡を以て自ら辨ぜり。李笠翁が所謂淺薄の事を假りて勸懲の意を發すとは、即ち是れ戯曲小説が依て以て文學として存在したる第一の條件に外ならざりしなり。

散文。

實利主義と共に、一種の狹隘なる形式主義は、文學を支配せり。之れ支那文學の

歴史的著作。

發展を沮遏したる一の主因なり。詩歌も文章も共に一定の典型あり、苟も之に應せざるものは以て破格となす。素自由に達意を主とすべき散文にありても起結照應等幾多の複雜なる桎梏あり、思想の自由なる活動も之に矜式するを必とするを以て、動もすれば空言虛文に陥るの弊あり。古より大論策の支那文學に乏しきは、是形式主義の力與れりと謂はざるべからず。支那には真正の歴史的著述に乏し。是れ亦其實利主義の影響する所なり。春秋以來史を以て稱せらるゝもの一にして足らず、然れども多くは歴史其物の爲に編述せるものにあらずして、或は世道名教の爲にし、或は王者經綸の用に資す。其材料の取捨、評論の上下、亦自ら公平無私なること能はず。所謂歴史の客觀的叙述は殆ど之を見ずと言ふも、敢て過言に非るなり。已に實利の眼を以て一切を觀察す、是を以て其歴史は多く政治史のみ、即ち王者興亡の變遷史のみ。一藝一學、若くは一般人文の歴史に至りては、殆ど之を見ざるなり。是の如きは獨り歴史に就て殊に言ふべきにあらず、一切の事物概ね是なり。支那は最も美術に乏しき邦なり。古代にありて特殊なる建築の様式を有せず。

美術。

天を祭るは堂に於てせずして野に於てす。茅茨土階、尙ほ帝王の居たるを妨げず。古代に於て人工の見るべきものは溝渠城地のみ、是れ耕作住居に欠くべからざるものなればなり。繪畫彫刻は後代の創始にかゝる。佛教の輸入と共に印度式の堂塔は初めて支那人に知られたり。然れども何等較著の發達を見ずして已みき。音樂は古より大に行はれ、詩書等六藝の一として奨励せられたり。然れども音樂其物に對して美的欲望を満足せむが爲に非ず、其目的は専ら教育にありしなり。即ち人心の物に感ずる所を節し、其性情を養ひて道徳に和順せむが爲なりき。孔子の所謂「詩に興し、禮に立ち、樂に成るもの」として實行を旨とせざる事なし。

孔子曰く、「禹は吾れ間然する無し、飲食を非して孝を鬼神(祖先)に致し、衣服を惡して美を黻冕に致し、宮室を卑して力を溝洫に盡す。禹は吾れ間然する無し」と。吾人は是言の支那思想の精神を表明するに於て亦間然する無きを認む。社會の上層より下層に至るまで、是の如き精神によりて浸潤せられたる國土に自由なる美術文學の發展し得べき謂はれ無きなり。

結論。

是を要するに、支那民族の性質は極めて淺近なる功利主義の上に立つ。苟も實際生活の上に多少の利益を與ふるものに非るよりは如何なるものも不急無益として排斥せらるゝの傾きあり。而して是功利主義は進歩的に非ずして、保守的なり。即ち唐虞三代の古帝王、即ち所謂先王之遺業を昧認し、一切の行動凡て之に則するは支那四千年の歴史に於ける中心思想なり。是保守的精神は、後世に至りて一個の鞏固なる形式主義となり、其歴史的情性は殆ど絶對無上の威力を以て國民の思想行爲を箝制するに至れり。是れ支那歴史に變遷ありて發達なく、回顧ありて前進無き主要なる所以なりとす。而して又是れ是老大帝國が世界人文史上に於て極めて無意義の地位を占得したる所以なりとす。

第三章 「アールヤ」人種

「アールヤ」人種の範圍。——言語學上の證據。——原的「アールヤ」人種の故郷及移動。——古代東洋文化研究の必要。——年代の順序より見たる東洋各國の人文。

(上) 印度

印度の地勢。——印度の土地。——印度の天然と其人文。——印度の人種「ドゥ
ビダ」人「アールヤ」人の關係。——印度の人文は宗教の上に立つ。——韋陀
教。——其神。——靈魂。——韋陀教の四經典。——優婆尼沙土。——社會制度。——婆羅門。
——婆羅門教。——摩奴の法典。——六哲學派。——婆羅門教の隱微と佛陀教
の勃興。——佛陀教。——其精神及教義。——佛陀教の無神論及虛無主義。——
佛陀教の傳播。——印度の文學。——印度の政治史。——印度と希臘との交渉。
——婆羅門哲學の共同思想。——解脫。——各哲學派に於ける解脫の思想。——
解脫と厭世主義。——解脫の二方法。——形林的方法。——形林的方法は考
察的方法に違するの準備なり。——知識を重す。——印度人の考察的傾向。——
「自我」の考察。——真理を知るは真理なる也。——韋陀教の尊信と自由
思想。——韋陀教に對する六哲學派の反抗。——輪理。——輪理の理論的根據。
——輪理思想の原因。——靈魂不滅。——生命の同一。——道德的應報。

(下) 「イワン」民族
其土地。——其人文の位置。——其宗教。——「ヴェンドフエスタ」——「イワン」民
族の文字。——其美術。

アールヤ人種
の範圍。

「アールヤ」人種に印度歐羅巴人種と稱す。印度及び歐羅巴の主要なる民
族を包含せるを以て名く。之れに屬するものは歐羅巴に於ては希臘人拉丁人

言語學上の證
據。

「チエートン」人「即ち獨乙民族」「ケルト」人及び「スラフ」人亞細亞にありては、印度及
び波斯の二國民なりとす。
是等の民族が元同一人種なることは、最近言語學の研究によりて知られたり。
即ち印度の古語「サンスクリット」(梵語)及び波斯の古語「ゼンダ」語と「ケルト」「チ
エートン」「スラフ」希臘及拉丁語との比較研究上、是等諸語の間に存在せる幾多
の類似は、一切歐洲人と印度波斯人との祖先は古代に於て同一方處に棲居せり
し同一種族なることを確證し來りたるなり。

原的「アール
ヤ」人種の故
郷及移動。

是原的「アールヤ」人種の故郷に關しては、學者の間に異説ありと雖も、西方亞細亞
に於けるオクスス河畔の地、今のバクトリアナの近傍なることは、客疑無きが如
し。是れ素より歴史以前の遙遠なる時代なりとす。斯くて人口の繁殖、もしくは
は外敵の襲來等の事情の爲に、是原的「アールヤ」人種の移動を見るに至れり。即
ち一派は西の方裏海の南岸より、アルメニア及び小亞細亞の地を経て希臘羅甸
民族となり、一派は東の方、ホンツークーシユの山脈を超へて、信度河を渡り、パン
ジャブより天竺半島に南下して、印度「アールヤ」民族となり、又其一派はバクトリ

古代東洋文化
研究の必要。

アナの地よりサリフ山を超へ、直に南を指して波斯民族となれり。其移動の途次歷程の如きは茲に細説せず。

故に歐羅巴の人文は、印度波斯の人文と素同一人種の手によりて經緯せられたるものなり。茲に土地氣候の影響と、外來民族の勢力とを抽離して、其文化の根本的精神に看到する時は、吾人は是三者に於て「アールヤ」的の人文の特性として見るべき共有要素を發見すべし。是れ人文史上に於て最も興味ある概括の一次り。

數十年前以前までは、西洋史家は歐羅巴以外に歴史無しとなし、希臘羅馬より筆を起して、毫も希臘羅馬以前若くは以外の歴史、若くは邦國に關與せざりき。是の如きは史學の進歩せる今日より見る時は、實に大なる謬見なり。東洋亞細亞の人文が歐羅巴古代の歴史と密接の關係を有せることは、今や明白なる事實となり。例せば希臘及び羅馬の技術と「エニベ」のそれとの聯絡の精細に究透せらるゝあり。埃及の象形文字と「アッシュリア」の楔形文字の研究によりて、二國の歴史的關係に一生涯の開拓せらるゝあり。是等東洋諸國の希臘羅馬に於ける關

年代の順序より見たる東洋各國の人文。

係は種々の點より考索せられ、設想せられ、茲に歴史は、近世に於けると均しく古代に於ても亦、支那印度を省き、一昧を形成せしことの漸々明瞭なるに到れり。故に歐羅巴人文の歴史を解せむと欲するものは、必ず先づ東洋の文化を一瞥せざるべからず。

今試に年代に順ひて東洋各國の人文を觀察せむか。埃及は支那最古の記録に先つこと少なくとも十世紀の當時に於て、已に高級の人文を有したりしに似たり。ペロニアは印度人が尙ほイランの地方に游畜を事としたりし間に、已に文化の中心となりしが如し。印度人の人文が信度河畔に沿ひて進み、其梵語が完全なる文學的言語となりしは、耶穌紀元前凡そ千五百年の頃ならむ。然れども印度の韋陀は最古の文學に非ず、埃及の「アトリス」の一部は、僅に三千年前の記録にして、同じ邦の象形文學の創始は、更に悠遠なる古代なりと思惟せらる。カルアヤ人の祖先は已に神學を有し、法制を有せり。支那文學の最も古きもの即ち尙書今文及び易山海經と雖も、耶穌紀元前凡そ十二世紀を超へず。然るに西曆紀元前二千八百年に於ける埃及は第三王朝の下に已に農業、工藝、美術を有し、

社會制度の整備亦見るべきものありき。キゼの「スフ・ノクス」及び其附近の金字塔は實に人類最大の製作なり。天文學は各國に於て尤も早く發達したる科學なり。即ち埃及にありては紀元前二千七百八十二年、ペロニアに於ては二千二百三十四年然れども支那に於ては一千二百年を超へず。是を以て之を見れば人文の最も古きものは埃及にして、次ぎはペロニアの「ハム」民族、次は印度波斯、次は支那なるが如し。其方向は西より東に漸す。暫く岐路に入るを避け、先づ東洋に於ける「アールヤ」人種の主部たる印度より初めむ。

印度

印度の地勢

(上) 印度

北には世界第一の高山たるヒマラヤ山脈は巍々乎として万古の雪城を築き、茫々たる信度河の廣原は其西北を限り、東は恒河の大江、洋々として分流支派アラシイ千里の野に瀰ぎ、一帯の高原、西より東より漸く正南に狹まり、絶南コモリンの一角は印度洋の森茫無際の際波を承けて、茲に亞細亞大陸の南部に於ける一大楔狀の半島を形成す。之を印度となす。

印度の土地

印度の地や、天恵に富めるの點に於て世界其比を見ず。殊に信度、恒河二江の畔に於ては地味の饒沃、其生産の多種豊富、實に驚くべきものあり。コモリンの南八度を出づれば、是れ赤道の直下、南太平洋の定期風は定期の雨を齎し、河流と共に土地に瀰漑す。人は衣食に耕織するの勞なく、生れながらにして安居逸遊を樂むことを得。海は其眞珠を捧げ、地は其黄金を供し、樹木は菓實と香芬と飲料とを與ふ。椰子樹の蔚蒼たる緑陰は、彼等の爲に晝は則ち炎天を掩ひ、夜は則ち雨露を凌ぐ。其葉は結びて衣となすべく、其實は採て食とすべし。若し夫れ燃ゆるが如き烈日の下に困臥したる長身黝面の人が、晩涼に浴し、「ター」の美酒に一陶の醇を傾け、恍然として睡に就くの状況を想見すれば、印度人文の特質自ら付度し難しとせず。

印度の天然及其人文

雄大なる山、汪洋たる川、雷電風雲の變幻奇怪なる自然現象、瑰麗異大なる自然的産物、極熱の天候、是等は印度アールヤ民族の人文に尤も明白なる特質を鏤刻したる要素なりとす。

印度は古來一定の獨立せる國家の下に統一せられたること無し。故に人文的

國家若くは王國と言はむよりは、寧ろ人文的土地と云ふと妥當とす。後世にありては是大半島は宛然として種々の異なりたる文化と特性とを有せる數多の民族の展覽場の觀あり。然れども其人文の中心とされるものは、吾人今叙述せむとする所の印度「アールヤ」民族、即ち狹義に謂ふ所の「ヒンダス」人(Hindus)なり。

大體より觀察する時は印度には二個の人種あり。「ドラビダ」民族(Davidas)及び「アールヤ」民族(Aryas)是なり。前者は一に「ニシヤダ」民族(Nisohadas)と云ふ。主として南部デツカンに位す。後者は紀元前二千年頃信度河の流源、パンジャの地に入り來り、西北より漸次東南に向うて其人文の途を開拓し、信度恒河兩大江の中間の地、デツカン高地の西北部に占居せり。是民族は印度人文に於ける主強の勢力なりしが、下層の人民に至りては「ドラビダ」民族に屬するもの少からず。「ドラビダ」人は其言語、宗教共に全く「アールヤ」的の人文を模倣せり。時經ち世に移るに隨ひ、是二民族の混合漸く成り、「アールヤ」民族も、其オクヌス河畔の故郷を遺却し、パンジャン及びカナル平原を其母國と信するに至れり。蓋し是等の地

印度の人種。
「ドラビダ」人
「アールヤ」人
との關係。

方は「アールヤ」民族が一個の游牧民族として、西部亞細亞より初めて天竺半島に來りし所にして、夫の韋陀經に見ゆる自然宗教の興起せし所なり。是地方より東の方恒河河畔に轉住するに隨ひ、「アールヤ」民族は茲に初めて耕作を知り、人文發展の基礎を作るに至れり。之れ蓋し紀元前凡そ千五百年の頃ならむ。

印度の人文は
宗教の上に立
つ。

一般に東洋諸國に於て見る如く、印度の人文は宗教の上に立てり。其最古の宗教は即ち韋陀教、吠陀經、毗陀、Veda)なり。

韋陀教。

其神。

韋陀の經典によりて考ふるに、韋陀教は後世印度に見る如き凡神教と大に其面目を殊にす。其風尙は一般に快活にして、鬱鬱厭世の傾向に乏し。其崇拜は多神教的なれども、夙に後代發達し來るべき婆羅門教的一神教の傾向を有したり。其重要な神(Deva)は、天若くは光に關するものなり。實に「アールヤ」民族の精神上に至大の勢力感動を及ぼしたるものは、光の美麗なる現象なりしなり。「インドラ」(Indra) 因陀羅は地に雷雨涼風を降す嵐の神なり。「ヴァルナ」(Varuna) 婆樓那は天の神なり。「アグニ」(Agni) 阿耆尼は火の神なり。就中「インドラ」は其實際

靈魂。

的利福の爲に尤も熱心に崇拜せられたるが如し。「ソーマ」(Soma 蘇摩)の酒も亦神として拜せらる。是れ素齋辭の力ある木汁なり。「ツリハスパーチー」(Brihaspati)も亦神事せらる。是れ素所勝の義なり、所勝の有する全能の爲に崇拜せらる。是の如き神は凡て三十有三あり。

人の靈魂は不滅なり。然れども死後の生活に關しては單に「チャーマー」の光明界に至りて無限の福祉を享くると云ふの外、地獄の説無く、又後代印度思想の特性となりたる輪廻轉生の説無し。一切の神の威徳は「ヴルナ」に屬せらる。何人も「ヴルナ」を見ることが能はず、然れども「ヴルナ」は見ざる所無く、聽かざる所無し。彼は萬有の維持者にして、正義の保護者なり。崇拜は供物と、祈禱と、眞摯敬虔なる情思とによりて爲されざるべからず。神は昨を罰するに躊躇せず。「章陀教の經典に四あり。即ち梨俱章陀(Rig-veda)は頌歌を輯めたるもの、夜珠章陀(Yajurveda)は祭詞及び典禮を誌せるもの、娑磨章陀(Sama-veda)は歌詠集終りに阿闍婆章陀(Atharva-veda)は頌歌を録したるものにして、稍、後世の結集に係る。是四章陀は印度の最古の典籍にして、梨俱章陀を以て最も重要なりとす。是れ「ア

章陀教の四經典。

優婆尼沙土。

ルヤ」民族がパンジャブ地方に住せし時代の産物にして、梨俱章陀は紀元前千二百年前後に成りしものあらむ。章陀の信仰は初めは單純なる自然教なりしが、後代に至りて是教義を續釋敷衍せる神學起り、一層其説を幽遠且神秘なるものとせり。其主要なるものを優婆尼沙土(Upanishads)となす。之れ印度哲學の始祖なり。

社會制度。

婆羅門。

パンジャブの平原より恒河の流に沿ひ、勝利者として東遷するヤ「アルヤ」民族の社會制度、宗教思想に一大變革を來せり。梨俱章陀時代には其痕跡をたに認めざりし階級制度は、茲に初めて起り、所謂四性の別を生ず。四性の中にて最も下級なるものは奴隸にして、降伏せる土民より成る。首陀(Sudra)と名く。次は農夫にして、其上級なる戰士の次にあり。僧侶は社會の最高の位置を有し、下層に對して殆ど無限の威福を弄せり。所謂婆羅門族是なり。是の如く婆羅門が最大の權力を得るに至りしは、畢竟彼等は當代社會に於ける唯一の文字知識ある階級たりしに依る。宗教的儀式は世を這ひて複雑となり、迷信は一層増加し來るに際し、古式經典に精通し、祈禱咒咀によりて人と神との間を連結する一種

の魔力ありと信せられたるものが、社會人心の上に無上の權力を有するに至るは尤も自然なる結果なりとす。是を以て東洋諸邦に於ける民族は、宗教に冷淡なる「ツラン」民族を除きては、悉く其人文發展の或程度にありて、僧侶の跋扈を見ざることも無し。

婆羅門教。

婆羅門教に到りて韋陀時代の多神教は凡神教となれり。一切萬有は梵天(婆羅吸摩 Brahma)より分出し、山川、人畜、及び一切の鬼神は梵天の中に同一共通の生命を有す。人生最上の目的は、是差別相を脱離して其根源なる梵天の中に復歸するにあり。是復歸即ち是れ最上の希望、道德、幸福なり。人は是目的を達せむが爲にあらゆる苦行を忍はざるべからず。何となれば現世の苦行は未來の幸福を得るの唯一の道なればなり。前世の罪業を消滅し了るに非ざれば、人は永遠の轉生を免るを得ず。輪廻を解脱するは人生の務なり。又婆羅門教は萬有の生命の同じく梵天に本けるを信せるを以て、一切生物を殺傷するを以て大なる罪惡となせり。設令ひ外より來りて吾を害するものあるも、之に反抗し、若

摩奴の法典。

くは復仇するは實際的教義の固く禁する所なり。是の如き實際的教義の主要なるものを摩奴(Manu)の法典とす。摩奴は是の世に於ける最初の人なりと信せらる。是法典は家族及び社會に關する權利及び義務を指定し、正義を示めし、又懺悔禁慾を説けり。上は王者の本務より、下は奴隸の本分に至るまで、精細に之を規定せり。然れども其全體の精神は婆羅門の教義、及び特權を支撐執行せむとするにあり。

五哲學派。

婆羅門教の全盛を究むるや、其教義を演繹するを以て目的とせる幾多の哲學系統起りぬ。是れ印度哲學の最盛期なり。之れ凡そ紀元前六世紀の前後なりとす。其主要なるもの五あり。一に曰く弭曼薩(Manu)二に曰く尼夜耶(Atreya)三に曰く衛生師(Chandogya)四に曰く僧佉(Shankhya)五に曰く吠檀達(Advaita)是なり。是等諸哲學派の旨義は、印度思想の最高なる發展として見るべきものなるを以て、後文殊に之を細説せり。

勢極まれば必ず變ず。さしも全盛を極めたる婆羅門教も、其宗教的並に政治的方面に於て多くの反對者を惹起したりき。其初め自由の感情思想より成れる

婆羅門教の墮落
と
佛敎の勃興

教義も、後には一種の形成主義となりて人心の活動を箝束するに至る。又其僧侶は僧侶たるの本分を超越し、政治的實力を把持するに及びて、茲に宗教は百弊の源泉となれり。婆羅門教が是の如き状態に墮落せる時に際し、平等無差別の教義によりて反抗の氣炎を揚げたるものを、佛敎とす。

佛敎。

其精神及教義。

佛敎は釋迦の創唱に係る。釋迦の死は、近世學者の考證によれば、紀元前凡そ六百年とするを妥當とす。其教義は素と婆羅門哲學に反對して起れるものなりと雖も、韋陀以來の舊信仰を全然打破したるに非ず。寧ろ其神學に關する方面を婆羅門教に一任し、専ら實行の教義に於て革新の實を有せりしが如し。即ち其大目的は一切衆生をして轉迷開悟せしめ、以て所謂大涅槃(Nirvana)に到着するの道を示めすにあり。婆羅門教の四姓の如き人爲的差別を眼中に置かず、一切衆生に於いて齊しく佛性を認むるにあり。其教義の要に曰く。現世は苦痛に充つ、是の如き苦痛は所詮煩惱情慾の致す所、故に一切の煩惱情慾は務めて滅却せられざるべからず。是の如くにして初めて涅槃に入ることを得べし。

佛敎の無神論
及
虛無主義

涅槃は不生、不滅、無爲、寂靜の淨樂界なり。是涅槃に到達する方法は種々ありと雖ども、要するに情を殺し、慾を禁じ、善く罪業の源に徹底して開悟の大道に歸るにあり。而して輪廻を免るゝは、婆羅門哲學と均しく佛敎の目的とする所なり。

佛敎は無神論なり。基督教又は回々教の如く、人格ある獨一の神を認めず。又死後に於ける靈魂の個人的存在を言はず。設令ひ其涅槃は或學者の主張する如く、單に積極的屬性を没するに止らず、更に光明淨樂の方面ありとするも、實際的教義としては遂に虛無主義たるを免れず。

佛敎の傳播

釋迦の死後二百年の間に於て、佛敎は殆ど非常の速度と勢力とを以て北方印度に蔓延せり。阿育王は最も其傳播に盡力せり。南は錫蘭島より、東は緬甸、暹羅、爪哇に及び、遂に支那、日本に至るまで、佛寺の建立を見ざる無し。然れども天竺本島にありては、佛敎は遂に婆羅門の舊信仰を打破すること能はず、婆羅門教は捲土重來の勢を以て再び佛敎に反抗し、現今佛敎は母國に於て其後影を見ざるに至れり。是より先き婆羅門教は其組織を改革し、大に佛敎の思想

を採用し、其教義を平易にし、其儀典を繁縟にし、造物者なる梵天、維持者なる毗摩、破壊者なる溼婆の三位を合して一神となし、盛に其教權の擴張に力めたり。佛陀教は婆羅門教の復興につれて漸く其勢力を失ひ、遂に全く其形を變じ、現今の印度教(Hinduism)として其餘喘を保てり。而れども之れ已に昔日の佛陀教に非ざるなり。

印度の文學。

印度の美文學は甚だ豊富なり。元來印度の文學には散文に成れるもの尠く、多くは韻文なり。其特質は、夸大鋪張に傾き、瑰麗奇異、驚心駭目の敘事に富むにあり。然れども叙情詩にありては、腕徹幽雅なるもの少からず。例せばカリダーサ氏の作れる『マクハーンザータ』、雲使者 Maghaduta の如し。敘事詩にて有名なるものは、フヤーザー氏の『マハーンパハーンラ』、摩訶婆羅多 Mahabharata、ヴェルミキー氏の『ラーマヤーナ』、羅摩耶那 Ramayana の二篇を推す。結構雄大にして事件壯快を極む。詩人として尤も有名なるものは、カーリダーサ氏にして、其戯曲『サクンタラ』(Sakuntala) は印度文學の絶唱と稱せらる。獨乙の大詩人ゲーテ氏

印度の政治

印度と希臘との交渉。

は是篇を激賞して措かず。其他俚語あり、寓言詩あり、多くは宗教的性質を帶ぶ。印度民族の特質は是方面に於ても亦十分に發揮せられたりと謂ふべし。

印度の政治史に於ける變遷興亡は一にして足らず、然れども其世界人文の上には多少の影響を及ぼしたるものは極めて少し。獨り紀元前三世紀に於ける希臘人文との接觸は、注意すべき價值あり。

紀元前三百二十七年、マクドニア王アレキサンダロス¹は既に希臘を平げ、西部亞細亞の諸邦を降し、進で信度河を渡りて印度に入らむとす。懸軍萬里、將士又戰を欲せず。アレキサンダロス乃ち恒河地方に達するの素志を斷ち、同盟を造り、堡塞を築きて歸る。越て六年、即ちアレキサンダロス死して其版圖分裂するや、バクトリア(Bactria)及び印度にある領地は、セロイコス、ニカトルの手に歸す。是時に當りてチャンドラグプティ(戰陀羅嚩多 Chandra Gupta)なるもの、恒河の平原に一王國を建立し、勢甚だ盛なり。セロイコスの子孫、屢之と干戈を交へ、希臘バクトリアの遠征軍は、屢々馬を恒河の水に飲ましめたり。是際希臘の學術及び

美術は初めて印度に入りき。又紀元後凡そ六世紀の間は、幾群の「スキタイ」民族は絶えず印度の北部を侵略し、其地を略し、其民を植えたり。是れ亦東西人文の接觸に多少の力ありしや疑ふべからず。

是の如くにして印度は希臘人文の影響を受け、更に佛教の傳播と共に之を東方諸國に輸入せり。美術は尤も明晰なる痕跡を保ち、其佛像建築の様式の如きは支那三韓を歴て遠く日本にまで波及せり。今日日本京畿の建築佛像に希臘式を見るは、畢竟紀元前二世紀に於ける希臘ペクトリア軍の遠征の結果なりとす。

婆羅門哲學の
共同思想。

吾人は印度「アーリヤ」民族の人文の性質を一層明晰ならしめむが爲に左に婆羅門哲學派に共有せる思想の一斑を述べ、以て是章を終るべし。吾人の見る所を以てすれば、是等哲學派は印度思想の傾向を尤も明に發揮したるものなり。

一、 解脱

二、 知識を重ず

三 輪廻

此三は吾人の印度の三大思想と名けんと欲する所のものなり。此外厭世、自由思想、靈魂不滅、因果應報、平等等の普通思想あれども、一々項を改めて列擧するの要なきが如し、何となれば、厭世は解脱の因にして自由思想は知識を重じたるの果なり、靈魂不滅、因果應報及び平等は相待て輪廻の思想を構成すればなり。又一步を進めて考ふる時は、解脱と靈魂不滅と、隨て輪迴應報平等とは元來相離るべからざるものなり。斯の如く項を分ちたるは唯敘述上の便宜のみと知るべし。

解脱。

解脱は印度の各哲學派を一貫する最も著しき思想なり。古代希臘に、支那に、羅馬に興起せし哲學派一にして足らずと雖ども、現世の繫縛を脱して精神の自由を得んと欲する希望の實際に顯れたるもの印度に於けるが如く著明なるものはあらず。印度に於ける各哲學派は、其世界觀に於て多く相異なれりと雖ども、其目的とする所は一の解脱にありしことは實に驚くべき一致なりと謂ふ

各哲學派に於ける解脱の思想。

べし。且此解脱の觀念は單に受動的信仰に非ずして常に能動的勢力を人心に及ぼしたるものなり。故に印度思想の歴史の真相を知るに欠くべからざるの鍵鑰なりと謂ふべし。

勝論派の如きは所謂六句若くは十句を預想して世界の成立を説明したる點より見れば一種の無神論なるが如し。梵天を以て唯一實體とする吠檀達派の世界觀に比して其差頗る大なり。而かも六句の離散を以て涅槃となしたるが如き解脱を以て人生の目的とせしを見るべし。瑜伽派と僧侶派とは、一は有神教にして一は無神教に近し。一は苦行を以て方便とし、一は考察を以て手段となす。而かもその解脱を目的とするに至ては一なり。闍伊那派が僧侶派と同じく精神と物質との二元を立てしは共に吠檀達派に反せりと雖ども、而かも精神を分て觀達精神、解脱精神、繫縛精神の三となせしが如き、其如何に解脱を重せしかを見るに足るべし。其他波爾尼派は文法上の深遠なる考察によりて、吠檀達派と同じく萬有の本體として梵天の唯一實在を認識し、差別相の原因なる無明の束縛を打破して梵天に合一するを以て解脱とせしは吠檀達派の正統を繼ぎ

解脱と厭世主義。

解脱の二方法。

たる者と謂ふべし。夫の所婆迦派が現世の快樂説を主張して解脱を目的とせざりしが如きは蓋し瑜珈、闍伊那諸派の嚴酷なる禁欲苦行の教義に對する反動的思想として見るべき者にして決して之を以て印度思想一般の趨勢を疑ふべきに非るなり。

此の如く印度の各派は解脱を目的とするを以て、隨て厭世主義なり、吾人が現世の生活は所詮前世の作業に因れるものにして吾人の精神の本來の目的にあらざ。故に吾人の當に務むべきは苦痛の臭骸を脱却して精神本來の状態に復歸するにあり。故に現世の生活を離れて涅槃の淨樂に入ることば吾人が最大の目的なり。吾人は如何にして此目的を達すべきか。如何にして未來の輪廻轉生を免て、其精神的實在に復歸するを得べきか。印度哲學派が此目的に達するの手段として選みたるもの、各々多少の差別あれども、大體二種に分つことを得べし。即ち一は闍伊那派、瑜珈派の一部によりて代表されたる形体的方法。一は吠檀達派が主として唱道したる考察的方法なり。闍伊那、瑜珈と雖ども全く考察的方法無しと言ふにはあらず、闍伊那派にて涅槃の縁として三寶を主張し、

所謂正信、正智を説きしが如き、又瑜珈派にありて内察、禪定、三昧を八戒の中に加へしが如き、考察を主せしを見る。否此二派にありても其主眼とする所は寧ろ考察的方法にありて形体的方法は只之に到るの方便に過ぎざりしなり。吾人は唯考察の外に形体的方法あることを示さんが爲に殊に之を分ちたるのみ。然らば則形体的方法とは如何。

形体的方法。

形体的方法とは一言すれば情慾を禁遏し希望を制止し、其他凡ての形体的活動を箝束するを云ふ。瑜珈派の八戒は解脱の方便なり。其中耐持、勤務、容止、歴息、禁忌の五は形体的方法に屬す。耐持とは情慾を抑制することにして、勤務とは宗教的儀式を峻守するを云ふ、容止は態度を正うすることにして、歴息、禁忌は呼吸を抑止し若くは制限し、五官を拘束して放縱ならしめざるを云ふ。是五者は要するに八戒中最後の三即ち内察、禪定、三昧に至るの準備に過ぎず。然れども此派が非常に形体的方法を主としたることは、古來著名のことにして、其慘酷なる難行に堪へたる克己の精神は、今日の人をして心膽を寒からしむるものあり。其例を擧げんに、或は數十日間斷食し、或は信ずべからざる程永く水中に潜伏し、

或は飲食を絶ちて數十日間土中に埋伏し、或は灰土を牀に塗り、或は燒石上に偃臥し、樹上に倒懸し、或は地上を展轉して數千里を巡禮し、或は火を食ひ、或は刺上に伏し、或は多年手を握りて爪甲手背を穿つに至る等一々列擧に追あらず。闍伊那派にありても形体的方法が其本來の主義にあらざりしとは、解脱を妨ぐる原因として(一)業障、(二)精神の眞知識を妨ぐる障礙物、(三)身牀に合し居る精神が感覺の對象上に發動せんとするの傾向等を擧げたるを以て見るも明なり。然れども此派も亦瑜珈派と同じく形体的方法を極端まで實行したるものにして、其慘烈なること亦瑜珈派に劣らず。其祖師婆隨摩那が如何に苦痛を忍耐せしかを見れば、之を模範とする後世末派の苦行畧々想見すべし。其克己の精神の盛なるは實に驚くべきものにして、一度び誓ひたることは如何なることあるも之を履行せざるべからず。其經典には比丘、比丘尼が巡禮の途上に盜賊に會するも逃避すべからずと教へたりと云ふ。又此派は嚴に肉牀の情慾を禁遏し、宗教的自殺を勸奨せり。彼等は宗教的自殺を以て最後の解脱なりとせり。形体的方法も一び此點に至れば寧ろ考察的方法の目的とする所に背戻せりと謂ふべ

形体的方法に
考察的方法は
準備な
り。

知識を重す。

印度人の考察
的傾向。

し。何となれば考察的方法の主とする所は内面的知識によりて解脱を得るにあり。此知識を得るに非れば、其手を絶ち、其足を截るも決して目的を達せりとは謂ふべからず。况して中道にして自殺して自ら知識の縁を断滅するが如き、之れ即ち未來輪廻の因縁を構成するものにして、大に解脱の精神に反せるものと謂ふべき也。然れども之れ素より婆随摩那の素志に非ずして、末派の輩が本末の辨を誤りたるの弊に座するならん。故に吾人は一般に言はんを欲す、解脱を得るの方便は素内面的考察なり。形骸上の諸形式は内面的考察の目的に到るの準備なりと。然らば則ち内面的考察とは何ぞや、之れ印度思想を論するに當りて最も重要なる問題なりとす。

一般に「アーリヤ」人種は知識を重する人種なり。故に又知識を渴望する人種なり。「アーリヤ」族の祖先の中、天竺半島に南下したる所謂印度民族にありて、此傾向は最も古き時代に於て尤も明晰に發揮せられたり。而して其發揮せらるゝや、歐洲に於けるが如く客觀的物質的の方面に向はずして、純ら主觀的精神

的の一面に傾きたることは其尤も著しき現象なりとす。蓋し之れ祖先の固有せる原性が、國土の自然状態の爲に、感化せられたる結果なるべし。往古の印度人民が内面的考察の發達せるは、今日吾人の驚嘆する所なり。想ふに幽玄なる考察は當時獨り識者の間に行はれたるのみにあらずして、普通人民も知識の問題に冷淡ならざりしとは、夫のマガステラス氏が耶蘇紀元前六世紀に印度に行きしとき、印度人が生と死との問題に其日を暮し居りしに驚けりし一事を以ても想像するとを得べし。實に知力は「アーリヤ」人種の心性に於ける最大動機なり、彼は外界に對して心性の遙に優秀なるを認めたり、あらゆる外界の事物は當に心性の希望に適應すべきものなることを認めたり、故に心性の要求は天地の間に最大の要求にして又最大の權力なり、心性は外界を超駕して無限の力を有し外界は心性に對して所詮隸屬に過ぎざること認めたり。此唯心的傾向は印度歐羅巴族の過去の哲學史に於て常に最大の勢を有せしものにして、印度に於ては殆ど絶對の權力を逞ふせり。畢竟之れ印度の氣候風土共に人をして懶惰ならしめ、且生活の困難なきを以て身軀の活動を要せず、社會生存の爲めに

「自我」の考

競争することを須ひず、之を以て客観世界に就て物質的知識を得るの機会に乏しかりしなり。智力は其活動の對象を得るに非れば已まず、而かも外界に向て考察するの機会なき印度人にありては、隨て内面的考察即ち「自我」の考察に向て其知力的勢力を傾倒するに至れることは極めて自然の結果なりとす。之れ吾人が印度人にありて吠檀達以下の唯心的、主觀的思想を得たる所以にあらずや。彼等の思想の第一に向ひし所は天に非ず、地にあらず、日月山川にあらずして自己なり、自己の運命未來の問題なり。

吾等は何處より來れりや、誰によりて吾等は生存し終に何處に歸せんとすや、吾等は誰によりて支配せらるゝや、吾等は一定の法則を歩み居るか、吁爾神を知られる人々よ。

『シユエターシユグラータラ、ウバニシヤツド』は實に此偉大なる問題を以て初まり。各哲學派は此問題を解釋するを以て解脱の方便となせるなり。故に知識を希冀するの熱情は其教義の到る處に露はる。彼等は真理を知ること、を以て真理になること、同一視せるなり。之れ物質的知識の發達せる近世人の恐く

は容易に想ひ至らざる所ならむ、然れども心性發達の上に於て寧ろ自然の階段なることは、古代人民が一般に此傾向ありしを見ても知ることを得べし。

人如何なる物を考ふるも彼は其物に行く、神を考ふる人は神に到達したる也

薄伽梵歌第八章

之れ薄伽梵歌の吾人に語る所、印度人が其滿腔の誠意を以て信仰せし真理なりしなり。彼等が道義の最高なる原理は實に此中に存すればなり。故に曰く、打勝つものは虚偽に非ずして真理なり。幸福を得るの途は真理によりて開かるゝなり(ムンダカ、ウパ、三、六)

世界に於て真理の如く人を清淨にするものはなし(薄伽梵歌第四章)

彼等は實在と知識とを同一視したるなり。即ち知識を以て眞の實跡となし、虚偽を假相とせり。故にカピラ氏は其の僧侶格言集第三章第二十四節に於て曰く『聖傳は迷妄の所爲なり』と。此點に於ては古代の哲學思想の東西一軌に出るもの少からず。プラトン、ソクラテース諸氏が真理と臆説とを區別して、真理を知るは即ち真理に到達する所以なるを示し、殊に知識と道徳とを同一視して知

者即ち徳者なることを主張したりしも、又王陽明が有名なる知行合一論の如きも、將たペーコン氏か

存在の真理と知識の真理とは同一也、人は彼の有せる知識に外ならず。

と言ひしが如き、其細説に至ては各々其趣を異にすと雖ども、知識を尊崇せし根本的原理に於ては概ね相同しきが如し。凡て如何なるものも全く自己と絶縁せるものは吾人之を知るを得ず。吾人の思想と吾人が思想し得たる対象とは、或る神秘なる關係によりて必ず多少共同の性質を有せざるべからず。換言すれば吾人の實躰と其対象の實躰とが互に合一するに非ざれば、知識てふことは極めて無意義の事と爲りたるべし。之を以て印度人は知識は單に心性上の現象に止らずして吾人の生存、實在等に關して極めて嚴格なる意義を有せりと考へしなり。彼等が其全力を傾けて知識を愉悅し迷妄を忌避せしこと誠に以ゐるなり。其求むる所既に真正の知識にあるを以て形躰上の禮拜、祈禱等は蓋し印度人が當初の本志に非りしならん。薄伽梵歌第十章に「最上の禮拜は沈黙なり」と訓へしも、蓋し此間の消息を漏したるものに非るなきを得んや。

真理を知るは
真理となる也。

以上述べし所は蓋し印度人が知識を以て解脱の縁とせし理由ならん。凡て二物相互に影響し得んが爲には其間に共通の分子を有せざるべからず。一の共通性なき二物は如何にするとも相互作用すること能はざるなり。此動かすべからざる科學的原理は、其し明確に論理的に了解せられざりし迄も、印度人の單純なる心性によりて彷彿の間に認識せられしことは蓋し疑ふべからざるなり。印度人は實躰と同一視するまでに知識を尊崇せり。故に知識の命令は最上の命令として遵奉せし所なるべし。即ち彼等は思想の自由獨立の爲には何等の障礙をも打破するの精神ありしことは何人も其自然の結果として豫期する所なるべし。

然れども茲に印度思想の歴史上に見矛盾の觀あるものあり、即ち韋陀教の尊信是なり。實に古代印度に於ける唯一の信仰として吠陀の古典が絕對的特權を維持せしことは、宗教哲學の史上に於て甚だ顯著なる事實にして、殆ど壓制的に其教義を遵奉せしめ、之に背戻するものは異教者として社會的迫害を加へしことは争ふべからざる事實なりしが如し。思想の自由を主張すべき印度人が却

韋陀教の尊信
と自由思想。

て吠陀教の特権を維持せんが爲に斯の如き束縛を加へしとすれば、之れ大なる矛盾なりと謂ふべし、吾人は此間の疑義を如何に解釋すべきや。予輩の見る所にして大に謬らざれば、印度人が思想の自由を尊びしことは疑ふべきに非ず。吠陀教の特権を主張したるは之れ恐くは思想的勢力に非ずして、社會的即ち實際的習慣の階力ならむ。蓋し吠陀時代にありては、マツクス、ミユルレル氏が言へりし如く、詩人は即ち預言者なり。預言者は即ち君主なり。廣大無際にして神秘不可思議に充滿せる宇宙に對して其解釋を與へたるものを非凡なる英雄、若くは神的人として崇拜することは原始時代にありて極めて自然のことなりしならむ。於是僧侶なる一階級出來り、超自然的物事を解釋する知力は同時に實際社會上の權力となりしなるべし。此の如き階級が其社會的勢力と位地とを維持せんが爲に自家の信仰を以て人民を訓導し、若し從はざるものあれば威力を以て之を迫害せしことは亦極めて自然の結果と謂つべし。古來各國に於て宗教的階級が社會上の勢力を得しは多く此理による。印度に於ても然り。然れども予輩の見る所を以てすれば、此社會的勢力は決して印度

章陀教に對する六哲學派の反抗。

人民の思想の根本とも云ふべき思想の自由を抑制する能はず。吠陀教の束縛に反對して其獨立の信仰を得んとするの傾向は各哲學派を通じて陰に陽に到る所に露はれたり。今其二三の例を擧げむ。

所謂印度の六哲學派は異端外道の徒に反して、章陀教の教權を維持すと稱するものなり。而かも其説く所を見るに却て往々之に反するものあり。例せば勝論派の如き、僧法派の如き、殆ど無神論に近し。彼等は佛教の如く公然章陀教を排斥せずと雖ども、其教義に反するに至ては則一なり。現に印度の一學者は左の如く言へり（ヴェーユン氏譯、吠陀論綱要、第十一頁參照）。

蓋し彼等（六派）は章陀教の主權に反せざる様に其懷疑的辯論を造りしなり、彼等は其主權を保たんが爲に二途あることを認めたり。即ち一方には章陀經典の自由解釋を容れ、他方に於ては繁縟なる章陀的儀式に代ふるに哲學的考察を以てするの必要あることを認めたり。前者によらざれば其教權を維持すること能はざるべく、後者徹せば蔚勃たる彼等の理性は永遠舊信仰の束縛を脱すること能はざるべし。然れどもカヒラ氏が最上實跡の存在を否定し、

又カナード氏が元子の最初の活動を「アドリシニタ」に歸せしが如き、予輩は彼等と彼等が排撃せんとせし「異教者」との間は何等の差違あることを見ず。洵に此言の如し。彼等は形式上はた外面的には社會の制裁上已むを得ず章陀教義を認めたるも、其内心に於ける理性は遂に之に満足すること能はざりしなり。薄伽梵歌は吠檀達と共に章陀教の尤も忠實なる辯護者と稱せらるゝもの。而も章陀教が虚禮を主として徒に來世の幸福を求むるを嘲りて左の如く言へり。溢れたる泉を以て圍まれたる所に井水の用なきが如く、眞の知識を有せる婆羅門には章陀は何等の用ふる所なし。

又曰く、

爾若し知識によりて迷妄を覺破せば習慣的信仰は爾を累はずことなかるべし。爾の心章陀を離れて冥想の中に入らば爾は初めて眞の崇拜に至るを得べし。(薄伽梵歌第二章)

章陀の束縛を脱し、獨立の思想によりて精進せんとする向上的傾向は、尙吠檀達派をも例外に残すとを肯せず。遂に彼をして「章陀を知るは精神を知るに劣れ

り」と言はしめ「賢人は章陀を退くこと穀粒を求むるもの、稗を捨つるが如し」と言はしめたり。若し夫れ

爾が學びたる章陀は名のみ、而れども世には名よりも大なるものあるを知らずや、

と言ふが如き快活自由なる思想は、何物か能く之を束縛するものぞ。以て章陀教に對する公然たる反抗として見るも敢て不可なかるべし。薄伽梵歌、吠檀達尙且然り、其他の諸派が陰に陽に反抗の氣炎を吐きたるもの一にして足らず、カヒラ氏が章陀讚稱の神聖を否定し、「ラマ、ヤナ」と「マ、ハーフ、ハラタ」は章陀に等しと稱せられ、「摩奴」の法典に「取るべきものは精神のみ」と言へりしが如き、多く言説するの要なかるべし。此懷疑的自由思想は六哲學派中に於て已に其萌芽を發し、佛教に至て其極點に達し、公々然章陀の教義を破壊するに至れり。

輪廻。

輪廻の觀念の最も發達し、且最も複雑なるもの古代の思想中印度の如きは無し。此觀念は希臘の或哲學者、埃及の僧侶、及び基督教の一派等に於て見る所

輪廻の理論的
根據。

なりと雖ども、印度の外の他の印度歐羅巴族には概して多く行はれざりしものなり。印度にありても最初より行はれしに非ざること、韋陀讚稱の中に之を見ざる一事を以てするも零之を知り得べし。即ち韋陀教にありては死者の靈魂は、他の印度歐羅巴族に於て普通に見る如く「只「マ、ヤ、マ」の光明天の上に至りて、永遠の福祉を受くると言ふに止る。所謂輪廻轉生の觀念は實に優婆尼沙土に始まると謂ふ。是とても初は殊に深遠なる理論に本きしにあらず、只單純なる實際的動機に因せしものならんと思はる。其説く所によれば、人は其作業悪ければ輪廻して現世に復り、其不幸なる存在を經過して、其罪障を滅せざるべからずと云ふにあり。然れども後の婆羅門諸哲學派に至ては、哲學的及び心理學的の高尙なる理論を根據として之を説くに至れり。其説によれば、吾人が輪廻を免れざるは、吾人の精神が梵天を離れて有限なる個體的生存を維持し、此假相世界の諸般の繫縛の累はす所となるが爲なり。即ち換言すれば吾人の慾望と作業とは輪廻の因なり。是あるが爲に吾人は生死の巷を流轉し、其哀むべき生活を限無く反覆せざるべからず。人性は所詮慾望に本く、慾望を果さんが爲

輪廻思想の原
因。

に人は作業せざるを得ず。已に作業を免れず、故に亦輪廻を免る能はざるなり。印度人は此無限の生死轉生を以て最大の惡事となせしものなり。之を免るゝは即ち解脱なり。故に解脱を目的とせる印度思想は、即ち輪廻を免るゝを目的とせり。其唯一の方法は一切慾望を絶ち、梵天の唯一實體を冥想し、眞正の知識によりて個體我の本來空なるを悟了するにあり。是れ輪廻の觀念の理論的基礎なり。

斯の如き思想か一び人心に固着したる以上は、其思想生活の上に如何なる影響を及ぼすべきや。茫々たる死後の暗黒界にありて、無限無窮なる轉生の運命は方に吾人を待ちつゝあるなり。吾人の現世に處する方法を如何すべきや。さなきだに外界の知識に乏しく、内面的考察に富み、徒に無限無形の半面を想像して有限有形の半面を遺却したる印度人は、此恐るべき嚴格なる問題に面し、其死後の運命に向て如何に沈深なる思想を運らせしや。那の如き他の民族に比類無き厭世鬱憂の思想を懐くに至りしは、蓋し自然の結果と謂ふべき也。

然らば則ち此印度思想にまかく大なる影響を與へたる輪廻の觀念は何により

て起因せしか、吾人は此原因として左の三を擧ぐべし。

イ、靈魂不滅

ロ、生命の同一

ハ、道義的應報

靈魂不滅。

靈魂不滅の信念は輪廻の觀念の預想せざるべからざるものなり。若し靈魂にして死滅せば素より輪廻すべき謂れなければなり。

生命の同一。

生命同一は蓋し印度人の特有の思想ならん。彼等は以爲く、あらゆる生物は其の本體を一にす。其形状種類を見れば千萬の差別あれども、其本質に至ては唯一平等なり。故に人も、犬も、蟲も、鳥も、悉皆同一生命を共有す。蓋し之れ印度人が自然界に對する熱愛に起因したるものにして、韋陀讚頌を一貫せる凡神的精神は實に是なり。吠檀達派が萬有を擧げて梵天となし、無數の個體我は所詮唯一なる自我即梵天の一部に過ぎざと説きしも、畢竟此思想の最も著明に顯はれたるものに外ならざる也。此思想は亦闍伊那派の救護に大なる影響を及ぼしたり。此派が生物を殺すを以て非常の罪業となし、毒虫身を蝕すとも之を殺す

とを容さず、寧ろ甘じて其犠牲となるべきを教へたるも、其根本的動機を尋ねれば、此生命同一の思想に本けるが如し。吾人は吾人自らの生命を貴重するが如く他の生物の生命をも貴重せざるべからず。元之れ同一の生命なるを以て自他の間に輕重の差別あるべきに非ざればなり。

印度人は此生命同一の思想を擴張して博愛平等の慈悲心を成せり。社會的階級、貧富の隔絶等より生ずる差別は一切生物の同體を認めたる彼等の眼中には、外形上の假相より外に、何等深重なる意義を有するものに非ず。王者も乞食も些の差別なし。故に自己の社會的勢力を利として、他を迫害するが如きは、其尤も戒避したる所なりき。彼等は絶對平等なる唯一實體の前に、あらゆる人爲的はた現象的小差別を没了したるなり。故に曰く、

爾の敵に親切なれ、木は己れを切る樵夫にも其蔭を惜まず。

善人は最下等の動物にも慈悲心を垂る。月は、チャンドラの陋屋にも光を送ることを否まず。

社會上の差別をなすものは之れ痴人のみ。貴き人には全世界之れ一家族な

り。
生活は汝に貴重なる如く他の生物にも然り。善人は他に對して慈悲あること猶己に對するが如し。

薄伽梵歌にも至る所同一の精神を鼓吹せり。曰く

予は友も敵も有せず、予は凡ての人に對して一様なり(第九章)

道德的應報。

道德上の應報も亦間接に輪廻の思想を成せる一原因なり。凡て道德上の價値が必ず應報あるべきことは、人性に必然なる感情的要求にして、靈魂不滅の思想を構成する一要義なり。現世の不完全なる此應報は必ずしも其當を得たるものに非ず。善人往々にして窮苦の中に死し、非道者屢々幸運の寵兒となる。良心の判断より生ずる苦樂を以て其應酬となすが如きはた宿命の觀念の如き、要するに道義的應報を現世の範圍内に於て説明せんとするより己むを得ざる消極的必要に出でたるものにして、未だ以て人心の最深處に根柢せる道德心の要求を満足せしむるに足らず。於是正當なる應報を死後の世界に求むるに至るもの洵に必然の人情と謂ふべし摩奴の法典に曰く。

其言語的なる、形體的なる、心性的なるを問はず凡ての行爲は其善惡の應報を有す、人の行爲より轉生は生ず(七、三)

以上本章の所論を約束すれば、解脱、智識を重ずること、及び輪廻の三は、印度思想の三大要素にして、解脱は厭世思想を預想し、思想の自由は知識を主ずることを假定す、輪廻の思想は靈魂不滅生命同一及び道義的應報の三に本く、是れ印度思想の概梗也。

(下) 『イラン』民族

『イラン』民族。
其土地。

ティグリス河の東、ドラングアナの湖水に至るまで、裏海と波斯灣の中間に延亘する一帯の高原をイランと名く。イラン高原の西の方、シレーマン山脈より、メソポタミアに至る地に、『メデア』民族あり。同じ高原の南の方、波斯灣に沿うて波斯人住す。是二者は印度人と共に『アルヤ』人種に屬し、『イラン』民族と通稱す。是民族は世界の人文史上に關する所甚た少く、又其特色の殊に留心すべきものに乏し。故に吾人は爰に其梗概を略記するに止めむと欲す。

其人文の住地。

古來波斯人は破壊の人民なりと稱せらる。其文物制度一として後世に標記す

べき無し。上に専制の君主を戴き、下に屈從の臣下あり。其教育は整はず、女子は賤められ、刑罰殘酷なり。只古代波斯の優性として誇稱すべき者は、其軍隊組織にあらむ。是邦がキロス王以來、幾多の戦勝王を出し、其威南歐にまで震ひしは、畢竟其軍事制度の長所に歸すべし。ダリウス一世の版圖は、其本國の以外に於て二十四の「サトラップ」(州)を有せしと傳ふ。然れども近世に至りては、他の回教國と共に零落に傾き、却て歴史及び詩歌の文學に於て其名を擧げたり。然れども未だ以て世界の人文に貢獻するに足らず。

其宗教。

古代波斯の信仰は、パンソヤフ地方に於ける印度「アルヤ」民族のそれと均しく、極めて單純なる自然宗教なりき。然れども幾もならずして、「メデア」民族の影響を受け、所謂「マギ」教(magi)なるもの興起し、其僧侶即ち「マギ」は政治上に、社會上に、少からざる權力を有せり。夫のゾオロアステル(Zoroaster)又はザラツストラ(Zarathustra)の改革は、是「マギ」教に對して爲されたるものなり。

ゾオロアステルの經典「ヴェンダアエスタ」は宗教及び道德の教訓たると共に法典たり。其宗教觀は、純然たる道義的の二元教と稱すべきものなり。第一、一の無上

「ヴェンダアエスタ」

神あり。次に「オルマツド」及び「アールリマン」の二神あり。是れ善神惡神を表示す、畧々モルゼ教と相似たり。是善惡二神の争闘は、世界人間の再造と、永遠なる幸福の占得に到りて善神の勝利に歸し、茲に人間は其理想的圓滿の境地に詣り得べし。故に是教義は印度思想の厭世的なるに反して、原始「アルヤ」人種の樂天的本性を維持したりと謂ふべし。其宗教的儀式の主要なるものは拜火にあり。之れゾオロアステルの宗教が一に拜火教の名稱ある所以なり。

「イラン」民族の文字。

「イラン」民族の文字は「アツシニリア」「ペロニア」のそれと均しく、楔形文字なり。然れども其形狀は殆ど全く他と其趣を異にせり。而して是印刻の發明はマリウス一世以前にあり。石壁に印刻せられたる戦勝王の紀念文は、實に百代の珍なり。アレキサンドロスの頃には、是文字稀に行はれ、紀元二世紀に至りては全く其跡を絶てり。

其美術。

波斯には自國特有の美術無し。其製作は全然他邦の模倣なり。初めは埃及式を模し、次に希臘式を探れり。然ども錢貨を鑄造し、道路を修築し、且溝渠を開きて灌漑に便にしたるの點に於ては、波斯は東洋の古代に冠たりと謂ふべし。然

れども其文物は萎靡進まず、古代歴史に戰勝國の名を止めたるのみにして、永く人文の進歩と共に並行する能はざりしは印度と同じ。是れ將た日本を省きて東洋諸邦の運命なるが如し。

第四章 『ハム』人種 (埃及)

人文史最古の記録、大金字塔。——埃及の人種問題。——埃及人の特性。——埃及の人文は全く風土に本づく。——埃及人文の年代。——宗教。——生死の對比及輪廻。——美術。——耕作は埃及人文の根柢なり。——言語及文字。——埃及に關する研究。

メムフェスの邊り、雲煙渺茫の間、遙にリビアの大荒原を望むところ、巍然として天際に聳ゆる大金字塔の幾個は、夙に旅客の驚異せる所なり。是れ實に渾圓球上に於ける人文の最古の標柱にして、人類の歴史的生活の悠久なる時代を揭示するの記録なり。

是の如き金字塔の最大なるもの、容積は實に七千四百立方呎を數ふ。其底

人文史最古の
塔、大金字

埃及の人種問
題。

綾七百六十四呎、側綾四百八十呎、其何の爲にせしかを問へば、曰く單に歴代帝王が眇たる盈尺の棺柩を藏むるが爲めなりと。然るに裝飾なく、色澤無き、是驚くべき大石碑を建立するを得むが爲には、其民族は人文の如何の程度に存在したるべきか。是の如き重大なる石材を數百丈の高處に上擧するには、工妙なる器械力に依らざるべからず。是の如き尤大なる建築を以て一王者の墳墓に充つるを得むが爲には、國家王室の權威と國民生活の餘裕との間に對應するもの無くむばならず。又一屍骸を神靈にし、不朽にせむが爲に、是驚くべき大工事を吝まざるは何等か宗教的觀念の特殊なるものあるに依らざるべからず。抑も又一種の美術的製作として、是三角塔を見る時は、此高大瑰異なる形相は、即ち是を造りたる民族の美的意識を影響したる外界勢力の如何を推測せしむるものにあらずや。而して是等金字塔の最も古きものは、少くとも今より三千餘年を下らずと謂ふ。いでや、是古國の人文を一細想せむ。

埃及の人文に關する第一の疑問は、其人種なり。抑も埃及の民族は、歴史上特生的として見るべきか、將た外來的として見るべきか。若し特生的に非ずとせば、

其最古の移民は何處より來りてニル水原の人文を樹植せしや。南方エテ、オヒ
 ア地方より移民ありしとは、一般人文の運行法則に反するを以て信じ難し。今
 日宗教及び言語の比較研究に據れば、埃及民族は西部亞細亞より轉住せる「ハム」
 人種なること疑ふべからず。即ち往昔「アールヤ」「セム」の二人種が其分離を遂
 げざりし時に當り、一派の保守的の民族は是源種に分れ、其舊慣故習を保存せむが
 爲に恰好の土地を求めて漂泊し、遂にヌエズの西、ニルの水原に其居をトしたる
 もの、即ち是れ埃及民族なりしならむ。是民族の侵入以前に於ける土人の子孫
 は、今のヌミディア人なるが如し。

埃及人の特
 性。

埃及民族は最も受動的の民族なり。百難を排し其人文に新生面を開拓するが
 如きは、曾て見ざる所なり。是れ土地の勢力の馴致せるもの多きに居る。埃及
 には幾多の學術技藝あり、然れども皆是れ外界の勢力に驅られたる受動的活動
 に過ぎざるなり。

埃及の人文は
 全く風土に本

一般に言ふ時は、埃及の人文は全く風土の規定する所なり。ニルの水ながらむ
 か、埃及の地はリビア砂漠の一部のみ。ニルの水、其年々の溢水を以て兩岸を潤

澤するなくむば、磽确荒寥たる大漠の一隅に是膏沃無比の別天地を現するを得
 べからず。埃及民族が安じて其耕作の收穫に依頼し得る所以のもの、一に是水、
 是土地あるを以てなり。是を以て土地の人民に及ぼせる影響は、社會の全面に
 及び、學術宗教、凡て其感化を被らざると無し。世界何處に自然力に依頼すると
 埃及人の如く甚しきものありや。何處に生死榮枯の感情に鋭敏なると埃及人
 の如きものありや。埃及の人文は實に整然たる週期的自然現象の上に立つ。其
 政治社會の制度に於ける儼格なる形式主義は實に是に本く。彼等は自ら進み
 て他に求むる所無し、只天然の勢力に格從し、順應し、以て其獨善の生活を樂むを
 得は則ち足れりとす。是保守的精神は遂に其自尊外卑の情性を養成せり、是れ
 後世希臘文明と接觸せし時、頑然として排外の態度を維持したる所以なりとす。

歐洲最古の人文に多少の勢力を及ぼせるものは、東洋諸邦に於て主として
 埃及を推す。支那印度が毫も西洋人文の源泉と關せざりしは、其國情に依ると
 雖も、一は其時代の比較的淺近なりしによる。埃及は則ち然らず、其宗教學藝に

埃及人文の年

於て希臘古代の人文に貢獻せし所少からず。之れ其時代の古きに職由す。是故に時代の確定は埃及人文の研究に於て至要の事なり。

埃及人文の始原は凡そ一萬年の過去にありたるべし。是れニル河の最下泥層中の發見物より打算したるものなり。何となれば泥層は年代の経過を表示するものなればなり。然れども其精確は素より期待すべからず。又其の歴史の時代の最も古きものは四千五百年を下らず、而して當時既に儼然たる王國の跡制を有したるを以て之を見れば、其以前に於て少くとも一千年の政治的生活を経由したることを想ふべし。宗教的觀念及び儀式と關聯せる無上の王權階級制度諸般の法制は已に是時に於て整備せり。

然れどもニル河畔に於ける最初の移民と、西部亞細亞に於ける「セム」及び「ハム」民族との人文の比較は、埃及人文の成立の時代に關して幾多の疑惑を惹起し、今日尙未だ確定せず。埃及には全く西部亞細亞に遍通なる罪水(Sindhu)の傳説を欠き、七日の代りに十日を以て一週日となし、又他の東方民族と異なりたる曆法を有す。獨り度量の標準は全くペロニアと同じ。是等の異同に關して埃及

人文の年代を測度するの說區々一ならず。

宗教。

宗教は他の東洋諸邦に於けるが如く一般人文の根據たり。初めは拜物教にして、動植物を崇拜し、拜日教と並ひ行はれしが、幾もなく人視主義の行はるゝに及び、荒唐なる宇宙發生論を生ぜり。而して民族固有の宗教は、隨時種々の外來の信仰と混淆し、雜然として統一を欠くに至れり。

生死の對比
及輪廻

生死の對比は深く埃及民族の觀念に浸潤し、時を経るに隨ひて異大且奇怪なる符號表象を以て之を體現せむことを務めたり。輪廻の觀念は是邦固有の信仰の一にして、死後の不易榮華を求むるの感情は、上下を通じて極めて強烈なり、之れ木乃伊の如き複雑なる葬式の行はれたる所以なり。

美術。

埃及の美術は其歴史と共に世界に於て最大なるものなり。其様式は全く其民族の獨創に出で、毫も他邦の影響を受けず。然れども其比較的最も優秀なるものは最古の製作にして、愈、後代に至りて愈、退歩せりしが如し。其特質は肥

號的はた數量的なるにあり。蓋し自然界の勢力の過重なるや、埃及民族は自然物の模倣の外に何等の空想的創作を爲すこと能はず。而して自然物を模倣するや、其特色を具象的に表はすに非ずして、單に其外形の大體に就て記號的に之に似するのみ。優美の嗜好は全く欠如し、只其形狀容量を壯大にし、偏に自然力若くは器械力の過重によりて、崇高莊嚴の觀念を體現せむと務めたるもの、如し。其殿堂墓洞皆然り。金字塔の如きは尤も明に之を示す。其彫刻塑像の如きも、概ね危然粗大のもの多く、且怪畸不自然を極む。夫の有名なる「スフィンクス」を初めとして、獅子、牛、等の形相皆然り。一として人間の骸骨指動に適するもの無く、却て之に對すれば畏怖嫌惡の情を起さしむ。希臘美術の典雅優美は其片影をたも見ることも能はず。之れ主として其天然を崇敬して抑畏自ら卑うしたるの結果ならずむばあらざるなり。

埃及に繪畫ありしことは殊に注意すべし。古代の印度及び西部亞細亞の諸邦には、建築彫塑あれども繪畫無し。獨り是邦に於ては歴史の初より是ありき。只其單純にして、投影なく、遠近なきは、遙に希臘に劣れり。

耕作は埃及及人文の根據なり。

言語及び文字。

埃及に関する研究。

耕作は埃及に於ては人文の根據にして、又學術の因て起る所なり。即ち天文學はニル溢水の定期を知らむが爲に、算術及び幾何學は溢水後の土地を測量せむが爲に、何れも發達せり。其他醫術、解剖術、其他諸般の學藝略、具備せざるなし。

埃及最古の言語は「ハミチック」にして、稍「セミチック」に似たり。其文字は素象形文字なり。然れども後に至りて一種の速記的文字となり、稍、簡畧なる形跡となれり。主として僧侶の間に行はる。紀元前八世紀の頃に至りては、更に一層簡便なる速記體の文字となり、普く庶民の間に行はれき。最後に至りて、即ち耶蘇紀元後三世記の初より七世紀の頃には、純然たる以呂波的文字となる。是れ埃及人の基督教化せるもの、創始せし所にして、希臘の字母を用ふ。是故に埃及の文字は前後四回の變遷を經、象形より以呂波的に進化せり。

埃及に関する研究は前世紀の終に於けるナポレオンの遠征以來大に開け、

有名なる埃及學者頻々として輩出し、歐羅巴人文との關係も隨て漸く明なるに到れり。今其大要を摘記せむに、希臘に於ける古代アチカの宗教、及び社會組織に埃及の影響ありしことは殆ど疑ふべからず。又ピタゴラス、タレス、ソロン、デモクリトス、及びプラトーン等の希臘哲學者が埃及の僧侶に學びたるの事實は、彼等の所説の起原を解釋するに於て多少の光明を放てり。例せばピタゴラス氏が、輪廻説は埃及思想に本きしとの説の如し。又造形美術の如きも、希臘は大に埃及に負ふ所あるが如し。^(チールシユ氏の説)希臘の古代史家ヘロドトス氏は、已に希臘神話中の『テメテル』神を、埃及宗教の『イシス』と同一なりとせり。是等の説は素より設想に過ぎずと雖も、東西人文の關聯は何人も否定すると能はざるなり。

第五章 『セム』人種

(一) 總説

『セム』人種の邦土。——人文史上『セム』人種の位置。——世界史的民族としての『セム』人種。——『アールヤ』人種と『セム』人種との比較。——『セム』人種の宗教。——『セム』人種の宗教は何故に一神教なるか。——一神教と學術。——『セム』人種

の宗教と美術。——

(二) アツシユリア及びメビロニア

舊メビロニア、アツシユリア及び新メビロニア。——舊メビロニアの人文。

(三) フォイニケイ

航海、商業、建築。——政体。——民地、カルターゴ。——奴隸の使用。

(四) マレスチナ

希伯來人の移動。——マレスチナの宗教。——風俗及政治。——文學。——例一、

詩篇第四十六章。——例二、約百記第十二章。——例三、約百記第十九章。——希

伯來詩歌の對句法。——美術及科學。

(一) 總説

『セム』人種の邦土。

『セム』人種の邦土は、イラン高原以西西部亞細亞の諸邦を含む。其主要なるものは、メビロニア、アツシユリア、フォイニケイ、及び猶太なり。其他カルデア、スリア、サマルタニア、エテオピア、アラビア等も亦之に屬す。

之を言語上より南北二種に別つことを得。即ちカルデア、アツシユリア、メビロニア、猶太、サマルタニア及びフォイニケイは北部に屬し、エテオピア及びアラビアは

人文史上『セム』人種の位置。

世界史的民族としての『セム』人種。

『アールヤ』人種と『セム』人種の比較。

南部に属す。

『セム』人種は『ハム』『アールヤ』(東洋に於ける)二人種よりも、世界の人文史と一層密接の關係を有す。實に今日人類活動の中樞と稱すべき歐羅巴人文の源泉は、主として南歐『アールヤ』民族と『セム』民族の二人文の交渉受發の結果に歸せざるべからず。左に『セム』民族の一般人文に就て一瞥せむ。

『セム』人種は世界史的の民族なり。何をか世界史的と云ふ。即ち其文化の及ぶところ單に自國の境域に止まらず、單に自國の子孫に限られず、況く世界人類の發達に貢獻し、其進歩を助成し、以て其共同生活の一活素たるにあり。今歐羅巴人文を組織するの經緯は主として『アールヤ』民族と『セム』民族となり。是二者は兩々錯綜交貫して、歴史の中系を成し、二千年の間互に抱合融和し來りしもの、所謂世界史的民族と稱すべきものなり。

然れども其民族的性情は則ち二者大に同じからず。『アールヤ』民族は多面的也、然れども『セム』民族の精力は常に一面に偏す。宗教は『セム』民族の至寶也、然

れども『アールヤ』民族の力を盡す所は、寧ろ政治文藝にあり。其精神的傾向に於て『セム』民族は寧ろ主觀的にして、『アールヤ』民族は寧ろ客觀的なり。感情及び意力の主我的傾向は實に『セム』民族の特色なり。彼等は一切事物を觀するに必ず自我の立場よりす、苟も自我の目的、渴仰、もしくは要求に適應せざるものは、彼等にとりて一彈指の價值無きなり。『アールヤ』民族は則ち然らず。彼等の心情は天然の鏡なり。眞を眞とし、美を美とし、萬殊の事物を見るにも其れ自身の價値を以てす。故に其學藝は必ずしも功利を問はず、主我的傾向を離れて討究尋索の自由を容る。『セム』民族は最も宗教に熱心なる民族なり。然れども其崇拜する所の神は自國の神のみ。其屬性狹隘偏頗にして平等普遍の大威力を欠く。自ら神の撰民なりと稱せるは、即ち是主我的宗教の精神に本く。是の如き狹隘偏頗なる主我的宗教より、平等博愛を旨義とせる基督教の發達し來れるは、主として希臘的『アールヤ』民族の勢力なり。『セム』民族たる基督自身は實に是樊籠を打破して、純然なる人道の爲に福音を傳へしなり。是の如くにして基督教は初めて『アールヤ』民族の宗教となれりき。

『セム』民族の人文は徹頭徹尾宗教的なり。其社會の法制は、『アールヤ』民族に於けるが如く、人民の自由なる結合に成るものに非ず、預言者を通して表示せられたる所謂神意なるものに本く。彼等は戸を閉ちて他と交らず、其經典に示されたる家長的體制は、永く其家族制度の模倣として保守せらる。彼等は智識信仰に於て新らしきものを要むるを欲せず、只其傳統古訓に違はざらむことを務むるのみ。『アールヤ』民族が常に其進歩的傾向を有すると全く其趣を異にす。而れども是宗教的精神に富めるの一事は、實に『セム』民族が世界史的なる所以なり。シナイ、ダボール、ユルガタの山、エルザレム、メツカの市府は決して其歴史上の意義に於て、亞善、羅馬、巴里に劣るものにあらず。畢竟『セム』民族は歐羅巴人文史の門戸を開きたるものと謂ふべし。

『セム』人種の宗教。

『セム』民族の邦土は古來三大宗教の搖籃たり。猶太教、基督教、及び回教是也。是等の宗教は何れも歐洲人文史上に大勢力を有せるもの、『セム』民族たるモーゼ、モハムメッド、基督は、亦『アールヤ』民族の立法者、預言者、救世主として一宗教の福

『セム』人種の宗教は何故に一神教なるか。

音を傳播したるものなり。實に『セム』民族の宗教は一神教なり。之れ是民族の性情及び外國の自ら然らしめし所とす。蓋し神なるものは自家理想の投影なり、純ら自我を主幹とし、中心とするものは、其渴仰する所の神に於て自我唯一の理想を認めずむばあらず。是の如くにして初めて其心を安じ、其情を慰むるを得べし。故に約言する時は、心を虚ふして天然に接する所の『アールヤ』民族は、多神教的にして、我を主として萬有を統一とする所の『セム』民族は一神教的なり。且夫れ『セム』民族を圍繞する所の天然は、多く砂漠荒原なり。山河の奇なく、風雲の變なく、四時の代序、且暮の風光、自ら單調に傾き易し。目を舉げて遠く望むも、茫漠連天の平野は一律無限の感情を惹起するのみ。是の如き境遇に棲居するものが、群小靈鬼を畏怖せずして、唯一至大の神を崇拜するは、最も自然の人情なりとす。是れ『セム』民族の宗教が凡て一神教なる所以なり。陰陽受發の二面を表して男女兩神を對立せしむるは、多く『セム』的宗教に見る所なり。然れども是民族の一神教的渴仰は、常に二者を以て唯一神體の兩面として思惟す。

一神教と學術。

是強盛なる一神教的傾向は、其學術の發達を沮遏せり。『セム』民族は事物の因果を尋究し、道理によりて其根本的説明に到達せむことを欲せず。一見解釋し得ざるものは、凡て以て神意に托す。『神は大なり、神はそを知り給ふ』之れ『セム』民族が唯一の説明なりき。希臘人、印度人、獨乙人が艱深なる哲學上の研究によりて自ら得る所の世界觀をば、彼等は袖手無爲にして預言者の口より聞かむことを求む。預言者の言は彼等が專念依信して疑はざる所なればなり。是を以て中世紀に於けるアラビヤ文明を外にして、『セム』民族は學問に於て何等較著の發達を示さざりき。

『セム』人種の宗教と美術の

『セム』民族の性情は、先にも言へる如く、主觀的に傾けり。外界を主觀に萃め、精神を形骸に見る。是を以て心中の理想を客觀的に體現せる形像美術の如きは、彼等に於て用無きなり。故に『セム』民族は美術を有せず、又曾て有せむことを務めざりき。彼等は自然界に於て唯一遍在の神を認むるを旨とす。一切の形骸は其中に現はるゝ精神を外にすれば、畢竟死灰枯木のみ。美を美として賞翫するが如きは、彼等の想ひ到らざりし所なり。故に彫像の如きは、彼等の間に嚴禁せ

られき。フティアス氏(希臘の名匠)の『ツオイス』神像にして、若しパレステナに運搬せられなば、恐くは、一嘆美の聲を聞かずして直に粉碎せられしならむ。蓋し『セム』民族の性情を支配する至強の勢力は、宗教、道德的觀念なり。精神を捨て、形式に就く勿れとは、累世の預言者が口を極めて戒飾せし所なり。所謂法律と預言者とは、彼等の專念信憑せし所なりき。故に他邦に於ては普通に見る所の宗教と美術との連結は、是民族に於て見ること能はず。幽遠微妙の觀念を現はすに、面妙相好の美術を以てするは、彼等の主觀的傾向の禁止する所たり。以上は『セム』民族の特性の概略なり。左に其主要なる國民に就て、其人文を略述せむ。

(二) アッシリア及びバビロニア

エウフライト及びチグリス兩岸の地は、地味豊饒にして人口繁殖に適す。アッシリア及びバビロニアの兩國が、埃及に次げる最古の人文民族として是地に興りたるは、偶然に非ざるなり。

政治上より興廢の順序を云ふ時は、番バビロニア王國初めに起り、アッシリア帝

番バビロニア

ア、アツシエ
リア及び新バ
ビロニア。

國之に繼ぎ、新バビロニア王國其後を承く。舊バビロニアの年代は、今日明に知
り難しと雖も、少くとも紀元前二千年を下らざるべく、新バビロニアの波斯王キ
エロスの爲めに亡ぼされたるは、紀元前五百三十八年なり。其間凡そ一千五百
年。
是等王國に關する政事上の事蹟は、舊約全書中創世紀及び以塞亞、耶列米亞以西
結の諸記によりて其一斑を窺ひ得べし。然れども其人文の永く後世の範とな
りたるもの多きを以て比較的精細に知られたり。

舊バビロニア
王國の人文。

舊バビロニア王國は一にカルデア王國と稱す。數學及び天文學の進歩は
遙に埃及を凌ぎ、百世の嘆美する所也。日蝕及び天躰の觀察によりて一年を十
二月に分ち、獸帶十二支を畫し、又月の運行によりて一週間を七日と定め、一日
を十二時に、一時を六十分に分てり。夙に秤量の法を定め、普ねく西部亞細亞に
行はる。建築は見るべき者無し。然れども諸種の工藝に巧みなり。商業は土
地の便利によりて早く已に發達し、波斯灣は其商船の通路たり。若し夫れ文學

に關しては、ニニエ及びバビロンの圖書館あり。多く天文の書を藏む。又古代
「アツカディア」「バビロニア」前代の民族、語の翻譯書を萃むること少からず。中に
「イゾパール」傳説 (Isidore Sage) あり。世界の創造、及び洪水に關して舊約全書創
世記載する所と酷似せる文字あり。又其所騰の詞には、宛然としてダビデの時
篇を想起せしむるものあり。其一例を擧ぐれば、

神々の怒は、苦痛、疾病、憂悶を以て吾を罰し給へり。オ、大神よ、爾の僕を救へ。
彼の胃したる罪は爾の力をもて正義に變らしめよ。

又死せむとする者の爲にする祈禱は注意すべし。曰く、

彼は病みて死に瀕せり。されども彼の爲に心を痛め給ふ「イシニタル」神

の神は、人足の曾て到らざる其山を下りて、病める彼の戸口に立ち給ふ。病め

る彼は嘔きて來るは誰ぞと問ふ。怪む勿れ、吾は「イシニタル」ぞと神は宣ふ。

かくて神は病める彼の側近く寄り、空なる星の宮居より齎らせる天の杯をど
りて、火花散る飲物を注ぐ。病めるもの忽ち是杯の如く輝き、其衣は銀の如く
其顔は黄金の如く、神の宮居の空高く登り去る。

アツシユリヤ及び新ペロニアの人文は舊ペロニアの傳燈に過ぎざれば、殊に言ふに足らず。

(三) フォイニケイ

フォイニケイ

フォイニケイはレバノン山と地中海との間にある一帯の狭小なる土地なり。古物奮肥の欠乏せるが爲に、其精確なる歴史は今日到底知り難し。

航海、商業、建築。

古代歴史に於て一種出色の人文を有せし所以なり。其遠洋航海は、紀元前三世紀の初めに於て已に従事せらる。フォイニケイ人は沿岸航海より進みて遠洋航海を企てたる最初の民族なりき。然れども所謂銅器時代に於て是民族が北部歐羅巴に何等かの影響を及ぼし、か將た又其沿岸に上陸せしことありしかば頗る疑ふべしとなす。

又フォイニケイ人は隊商を組織して西部亞細亞の諸邦と交易せり。貿易品の主要なるものは、金銀、奴隸、酒、穀物等なり。銀貨の鑄造は是民族に初まる。玻璃、紡績、顔料、採鑛等の實業も夙に行はれ、又建築術に長ず。然れども其遺跡殆ど全く

政略。

蕩盡し、唯ヘリオポリス及びパルミラの古蹟の曲に當年の莊大華奢を想はしむるあるのみ。其他の美術は言ふに足らず。航海業の隆盛と共に、造船術は殊に進歩せり。

フォイニケイの政略は古代に於ける唯一の共和政略なり。是點に於て是民族は希臘及び以太利の模範なり。

殖民地。

カルタゴ。

フォイニケイ人は航海の民なるを以て地中海の沿岸に幾多の殖民地を作れり。就中歴史上尤も有名なるものは、古代のエニスと稱せらるる「カルタゴ」(Carthage)なり。其國家は商業的なると同時に戰争的の組織を有し、刀劍の力によりて牙籌の利を擴張せむことを力めたり。其政治歴史は三期に分たる。即ちカルタゴ人と北亞弗利加人との戦争を第一期となし、チ、リア島の攻略を第二期となし、羅馬帝國との交戦及び没落を第三期となす。

奴隸の使用。

奴隸はフォイニケイに於ても、カルタゴに於ても、盛に使用せられき。カルタゴ人が西班牙の銀山に使用せるものゝみにても、四萬人を下らざりしと云ふ。

(四) バレスチナ

パレスチナ

『セム』民族の特性を最も明に發揮し、其人文の中心となれるものは、カナイン即ちパレスチナに於ける希伯來人なりとす。曾て神の撰民と稱し、一切他邦を排斥したる希伯來民族は、今日尙猶太人として、歐米諸邦にありて其祖先の排外的精神を保存せり。是民族の人文史上に於ける意義は、パレスチナの人文其物よりは、寧ろ其所生たる基督教に關係する邊に存す。

希伯來人の移動。

希伯來人は素游畜民族にして、耕作の發達せるは後年にあり。常に家長制度の下に支配せられ、未だ曾て鞏固なる國家を組織せしこと無し。其家長は民族全体を代表して其先導者たり。初めはウル河を越てカルデア、メソポタミアよりカナインに赴き、更に又埃及に赴きしが、其民族は漸く乖離分裂せり。是時に當りてモーゼは其埃及の神祕説を調攝せる一神教を以て、一部の民族を統率せり。然れども其『エホバ』崇拜と、カナイン若くはフイニケイ人の多神教的信仰との紛争は、久しく結で解けず、カナイン人は希伯來人に征伐せられたる後にありても、尙ほ敢て其舊信仰を捨てざりき。

パレスチナの宗教。

モーゼより後、パレスチナは神政を組織し、其一神教をして極端なる國家的性質

風俗及政治。

を帯ばしめたり。蓋し希伯來人は、素嚴峻なる家長制度の下に棲息したるを以て、其眼界甚だ狭く、自尊孤負の念深く、自國の民族を以て他邦に比して殊に優秀なりとなし、遂に神の撰民なりと妄信するに至れり。故に其崇拜する所の神の如きも、平等博愛の神にあらずして、差別偏愛の神なり。之れ其主我的精神の自ら然らしめし所なり。

希伯來人の風俗は概ね粗野なり。奴隸は常に其社會に附纏せり。然れども家族の關係は清淨にして、婦人は尊敬せらる。町村は儼然たる自治制度を有し、最高の判官は僧侶なり。商工業はフイニケイに比しては殊に言ふに足らず。國家の体制は常に薄弱にして、其神政は無力なり。故に政治的國民として何等較著の事蹟を止めざりき。

文學。

然れども其文學は大に注意すべし。之れ宗教と均しく是民族の創始に係り、又宗教と均しく峻鋭なる國民的特性を具へたり。實に舊約全書の一部は、密に希伯來民族の文學として注目すべきのみならず、古代人文の一大産物にして、其壯大高崇の詩趣は、後世の文學に於て永く見るを得ざる所なり。希伯來文學は優

美の文學に非ざるも、實に崇嚴無比の文學なり。而して是の如き崇高なる觀念は多く抒情詩に存す。蓋しパレスチナには全く戯曲なく、叙事詩に乏し。抒情詩は其唯一の文學たるなり。約百記詩篇、以賽亞以下の預言者記を一讀せば略、其特性を了することを得べし。左に一二の例を擧げむ。

例一、詩篇第四十六章

神は吾等の避難所、また力なり。憐れむ時のいささかき助なり。さればたゞ地ばかり、山は海の中央に落つることも、吾等は恐れず。設し其水は鳴り轟きて騒ぐとも、其溢れたるによりて山は揺ぐとも、何かあらむ。河あり、其流れは神の都を喜びしめ、主上者の住みたまふ聖所をよるこぼしむ。神其中にいませば、都は動かす。神は朝つこに是を助け給はむ。もろくの民は騒ぎ立ち、もろくの國は動きたり。神其聲をいだし給へば、地はやがて解けぬ。萬軍の「エホバ」はわれらともなり、「ヤブ」の神は吾等の高き楯なり。來りて「エホバ」の事蹟を見よ、「エホバ」は多くの恐るべきことを地に爲し給へり。「エホバ」は地のはてまで戦をやめしめ、弓をなげ、戈をたれ、戦車を火にて焼き給ふ。汝等静まりてわれの神たるを知れ。われはもろくの國の中に居められ、全地にあらめらるべし。萬軍の「エホバ」は吾等と併なり、「ヤブ」の神は吾等の高き楯なり。(詩篇第四十六章)

例二、約百記第十二章

ヨブ答て曰ふ、汝等而已まことに人なり。智慧は汝らと共に死なむ。我も汝等と同じく心あり、我は汝等の下に立す、誰か汝等の言ひし如き事を知らざらむや。我は

神に顧はりて聞かるとものなるに、今其友に嘲けらるゝ者となれり。嗚呼正しく且完たき人あざけらる。安逸なる者は思ふ、輕侮は不幸なる者に附添ひ、足のよるめく者を俟つ。掠め奪ふものゝ天幕は榮え、神を怒らせ、自己の手に神を携さふる者は安泰なり。今請ふ獸に問へ、然らば汝に教へむ。みそらの鳥に問へ、然らば汝に語らむ。地に言へ、さらば汝に教へむ。海魚も亦汝に述べべし。誰かこの一切の者に依て「エホバ」の手の是を造りしなるを知らざらむや。一切の生物の生氣、及び一切の人の靈魂、ともに彼の手の中にあり。耳は既話を辨へざらむや。そのさま怡も口の食物を味ふが如し。若たるものゝ中には知難あり、審長者の中には頓悟あり、知難と權力は神に在り、智謀と頓悟も彼に屬す。視よ、彼れ毀てば再び建つること能はず、彼れ人を閉こむれば閉き出すことを得ず。視よ、彼れ水を止むれば則ち涸れ、水を出せば則ち地を滅ぼす。權力と頓悟は彼にあり、感さるゝものも感はずものも共に彼に屬す。彼は驕士を裸身にしておき、審判人をして服する者とならしめ、王等の權威を解きて反て是が腰に纏をかけ、祭司等を裸にして披へゆき、權力あるものを滅ぼし、言爽やかなるものゝ言辭を取除き、老たるものゝ了知を奪ひ、侯伯たるもの等に恥辱を蒙らせ、強き者の帯を解き、暗き中より隠くれたる事等を顯はし、死の蔭を光明に出し、國々を大にし、又是を滅ぼし、國々を廣くし、又是を舊に復し、地の民の長たる者等の了知を奪ひ、是を路なき荒野に吟行はしむ。彼等は光明なき暗にたゞる、彼れ又彼等を酔へる人の如くによるめかしむ。

(約百記第十二章)

例三、約百記
第十九章。

ヨア答て曰く、汝等吾心を憫まし、言語をもて我を打くたゞこそ何時までぞや。汝等已に十たびも我を辱め、我を悪しく待ちひて尙ほ愧づるところ無し。假令われ眞に過ちたらむも、其過は我の身に止れり。汝等眞に我に向ひて誇り、我身を羞へき行爲ありと證するあらば、神われを虐げ其網羅をもて我を包み給へりと知るべし。我虐げらるるを叫べども答無く、呼はり求むれども審理無し。彼わが路の周圍に垣を結びめぐらして逾る能はざらしめ、我が行く途に黑暗を蒙らしめ、わが榮光を翳ぎ、我冠冕を首より奪ひ、四方より我を毆ちて失せしめ、我望を樹の如くに根より抜き、我に向ひて怒を燃やし、我を敵の一人と見たまへり。其軍旅ひとしく進み、途を高くして我に攻寄せ、わが天幕の周圍に陣を張り、彼れわが兄弟等をして遠くわれを離れしめ給へり。我を知る人々は全たく我に疎くなりぬ。我親戚は往來を休め、わが朋友は我を忘れ、我家にやどるもの、及び我婢等は我を見てあだし人の如くす。我彼等の前にては異國人の如し、われ我僕を喚べども答へず、我れ口を以て彼に請はざるを得ざるなり。わが氣息は我妻に厭はれ、わが貌はわが同胎の子等に嫌はる。童子等さへも我を侮り、我れ起上れば則ち我を嘲ける。わが親しき友我を惡み、我が愛したる人々馳へりて我敵となれり。我骨は我皮と肉とに貼けり、我は僅に齒の皮を全うして逃れしのみ。我友よ、汝等我を恤れぬ。神の手我を撃てり、汝等何ぞて神の如くして我を攻め、我内に鑿くこと無きや。望むらくは我骨の書留められむことを。望むらくは我骨書に記されむことを。望むらくは鐵の筆と鉛とを以て之を永く磐石に鐫つけおかれむことを。我れ知る我を顧ふ

ものは活く。後の日に彼必ず地の上に立たむ。我がこの皮、この身は朽はてむ後、我れ肉を離れて神を見む。我れ自ら彼を見奉らむ。我目彼を見むに知らぬもの、如くならし。我心彼を望みて集る。汝等若し我等如何に彼を攻めむかと言ひ、また事の根われにありと言はむ、劍を懼れよ。怒怒は劍の野を來たす。斯く汝等遂に審判のあるを知らむ。
(約百記第十九章)

希伯來詩歌は一種の形式を有す。對句法是なり。即ち前句後句と兩々相對照し、語調の轉移、思想の推渡、亦相呼應す。之れ支那の詩經に見るものと略、其趣を同うす。

惡き者來れば藐視したがひて來り、
耻來れば凌辱もともに來る』
人の口の言は深き水の如し、
湧て流るゝ川智慧の泉なり』
惡しき者を偏り視るは善からず、
審判をなして笑しき者を惡しとするも亦善からず』
惡なる者の唇は争を起し、
其口は打たるゝことを招く』
惡なるものゝ口はおのれの敗壞となり、

希伯來詩歌の
對句法。

美術及科學。

其口唇はオのれの靈魂の響きなる」

(箴言第十八章)

パレスチナには賞讃すべき造形美術無し。有名なるソロモン王の殿堂の如きすら特に言ふに足らず。パレスチナには古來大都邑を有せず。エルザレムすら其最盛時に於て僅に四萬乃至五萬の住民を有せしに過ぎず。之れ猶ほ今日魯西亞に於ける古「メラブ」の游牧民に於て見る如く、パレスチナの民族も亦其漂浪の生活に慣れて、一定の都會に住するを嫌ひしが爲か。科學は極めて幼稚にして、自國以外に於ける地理及び人種上の知識も亦甚だ狹隘なり。歴史と傳説とは常に混淆せられ、年代は紛亂して知るべからず。今日只橄欖山下の古城趾に零落の遺蹟を見るのみ。

パレスチナの歴史は舊約全書にあり。是書の編集結集の年期は其部分によりて一ならず、然れども少くとも紀元前一世紀以前に於て終結せられたるものなり。

第五章 古代西洋人文に及ぼせる東洋人文の勢力。

吾人は前四章に於て、東洋古代の人文を畧述したるを以て、西洋に遷るに先ち、東西二派の人文思潮が、古代に於ける關係の一斑を述べむと欲す。

希臘及び羅馬の人文が東洋に負ふ所あるは今日明白なる事實となれり。之れ素より希臘羅馬に毫も其固有の人文なしと云ふにあらざ。只其間に外來の勢力の存在を認むるのみ。而して是の如き勢力は今日舊記の徵すべき者尠きを以て、素より之に就て精確なる知識を有する能はず。然れども其人文の比較研究上優に推測し得べしとす。

東洋の人文が西洋に影響を及ぼし、は、主として希臘人文の初期及び末期にあり。古代アツチカの宗教及社會制度は明に埃及の痕跡を印し、其曆法も亦埃及に起原せり。希臘の學者ピタゴラス(Pythagoras)、タールンヌス(Thales)、ソロン(Solon)、デモクリトス(Democritus)、及びプラトーン(Platon)等は皆埃及僧侶の教を受け、殊にデモクリトス及びプラトーンは躬ら埃及に旅行せり。後者の神話には埃及的なるもの多し。又希臘の或神は埃及より輸入せられたり、例せば「デメーター」(Demeter 希臘の神)、「イーシス」(Isis 埃及の神)に於ける「アテナ」(Athena 希臘の神)の

「ナイト」(Neth)埃及の神に於けるが如し。又最古の希臘の通貨はリニアより來れるものにして、其計量尺度は全くペロニア的なり。蓋しリニア及び波斯は、信度河以西に於て、通貨鑄造を知りたる最古の民族にして、金錢なる語の起りたる「ムナ」(Mna)は素カルデア語なり。希臘に度量衡を輸入し、且始めて金錢を鑄造せしは、アルゴスのフェイドン氏(Phaidon)なり。フイニケー人は希臘人に教ふるに航海を以てし、又種々の神を輸入せり。希臘の神話に於ける「アフロヂテー」(Aphrodite)「アンテミス」(Artemis)「ポセイドン」(Poseidon)等は素フイニケーの神なり。「ヘラクレス」(Herakles)も亦然り。又ユリントの海峡に祭られたる「ペルーモン」(Palæmon)はフイニケーの海港、タイルの神なる「メルカルト」(Melkart)を移したるものなり。小亞細亞のフリギア(Phrygia)も亦希臘宗教に少からざる影響を有せり。希臘羅馬の以呂波文字は、全くフイニケーに起原し、其美術にはアッシリアの痕跡あり。信憑すべき學者の説によれば、アッシリアの勢力は小亞細亞、フイニケー、カルターゴより希臘に及び、希臘の最初の彫刻は、恐くは其模型をアッシリアに取りたるものゝ如し。是希臘に影響したる同一の勢力は、フイニケーの

殖民地及び貿易を介して以太利に波及し、エトラスク人文の根據を作り、後代羅馬の文物に多少の感化を興へたり。

以上は希臘羅馬の初期の人文に關す。若し夫れ末期の人文に至りては、希臘の哲學は全然東洋の色彩を有せり。所謂新「プラトーン」派の哲學は、東洋思想の間に涵養せられ、亞善に流行せるに先つこと凡そ一百年の當時に於て、已に「ソクラテス」に勃興せり。

第三編 歐羅巴

東洋諸邦の人文は其性質自ら一定の界限を超て進歩する能はざるものあり。是を以て古代にありて如何の勢力を有したりしに係らず、希伯來宗教の間接的影響を外にすれば、後世歐洲人文の發達と殆んど關與する所無し。希臘及び羅馬の人文は則ち然らず、其發生及び進歩の情狀は大に東洋人文のそれと其趣を殊にし、夙に其後代に有すべき大勢力を預告せり。吾人東洋より去て眼を茲に轉すれば、全然別種の人文を認むべく、彼の瑰異、奢促、鬱憂の風調に對して、清新、自由、快濶の一生面を看拓し來るべし。實に希臘及び羅馬の二邦は歐羅巴人文の源泉にして、其美術、哲學、行政、法律、宗教は殆ど三千年間の歴史的經行を整理したるの觀あり。而して年代の上に於て是人文史上の先頭に立つものは希臘なり。

國破れて山河あり、ペロクロレイスの希臘も、アウグスツスの羅馬も、今は唯山河の寥落を殘すのみなりと雖も、其人文は世界の歴史の中に尙ほ凛々たる生氣を以

て活動しつゝあり。希臘は文を以て人心を感化し、羅馬は武を以て邦國を統一し、俱に共に基督教を包容して之を西北歐羅巴に傳授し以て十九世紀の偉大なる人文を經緯するに至りたるの歴史は、吾人の茲に畧述せむと欲する所なり

第一章 希臘

希臘人文の勢力。——アイルンヤ人種の特質、自由、考察、及進歩。——希臘はアイルンヤ的特性の發達に尤も適當なる土地なり。——印度人と希臘人。——希臘の土地と政治的分裂。——言語、宗教の同一。——希臘にあらゆる國家の林制を有す。——君主。——社會の狀態。——教育。——軍事、航海、及殖民。——希臘美術の特色。——建築。——彫刻。——希臘人の理想と其彫刻。——宗教、其政體との關係。——神話。——未來の觀念の薄弱。——希臘哲學。——宗教と哲學。——純客觀的傾向。——主觀的傾向。ソクラテイス氏。——プラトーン氏及アリストテレス氏。——純主觀的傾向。——希臘の文學。——ホメーロス。——戯曲及演劇。——希臘人文の四期。——マケドニア。

希臘人文の勢力。

地の小と時の短とに比例して、其人文の程度及び勢力を言はば、古來何の邦國か希臘に及ぶものあらむや。有史以後其滅亡に至るまで、希臘の歴史は前後

七百年を出でず。是れ埃及王が其金字塔の敷基を造るに要する時間に非ずや。其人口を言ふも其最盛時に於て一千萬を出づべからず、其中自由の市民は二三百萬に過ぎざりしなるべし。希臘の首部なるアツチカ(Aege)の廣表は四十方哩にして住民五十萬を超えず。其首府アテーンには僅に十八萬の市民ありしのみ。

是の如き小土地、少人口、及び短時間の間に、希臘民族が到達したる人文の程度は實に驚くべきものにてありき。其由來の如きは素より其精細を知るに由なしと雖も、所詮は人種の特質と風土の状態との尤も幸福なる抱合に歸せざるを得ず。

希臘に於ける有史以前の住民は「ペラスキヤ」(Pelagii)にして「アールヤ」人種なり。然れども同人種に屬せる「ヘレチス」の轉住するや、是二者相混し、後者遂に優勢を占むるに至る。即ち茲に「ヘレチス」は希臘人文の支撐者となれり。

【元來是「ヘレチス」は是民族の眞の名稱にして、希臘なる國は是民族の間に知られざり

アールヤ人種
の特性

自由、考察、
及進歩。

しなり。ケレシヤ(希臘)なる國の起原は不明なれども、悉くは羅馬人がアドリア海の島岸なるケレシヤ(Ceae)族と交通し之を全ヘラス中島の住民に適用せしより起りたるものなるべし。

其氣候風土の影響を抽離し去りて、茲に世界の諸方に散在せる「アールヤ」人種の特性を考ふるに、其顯著なるものは自由を旨とすること、考察を喜ぶこと、及び進歩を尙ぶこと、是なり。自由を旨とするが故に、壓制に對して平等を唱へ、考察を喜ぶが故に、當眼の現象に満足せずして深く事物の原理を究明せむことを務む、夫れ唯進歩を尙ぶ、是故に舊型に泥まず、古例に制せられず、其理想と立する所に向て念々不退轉の精進を怠らず。常に社會の改善、政治の革新を以て意とするなり。印度「アールヤ」民族にありては、其土地の豊饒と氣候の烈熱とは、其進歩心を沮遏したりと雖も、尙ほ其理想に對する渴仰を失はず、唯是を其現世に望まずして超自然界の彼岸に望みたるのみ。其考察は客觀世界に向はずして却て主觀的に自我の内面的思索に耽りたりと雖も、智識を求めて飽くことを知らざるの事實は其先天的考察性の存在を明にせり。其自由の精神も亦終始消磨せず、之れ所謂六哲學派が婆羅門教の形式的教義及び階級に反抗し、遂に佛陀教の無

希臘は「ア
ルヤ」的
特性に最
も適當な
土地なり

印度人
と希臘
人。

差別平等主義の出現を見るに至りたるの事實によりても之を知るに足るべし。若し夫れ希臘は是「アルヤ」的特性の發達に最も適當なる土地なり。マケドニアの境界も北緯四十二度を超へず、ラクレモーンの南端は三十六度に至らず。幾多の港灣は山脈に沿て出入し、内地は自ら小地方に區劃せらる。東方諸邦に見る如き茫々無際之平原は是半島に見るべからず。住民は海陸動靜の間に立ちて其思想亦常に生氣あり。山にありては牧畜と耕作とを營み、海にありては漁獲と航海とを業とす。航海は自ら交易を副へ、フイニキア及び埃及カルクレイどの聯絡は、大に其思想に影響せり。氣候は一般に温和なりと雖も、土地の多様に隨て一律ならず。山海の區劃は又幾多の小邦國を獨立せしめ、自由自治の精神を鼓舞したり。三面海に圍まるも、天空海濶萬里涯際無きに非ず。此無數の島嶼其間に點綴し、山海の風光明媚を極む。氣象の變化も急激暴烈ならず、天朗氣清人心をして爽快ならしむ。地は狭しと雖も耕せば收むべし、海は深しと雖も漁れば獲べし。是の如き風土に涵養せられたる「アルヤ」人種は、印度波斯に於けるが如く自然力の壓抑を受けず、其特性は活潑々地の發展を遂げ、殊に其

希臘の地勢と
政治的分裂。

美的感情の顯敏は典雅なる自然界の模倣によりて最も圓滿なる發達を爲し得たり。印度人は外界の壓抑の爲に其精力を内面に集注し、遂に鬱憂なる唯心的考察に沈溺し、客觀世界を嫌惡蔑視したるを以て美的感情の如きは殆ど之れ無かりき。希臘人は則ち之に反し、内心と外界との間に殆ど完全なる調和の存せるが爲に、其心主觀に偏せず、客觀に走らず、自然と精神の均衡は遂に其造形美術の中に後代得て企及すべからざるの圓滿を現じたり。其の哲學に於て客觀的考察を怠らず、行政法律に於て常に健康なる現世主義を保ちしは實に希臘に於ける「アルヤ」民族が其幸福なる天然の勢力に負ふ所なり。

是の如く希臘は天然の地勢によりて幾多の小獨立國に分裂せるを以て、吾人は其歴史上全半島を統一せる國家、若くは法庭を見ず。各邦互ひに其利益を主張し、紛争常に絶えず、所謂四分五裂の状態なりき。唯一の「アムフヒクテオニア」會議 (Amphyktionia) ありきと雖も、素より國家の活動を一軌の下に統率するものに非ず。スパルタはペロポネソスに於て「ドーリア」民族の間に貴族的國

家團躰の盟主となり、アテューは「イオニア」民族の民主的國家團躰の盟主となり、
 兩々相對立せしは希臘に於ける最大の統一なり。只波斯の如き外敵ある時に
 當りてはヘラスの各邦は共同して之を擊退したり。然れども其患去れば漸ち
 忽ち舊躰に復し、ペロポネツッス同盟はスパルタの下に、新多島海同盟はアテ
 ーの下に、再び其往日の分裂を見き。ペリクレース氏(Pericles)が全希臘同盟の企
 圖は遂に一の空想に過ぎず。全半島の統一は初めてマクドニア王國によりて
 成就せられたりき。事情斯の如きを以て、亞細亞諸國に於ける如き大都府の
 勃興を見ず、各邦各其特有の文化を有し、其種類程度に於ても差別甚だ多し。ア
 テーの文化と、スパルタの氣風とは殆ど正反對を成せるを以ても之を想ふに
 足るべし。只其言語宗教の同一は、希臘全半島の間一種の國民的感情を形成
 し、外患ある毎に同胞同族の親密を以て、一致事に當りたるは猶り注意すべき事
 實なり。

言語宗教の同

希臘はあらゆる國家の體制

希臘は殆どあらゆる國家の體制を有せり。其初めは各邦を通じ、國家の結合は
 即ち同族の結合にして、家長的王政若くは若干百長の專制々度なりき。王政漸

く衰ふるに及びて、茲に貴族政治起りしが、紀元前七世紀の頃より共和的寡人政
 治起り、共に轉じて民政となれり。民政の腐敗と共に暴民政治と爲るに及びて、
 遂に國家の滅亡となり、外國の屬邦となれり。

是れ希臘に於ける政躰一般の變遷なり。然れども各邦必ずしも是順序を蹈み
 て發達せるに非らず。或は貴族政治の代りに多人政治の行はるゝあり、或は共
 和的寡人政治を経過せず、貴族政治若くは多人政治より、直に民政に移りたるあ
 り。唯何れの邦國に共通せる一般の傾向として、認むべきは、政權の、少人數より
 漸次、多人數に轉移せることなり。即ち家長政治の始より暴民政治の終に主る
 までの政躰の變遷は、所詮政權の差別的分配より平等的分配に到達するの經行
 に外ならず。之れ東洋諸邦が終始君主專政政躰を維持したると大に趣を異に
 す。

盟主。

希臘列邦は隨時其盟主を有せり。其主要なるものはアテテ、スパルタ、アハイ及
 びマクドニアなり。是等の諸邦は、若干時限の間、各霸を稱し、列邦の中心となれ
 り。而して列邦中盟主となりて他を威服するの勢力を有するもの無き時は、即

社會の狀態。

ち希臘滅亡の時なりき。

今社會の狀態を見るに、西部「セム」民族の影響の掛からざるを認む。社會には階級制度無く、只奴隸あるのみ。商工業は自由平民に卑められ、多くは奴隸の手に歸せり。之れ希臘人が貿易上最も適當なる邦土に住して、而かも商業に於ては「フォイニケー」人と競争せざりし所以の一なり。而れども「コリント」「アテーネ」に於ては航海の業は盛に行はれき。錢貨の鑄造も已に紀元前七八世紀の交に知られ、耕作狩獵亦夙に行はれたり。殊に耕作は菓物の栽培と共に所謂勇士時代に於て既に盛に流行したるの形跡あり。人民は一般に他邦人に對して親切にして、家族の關係及び結婚は古より鄭重に維持せらる。躰操術及び諸種の競技は國民の擧て獎勵したる所にして、有名なる「オリュンピア會」「アムフィクテオニア」會議と共に平素獨立自存せる各邦國の一致協同に成る。車馬の競走、游泳、沐浴、亦盛に行はれき。

教育。

教育に關しては、學校は唯私立に係るものあるのみ。「アテーネ」の教育課程は、習

軍事航海及殖

字、讀書、美術、音樂、及び躰操術なり。就中音樂及び躰操術は、殊に國民教育の要素と思惟せられき。「ペリクレス」時代、即ち希臘人文の最盛時にありては、以上の外に作詩辯論、文法、哲學、軍學等あり。是等の諸學科は、所謂詭辯學派等の最も須要なる事業なりき。

希臘及び「マケドニア」は固有の軍學に養成せられたる軍隊を有せり。又外患ありし以來海軍も亦自ら發達せり。希臘人は「フォイニケー」人の跡を追て盛に航海貿易を行ひたる結果として地中海及び黒海の沿岸に幾多の殖民地を作れり。就中小亞細亞に於けるもの、如きは、其人文の發達却て本國に優る者あり。加ふるに「マケドニア」の勃興は兵力によりて其文化を傳播したるを以て、小亞細亞の全部及び西部亞細亞の一部は汎く希臘的人文の化澤を被れり。

美術は希臘民族が萬世に誇稱するに足るべき者なり。歐羅巴に於ける美術史上に於て「ペリクレス」時代の希臘に比し得べきものは、唯十五世紀及び十六

六世紀の文藝復興期の以太利あるのみ。實に希臘人は古今の歴史上最も美的感覺に穎敏なる民族にして、其社會萬般の事業一として美的ならざるは無し。即ちオリュンピア競技は人跡の美を尙ぶが爲にして、其衣服の裁縫より什具の形狀に至るまで、美的ならざるは無し。其宗教哲學の組織も亦尙ほ一種の美的趣味を帯はず。相稱、比例、統一、秩序、調和等に對する感覺は、彼等が先天的に有したる所にして、今人の遠く及はざる所なり。而して是美的精神は殊に其建築、塑像等所謂造形美術に於て其最も醇粹なる發現を見る。

希臘美術の特色。

希臘の美術がアツシリア、フォイニキア及び埃及の影響を被れることは明なり。然れども其均整明暢の風趣は實に其民族の美的性質に歸せざるべからず。東洋流の崇嚴偉大無しと雖も、整齊典雅、多様の中に一致を備へ、彼の瑰異不自然に陥らずして、能く均和の中に幽趣を湛え、温齋の間に微韻を寓するに至りては、萬世の齊しく嘆美する所なり。蓋し希臘人は東洋諸國の民族に異なりて、自然の美を認識すること甚だ穎敏なるを以て、其美術的製作も亦常に自然を離れず、精神と自然との間に一種微妙なる調和を解し、茲に均齊明暢なる美態を製作し得た

るなり。之れ建築に於ても、塑像彫刻に於ても、徒に驚くべき物質力を以て人の感情を壓促畏怖せしむるが如きこと無く、典雅莊麗、一見人をして愛着の念慮を起さしむる所以なり。

建築。

東洋諸國にありても、又ホメロースの詩中に見ゆる勇者時代の希臘にありても、家長王家の專制政治は、社會萬般の事物を驅りて王者家長の利益に供したるを以て、建築の美は一に宮殿に存したりき。然れども自由平等を尙ぶ後代の希臘にありては、全く是の如き自利の目的を離れ、建築は國國民族の均しく崇拜する所の神殿に於て其發達を見き。「ドーリア」式の均齊醇雅なる、「イオニア」式の優美沈靜なる、「コリント」式の華美典麗なる、何れも後代見るべからざるの微妙の域に達せり。「ドーリア」式最も弘く行はれ、有名なる殿堂は多く是式に據る。オリュンピアに於ける「ツォイス」神殿、「バルテノン」、「アクロポリス」の諸殿堂亦然り。就中「アクロポリス」の殿堂は、アテーナ市を下瞰し得る高丘に立てられ、是市の守護神「アテーナ」を祭る。規模甚だ大ならず、輪奐の美亦多く稱するに足らずと雖も、氣格高尚、雄然として千古の偉觀たり。「コリント」式は素埃及より由來せりとの考

彫刻。

證稍確實なるが如し。

然れども希臘美術中最も圓滿の發達を爲せるものは、彫刻及び塑像なり。其題目は概ね古代の神話及び傳説に憑據したるものにして、日常生活に關するもの甚だ尠し。其表現する所は、希臘人民が均しく渴仰し、崇拜する所の神祇にして、其面妙相好は彼等の國民的理想とする所なるを以て、模型的にして個性的にあらず。

希臘人の理想
と其彫刻。

元來希臘人の理想とする所のものは、東洋諸邦に見るが如く神秘怪奇のものに非らずして、自然現世及び人間と最も密接なる關係を有す。畢竟彼等は其美麗なる自然界を超越し、現世以外に或不可思議なる世界を求めず、故に其神として崇拜するものも、其軀相性情、毫も人間に異なること無く、要するに一種の理想的人間に外ならず。故に美術も亦自ら自然と精神との圓滿なる均齊調和を體現せむことを旨とせり。故に精神發表の主部たる顔面の如きは、只手足と共に肉體の一部として表示せられ、殊に其個性の如何を注意せざりしなり。されば其表示する所は内心の活動に非らずして、外部の行動なり。其靜止、激昂の何れの狀

態に在るにも關らず、其顔面は常に一樣の模型的相好を失はず、唯偏に其肉體の美を現せむことを務めたり。骨格、筋肉の屈伸張弛は、種々の複雑なる體勢に隨ひて其實を寫せることの精確なるは今日解剖學者の驚嘆する所なり。

彫刻塑像は紀元前六世紀に於て既に存在し、ペリクレス時代の前後に至りて其最盛時に達せり。ミロン、フィディアス、プラキシテレス諸氏は屈指の名匠にして、フィディアスの『ソオイス』像最も著はる。今は存せずと雖も、其模製品は『テ、カ』にあり。希臘の末路に至りては人物の軀相に悲哀鬱憂の色を帯び來り、古の圓滿なる相好又見るべからず。『垂死の決闘者』、『ラオコーン』の如きは是時代の産物なり。繪畫は建築彫刻に比すれば著しき進歩を見ずと雖も、近年『ユーム』に發見せられたる肖像畫の如きは略、陰影投射の工を盡し、其個性の發現は彫刻の比にあらず。之を東洋諸邦の幼稚なるに比すれば、雲泥の差ありと謂ふべし。

當時塑像の盛に行はれしことは、オリムピアに三千の塑像ありし事實によりて想見するを得べし。パウサニアスの記述に據れば、當時希臘に二万の塑像ありし。

宗教。其政体との關係。

りきと云ふ。

希臘の宗教は其政体と密接の關係を有せり。換言すれば、希臘の政体は宗教によりて組織せられたり。即ち僧侶は官吏にして、國王は僧正なり。万般の政事一として宗教上の儀式と關聯せざる無し。其信仰は祖先の傳説に本き、地方に隨て多少の差異あり、一般に快濶、樂天、自由の性質に充實し、東洋諸方に於けるが如く鬱憂厭世の傾向あるなし。僧侶と人民との關係も極めて自由にして、階級制度を作りて僧俗の二者を分つが如きこと無し。又一定普通の宗教的組織あるにあらず。一の經典なく、一の教義信條なく、只人々隨意に其傳説に依傍するのみ。

神話。

神話は希臘宗教の本く所なり。是神話は、印度波斯等のそれと同じく、素自然現象の人化に起原す。然れども其神の意義は頗る異なり。素より是の如き神話は「アールヤ」人種の未だ分裂せざりし以前に胚胎したりし者なるべし。而かも印度の韋陀的神話との比較上、語原の同一なる神も、彼と此と大に其面目を異に

未來の觀念の神話。

せるものあるは、主として其天然の影響に歸せざるを得ず。希臘の神話は一言すれば其清朗明媚なる天地の映象なりと謂ふべきなり。

今、古詩人の傳説に本きて其神話の大體を述べむか。天地最初の神は「ウラノス」(Uranos)にして天の神なり。地の神「ガイア」(Gaia)と共に十二の「チタン」(Titan)と三の「ヘカトンハイン」(Hekatoncheir)と三の「キクロン」(Kyklop)とを生む。「チタン」の一なる「クロノス」(Kronos)父の位を繼ぎて神族の首領となり、其妹と共に六兒を生めり。其一なる「ツォイヌ」(Zeus)父の位を奪ひて首座を占めしに「ウラノス」の子「チタン」等は之に服せず。是に於て「ツォイヌ」はオリムポスの山に據りて之と戦ひて、遂に之を征服し、茲に永遠の神首となれり。是よりオリムポス山は神山として知らる。オリムポスの神の外、海の神あり、地の神あり、又下界の神あり。之に加ふるに半神半人の幾多勇者の傳説あり。上は「ウラノス」より下はトロヤの戦争に至るまで、幾多の神各、其性に隨て崇拜せられ、其數枚擧に遑あらず。唯茲に注意すべきは、未來の觀念の極めて薄弱なる一事なり。希臘人は力を極めて天然の美、現世の樂を叙すれども、言彼岸の世界に及べば、暗黒なる陰府

として却て嫌惡の情を表はせり。輪廻轉生の觀念の如きは其本來有せざる所なり。然れども是の如き荒唐なる神話に本ける多神教的信仰は、地理上の知識及び哲學的思索の發達するに隨ひ漸く消滅するに至れり。

希臘哲學。

東洋諸邦にありては、哲學は常に宗教と結合せり。宗教的迷信を離れ、智識の充足の爲に、自然人間に對して純然たる道理的思索を爲したるものは、希臘人を以て嚆矢とす。

宗教と哲學。

蓋し宗教も哲學も其根本的動機に至ては則ち一なり。共に宇宙の現象を説明し得べき或原理を求めむが爲なり。唯宗教は感情の上より先づ神なる不可思議物を假想して萬有生滅の所依となし、哲學は理性の上より是不可思議の本體を究明せざれば已まざらむとす。人智尙幼稚の時代にありては、安心立命を求むるは自然の勢なり。然れども人文漸く進み、事物の眞理は獨り理性によりて認識せられ得べきを悟るに及びて、茲に哲學は宗教と分理して其獨立の發達を

純客觀的傾向。

見るに至る。

美麗なる天然と温和なる氣候とによりて其現世的思想を涵養せられたる希臘人の哲學は、自ら其初に於ては専ら客觀世界の研究に傾けり。即ち其目的は宇宙の成立變化の原理を説明するにあり。然れども其方法は素より獨斷的にして其結果は實體的なり。印度哲學に於けるが如く世界を迷妄とするが如き理想的は主觀的傾向無し。然れども知識の範圍條件等に就きて何等の注意する所なく、殆ど直觀によりて其意見を立つるを以て、其說區々として一ならず。波斯戰爭以後、社會の狀況の變化に隨ひて是の如き思索の方法の無効なるを覺悟し初むるや、所謂辯證學者の輩出で、之に反對し、人知の信憑するに足らざることを隨て宇宙の現象に對して一定の原理を立つることの望むべからざること主張し、世に普通の眞理無く、人各宇宙の標準なりと論ぜり。其目的は要するに宇宙の原理と云ふが如き空理を避けて、人間實用の知識を奨励するにあり。是れ希臘思想が純客觀的より一步を主觀的に進めたるものあり。是主觀的はた實際的傾向に一生涯を開拓したるものをソクラテース氏(Socrates)とす。

主觀的傾向。ソクラテース氏。

プラトーン氏
及びアリスト
テレス氏。

ソクラテース氏は詭辯學派に反對して人替の確實なる根據を説き、自然哲學に
加ふるに倫理、哲學を以てせり。プラトーン氏(Platon)、アリストテレス氏(Aristo
teles)其後にいで、倫理、學を以て一方に於て知識活動の理法を示めして其信憑す
べき所以を明にし、他方に於ては形而上、學を述べて、形而下、學即ち自然科學に根
本的説明の原理を與へたり。プラトーン氏が其實験論を唱へ、實在世界の外に
是實在世界の根源たる理想的超越の世界あることを説けるは、實に現世自然を
尙へる希臘思想の本來の面目に非ず。然れど彼亦是世界を虛無汚濁として輕
蔑するに足らず、其自然の美を嘆稱するの情は、其對話篇中到る處に見はる。且
プラトーン氏の理想は其性質近世哲學に於けるが如く唯心的にあらず、實驗的
なり。是流轉無常の現象を超越せる圓滿不易の理想體は、之を愉悅する所の精
神に對して客觀的實在を有す。是れ希臘理想の特性にして、美術に於ける彫刻
塑像が變化極まり無き個性を表象せず、却て平等圓滿の模型的體相を顯示せる
と異ならず。

ソクラテース氏以後漸く實際的に傾きたる希臘哲學は、アレキサンドロスの統

純主觀的傾
向。

一以後は、一層極端に走れり。アリストテレス氏の後を承けて起りたる「スト
ア」エピクロール諸學派は、専ら重きを倫理學に措き、論理、物理の諸學は、人生の實
務に關せる者を外して殆ど度外視せられたり。彼等の學問の目的は、只、人生の
幸福を得るにあり。而して其倫理學も主として個人的、はた主觀的にして、外界
の事物と絶縁し、自己心中に於て其満足を得むことを旨とせり。當時の「スケア
チック」詭辯派(Skeptics)と名くる一派の如きは、一切知識を抛却するを以て幸福
を得るの道なりとせり。

是等諸學派の極端卑陋なる現世主義に對する反動として、遂に所謂新「プラト
ーン」派(Neo-platonismus)の勃興を見るに至れり。是派の代表者はプロテュクス氏(Ploti
nus)にして、其世界觀は分出論(Emanationslehre)なり。新「プラトーン」派の分裂紀
元六世紀以後は、希臘哲學の潮流は消滅せり。然れども其歐洲古今の哲學に及
ぼせる勢力は、其文學のそれと共に決して滅亡すべからざるなり。

希臘の古文學は殆どあらゆる種類を網羅し、今日の文學は唯其遺繼を遺へ

希臘の文學

ホメーロス

るが如き觀あり。其尤も古きものは他邦に於けると等しく、詩歌にして、昔神の威徳を頌し、勇士の偉績を讃せり。其最大にして且最も貴むべきはホメーロスの二大叙事詩『イリヤス』(Ilias)と『オデュッセイ』(Odyssey)となり。前者はトロヤの戦記にして、後者はトロヤ戦争の勇者の一人、オデュッセウスの冒險譚なり。格調雄大、文學史上千古の偉觀たり。且之に依りて希臘古代の事情を知り得べきを以て、歴史上にも亦無二の寶典なり。ホメーロスに次て著はれしはヘシオッド氏(Hesiod)なり。ホメーロスの時代は明ならざれども、紀元前十世紀の頃ならむと信ぜらる。

叙事詩はホメーロスに於て其發達の頂點に達せり。抒情詩に關してアルケイオス(Alcæus)、サッポ、アナクレオン(Anacreon)、アルクマン(Alexander)、シモニデーシ(Simonides)、スキリアーデス(Bacchylides)、ピンドール(Pindar)の諸氏尤も著はる。戯曲はソラーチに榮へたり。エスキルス(Eschylus)、ソポクレス(Sophocles)、エウリピデス(Euripides)等の名は、ヘリクレス時代文化と共に文學史上永く没すべからざるなり。

戯曲及演劇。

演劇は希臘人の殊に嗜好せし所なり。之れ皆に娛樂の爲にするのみならず、國民一般の教化に資せること少なざりき。建築、彫刻の美に加ふるに詩歌、音樂、舞踊の秀を以てす。演劇は實に當時の美術文學の綜合點なりき。當時如何に演劇の盛に行はれしかは、百五十人の戯曲家と、三千三百五十の戯曲ありして、事實によりても想像することを得べし。

以上叙述し來りたる所を概括して、希臘人文の發達を通觀すれば、之を四期に分つことを得。

第一期は有史以後、耶穌紀元前四百六十年に至る。是間にありては美術未だ開けず、只浮彫及び木造の神牀を見るのみ。金屬陶器の製作は知られたり。

第二期は、紀元前五百八十年より四百六十年に至る。神操術の遊戯は其頂點に達し、人牀の圓滿なる發達を尙ぶと共に、其造形美術に表象せられたる者も均整自然の妙を極む。然れど其牀相嚴格にして典雅ならず。鑄型印鑲の術行はる。

第三期は、前期の末より紀元前三百三十六年に至る。之れアテーチの全盛期に

希臘人文の四期。

して、幾多の宏壯美麗なる建築の起りし時代なり。其彫刻塑像も亦圓滿なる相好を有し、後期に見る如き感情激動の姿態なし。塑像は黄金、象牙、又は大理石より成る。ペロポネツソス戦争以後なりしを以て、希臘國勢の傾斜に隨ひ、其美術は感情的相好を帯ひ來り、漸く衰敗の兆を現せり。實に波斯戦争が國民的統一の精神を鼓舞して其文化を催進したりしが如く、ペロポネツソス戦争は各邦民心を離反し、其文化をして漸く腐敗せしめたり。

第四期は、前期の終より紀元前百四十六年に至る。アレキサンドロス西部亞細亞を征服せしより以來、希臘人の眼界頓に開け、東洋諸邦の文物と接觸するの機會を得たり。然れども尙ほ固く其特質を維持し、哲學等に於ては多少他邦の影響を被れりと雖も、一般國民の性質は依然として其故型を保ちたり。其美術は終りまで希臘的風尚を失はざりき。

之れマクドニア統一前後に至るまでの希臘人文の大綱なり。アレキサンドロス以後の政治的希臘は其面目を一變せり。今是章を終るに臨みマクドニアに就て一言せむ。

マクドニア

人種上マクドニア人は、ドナウ河邊に住せる「トラク」人と同一なりや、將た又希臘人と同族なりや。恐らくは「トラク」人と希臘人の混種なりしならん。希臘は是マクドニアの爲に、一度は世界的王國となりて其文化と殖民地とを四方に扶植せしが、幾も無く土崩瓦解して再び起つ能はざるに至れり。然れども是一大起伏ありしが爲に、優秀なる其人文は、全小亞細亞、シリア、埃及より遙に信度河の邊に波及し、世界の人文の局面に一大勢力を撒布せり。希臘民族は、是一舉によりて其存在の天職を、歴盡したりと謂ふべし。

アレキサンドロス以後、希臘思想は大に其物質的一面を開拓せり。數學、物理學、器械學より天文地理の知識に至るまで、前代未だ曾て有らざる發達を效せり。神話は虚偽として學問以外に退けられ、哲學も亦空理に走らずして實驗の方面を認むるに至れり。殊にアレキサンドリアに於ける學藝の進歩は實に驚くべきものあり。一大圖書館は百科の書を山積し、藏書七十万卷と稱す。四方より遊學の學生一時に一萬四千人を下らざりしと云ふ。

然れども一面より之を見れば、文學、美術、哲學は又舊時の圓滿と優秀と創見とを見るべからず。ヘリクレイオス時代の全盛に比すれば、アレキサンドリア時代の文物は外觀の旺盛を極むるにも係らず、其精神に於ては遙かに下れりと謂はざるべからず。アッティカの新喜劇は下品なる脚色劇に過ぎず。美術は前代に摸して及ばざるもの、哲學は遂にピタゴラス、プラトーン諸氏の舊型を出でず、東洋思想と抱合し、却て神秘厭世の傾向に陥るに至れり。是時に當りて快活自由なる希臘本來の精神は又見るべからざりしが如し。

希臘は政治上に於ては遂に羅馬の版圖に入りぬ。其し其哲學、文學、美術、宗教も、最早や自國に發達せず、文藝の中心はた政治の中心と共に移動せりと雖ども、而かも羅馬の戰勝と共に普く世界に撒布せられ、人文史上永く不材の精神的勢力となれり。

第二章 古代羅馬

羅馬は古代と近世との橋梁なり。——人文史上羅馬の位置。——希臘と羅馬との比較。——羅馬の地勢。——以太利半島に於ける最古の民族。——政治史上の二期。——國家と個人。——東方古代戰勝國と羅馬。——宗教。——哲學。——「ストア」學派。——文學。——チツェロミアウグスツス。——羅馬文學の發展。——科學及法律。——美術。——美術史上羅馬の天職。——實用工事の發達。——以太利征服及びカルタゴの没落後に於ける羅馬の國家。——征服の順序。——版圖の擴張と國性の破壊。——當時社會の狀態。——宗教及哲學。——道徳の腐敗。——史家マテウス氏の證言。

羅馬は古代と近世とを結合する橋梁なり。其政治歴史は一都府を中心とせる戰勝國に過ぎずと雖も、其人文史上の位置は實に世界文化の樞機を占む。羅馬は地中海岸の諸邦國は素より言を待たず、當代一切の文明國を擧げて之を一主權の下に統一し、波斯以來幾度か夢想せられたる世界的王國を實現せり。而して是統一や鞏固なる中央集權制度の下に、一定の法律によりて制約せられたる者なり。僅に貢進の名に依りて隸屬の實を失へるが如き散漫なる者に非ず。是の如くにして羅馬は古來各國の間に發達せる一切の文化を包容し、蓄積し、再び之を其領土の中に撒布せり。故に羅馬の征服は人文の普及と相伴へり。

羅馬は古代と近世との橋梁なり。

人文史上羅馬の位置。

今日の歐洲諸國は是大帝國の遺物の上に成立したる者、各自の間に言語、文學、宗教、風俗の親似を見るは、其曾て共に羅馬の統一の下に同種の化澤に潤ひたるが爲なり。
是を以て人文史上より觀る時は、羅馬の勃興及び没落は、古代の文化を保存し、弘布し、以て今日の時代を成すに於て、須要の階段なりしなり。希臘亡びて、其文藝を羅馬に傳へ、羅馬之を承け、兵力によりて世界に播布せり。基督教の一朝振起して、各邦固有の多神教を驅逐し、敢て以て代ることを得たるは、實に是適好の時勢に乗じたるに因る。

希臘と羅馬との比較。

吾人は茲に希臘及羅馬が人文史上に有せし天職の大に異なるものあるに注意すべし。希臘人は快濶穎敏なる天資を以て、美術文學を創始し、其典雅整齊なる風尚を以て、社會を醇化せり。彼は天才を有し、想像に富めり。瀟洒洒脱物に凝滞せず、其弊や輕浮となる。羅馬人は眞摯堅忍の性に富む。美術文學は其長所に非ずと雖も、社會を組織し、國家を統一し、尙武勤勞、能く人生の實務に勝ゆるに至ては、希臘人の遠く及ぶ所に非ず。彼は希臘人の理想的傾向を欠き、又自由不

羅馬の地勢。

羈の氣質に乏しと雖も、能く權力に服従し、一定の規律の下に歩武整然たる一致運動を作為することに於て、遂に希臘人に優る。是れ實に戰勝國民たるに於て欠如すべからざる要件なりしなり。羅馬は希臘に比して英雄豪傑を出すこと比較的に少かりき、然りと雖も、堅實忠勇の實力は、汎く國民の間に分布せり。羅馬人は正義の觀念に富み、又政治法律に關して、先天的材能を有せり。夫の羅馬法は是精神の體現せられたる者に外ならず。希臘の文華は、粲然として万世の偉觀たりと雖も、其政治的運命は實に脆弱なるものなりき。故に是を繼紹して世界に撒布するは實に羅馬の任なりき。
是の如き天職を有したる民族は、如何なる土地及び民族の間に住せしか。

伊太利は其地勢に於て自ら覇者の國なり。内は希臘の如く縱橫無數の山脉によりて自ら幾多小邦國に區劃せらるることなく、只一帯の**アペニン**山脉によりて腹背を別つのみ。外は山脉究まりて更に**シチリア**の一島を起し、本國と連環して地中海の中心を横斷す。地は希臘の如く僻遠ならず。北は西歐洲の

要部に連り、南は北部亞弗利加の一角に接し、以て東西通路の要衝を扼す。西はイスパニアより東はパレスチナに至るまで、坐して而して呼應すべし。當時アルプス以北の地未だ開けず、人文世界の中心は實に以太利を措て他に求むべからず。世界的王國がカルタゴに起らず、マケドニアに起らず、而して以太利に起りたるは、決して偶然に非ざるなり。

以太利半島に於ける最古の民族。

以太利半島に於ける最古の人文民族は「エトルスカ」人(Etruscan)なり。是民族の起原は不明なり。之れリュニテア人より起りしか、或は希臘の「ペラスギ」の北の方アルプスを迂回し、ポー河を渡りて南下したるものか、或は又北方より來りしものに非ず、却て南方埃及の地方より、海を越て移住せしものか。兎に角有史時代にありては、主として今のトスカナ(Toscana)地方に住し、南部に殖民地を有せり。其是民族の主要なる職業は、耕作及び牧畜にして、宗教は多くの點に於て希臘に類せり。美術は多少其特色を有せりと雖も、後埃及及び希臘の影響を受けて、摸倣に陥れり。鎔鑄の術亦夙に開け、水道街衢は最古の時代に於て殆ど

完全の度に達し、後人の驚異する所なり。拉丁人がチベリス河上、ラチウムの邊なる七丘の上に、其殖民地を作り、羅馬帝國の基礎を築きし頃より、後、是「エトルスク」人は漸く其跡を潜め、紀元前百年頃に至りては、エトルリアの地に僅に其遺縦を停むるに到りき。

政治史上の二期。

① 古代羅馬は政治史上、カルタゴ及びチチリアの征服を境界として、二期に分つを得べし。前期は即ち以太利的、はた共和的羅馬にして、後期は世界的はた帝政的羅馬なり。

王政時代已に去り、紀元前五百年の頃より、貴族平民の「争權時代」に移り、ガリア蠻族の南侵後、上下力を一にして、事に伊太利征服に従ひ、紀元前二百八十年頃には、南方希臘殖民地、即ち大希臘(Magna Graecia)を除て、全半島を統一せり。次でカルタゴと衝突し、三回の所謂「ピュニク」戦争の後、遂に之を亡ぼしき。是より地中海沿岸の地は悉く羅馬の版圖に歸せり。之を前期とす。

カルタゴの滅後、多少の内訌ありしが、二回の三頭政治を経由して、羅馬はアウ

國家と個人。

グスツスの下に帝國となれり。エリウス、フラギウスの兩家、軍隊擁立の諸帝王を歴て、ディオクレチアヌス帝に至りて帝國の局面に一振攝を加へ、基督教を以て世界的王國の國教となせり。是れを古代羅馬の後期となす。

今羅馬が是の如き強大を致し、所以を尋ぬるに、國家と個人との關係に職由せずむはあらず。個人は單獨にして何等の價値を有せず、只其所屬の共同體の利益を増進することに於て初めて其價値を有す。是思想は小は家族より大は國家に至るまで、羅馬人の特性なり。其家族制度は嚴正なる小王國なり。婦人は尊重せられたりと雖も、家主に對しては絶對的服従を要す。其共和政治と雖も其目的は専ら國家の幸福にあり。個人は國家の一部として、間接に其利益を受け得べきのみ。羅馬の民族は上下を通じ是の如き國家的精神によりて育成、訓練致せられたり。之れ羅馬の國家が其版圖の廣大に比して、永く其統一を保ち得たる所以なり。

東方古代戰勝國と羅馬。

東洋に於ける戰勝國の膨脹は、全く組織無き暴力により、國民と國家との間に何等の結帶を存せざりき。是を以て波斯は三戰にして滅亡せり。希臘は其國民

宗教。

間に於ては共同的精神を維持したりと雖も、被征服者に對して爲す所を知らず是を以てアレキサンドロスの王國は抔土未だ乾かざるに四分五裂したりき。然れども羅馬は其尨大なる版圖に對し、至強なる中央集權を忘れず。チベリヌ河上の七丘府は世界的王國の中心として絶對的權力を有すてふ觀念は、あらゆる手段を以て屬國間に普及せられたり。故に西羅馬帝國没落の後にありても、羅馬の一語は無意識的敬畏を以て發言せられたり。是國土至上主義は、嘗てフロン氏によりて唱へられ、スバルタによりて實行せられしが、羅馬は其共和政治時代に於ても、王政時代に於ても、更に一層嚴密に之を厲行せり。國民は多年是の如き政治に馴致せられたるの結果として、後代に至りては殆ど全く自由政體に對する願望を銷磨するに至れり。羅馬の公法は、實に是國家至上主義の權化にして、永く後世專制政治の模範となれり。例せばフロイドリッヒ、バルバロッサの獨乙帝國、若くはセント、ルイ、及びフリップの佛蘭西に於けるが如し。

羅馬人文の根蒂なる國家主義は其宗教文學をも支配せり。宗教は其外形

に於ては希臘に似たりと雖も、其精神は全く實際的はた功利的なり。羅馬人は夙に各邦の神祇を自國の宗教に攝取したり、然れども其國民固有の唯一無上の神の爲に常に其主座を供へたり。信仰の精神已に主我的はた實際的なるを以て、祈禱咒咀等の迷信に富み、希臘印度に見るが如き英雄崇拜を欠き、神族の歴史、戰鬪譚無く、又宇宙成立の傳説なし。是故に空靈飄逸なる神話、叙事詩、亦隨て缺く。有る所のものは、只靜平無味、偏に功利を旨とする宗教的儀式あるのみ。發達の上より見る時は、羅馬の宗教は、初めは「エトルスク」的にして、漸く古代以太利の信仰と混じり、世を經るに隨ひ遂に全く希臘的觀念、及び形骸を攝取するに至れり。而して國勢漸く振ひ、版圖漸く擴張するに及び、羅馬人は到る處屬國の宗教を收納して、自國の信仰に隷屬せしめたり。彼等は之を以て國家の統一上必要なることなりと思惟せしなり。是故に羅馬の宗教には、自國の神を頭首として其下に無數の神あり。之を祭るには最初は殿堂も偶像も無かりしが、ヌマ王以來、初めて複雑なる儀式を生じ、後希臘の影響を受くるに及びては、全く之を模倣せり。

哲學。

羅馬人は、斯の如く實際の功利を重じたるを以て、純ばら理論的考察を旨とする所の哲學は自ら彼等の間に發達せず。歴に希臘人文に接觸したる後に於て、其繼續模倣を事としたるのみ。而かも一の創見を以て希臘哲學に一步を進めたることあらざるなり。

希臘が羅馬に隷屬せし頃は、已にプラトーン、アリストテレス諸氏の盛時を經過し、思想は客觀的より漸く主觀的に進み、純理的より漸く實際的に進み、快樂を旨とするエピクロール學派、節慾を主義とせるストア學派の盛に流行せりし時代なり。羅馬人の實際的思想は直に之を收容し、殊に嚴格なるストア派の倫理主義は、羅馬の社會に汎く行はれたり。即ちセネカ (Seneca)、エピクテット (Epictetus)、アルリアン (Arian) 諸氏、及び帝マルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius) 等は其主なる學者なり。エピクロール學派は甚だ行はれず、歴にルークレチウス (Lucretius) 氏等二三の學者顯はれしのみ。

ストア學派の學説は、其套語とする所の「自然に隨へ」若くは「自然と人生とを一致

ストア學派。

せしめよ』の一句を以て盡すべし。從來希臘哲學に普通なりし物理学、論理学、及倫理学の三分法は、ストア派に至りて唯一の倫理学あるのみとなれり。是學派は間、天然を考察し、論理を説く。然れども其目的は唯倫理主義を確定するに資せむが爲なり。而して其倫理学の原理とする所は、全能なる神の支配する天則に順應するを以て最高の徳となすにあり。是の如き最高の徳に達せむが爲には、固體は全体に服従せざるべからず。各個人は其意志、人格を抛擲し、身を以て大自然の法則中に投せざるべからず。私己の慾望快樂も亦之を亢除、若くは節制し、一切有形の財寶を遺却せむことを務むべし。是個人の自由を認めず、差別を捨て、平等に就かしむるの倫理は、全く個人を以て國家に屬せしむる國家主義の道德に符合す。羅馬人がエピクール學派の快樂主義を捨て、ストア學派の節慾主義を執りたるは、決して偶然に非ざるなり。

羅馬は文學に於ても誇るべきものを有せず。紀元前三世紀の頃、アンドロニクス (Andronicus) テーロウヌス (Naevius) 等の戯曲詩人を出したりと雖も、素より

文學。

希臘戯曲の遺型を紹きて遙に下れるものに過ぎず。其他詩歌に於ては、諷刺、教訓、戀愛を歌ひたるもの少からずと雖も、殊に言ふに足らず。獨り歴史上に多少の價值あるものは、其散文的文學に在り。蓋し政治的國民たる羅馬人が、空靈飄灑なる純美文學によりて人情の幽趣を歌はずして、實用日常の散文によりて政治歴史を論議したるは、むしろ自然の數なりと謂ふべし。

羅馬文學の黄金時代は、チツェロ及びアウグスツスの名によりて代表せらる。前者は羅馬最大の文人にして、後者は帝國の建設者並に文學の保護者なり。チツェロ氏の時代は羅馬の歴史中最も多事なりし時なり。即ち内にありてはカチリノの共和政治を顛覆せむとせる大叛謀あり。外にありては、ポムペイ、ケーサル諸氏の戦勝あり。又相次いで二勇將の私闘及び没落あり。是の如き時代において政治的能辯と歴史とが、國民の注意を壟斷し、隨て散文の發達を誘致したるは、最も自然の勢なりとす。チツェロ氏が其學識と天才と、勇邁忠烈の氣象とを以て、羅馬共和國の爲にカチリン氏の叛逆を打破し、アントニー氏の非望を排撃し、演説に、文章に萬丈の氣焰を吐きたるは、實に羅馬文學の全盛期を標記せり。

チツェロニア
ウグスツス。

羅馬文學の衰頹。

チツェロ氏時代去りて、アウグスツス帝の時代に入り、非ルギリウス(Virgilius)・ホラツ(Horaz)の二大詩人出で、チブヌス(Tibullus)・オウィヂ(Ovid)諸氏と共に其詩文の巧妙を競ひしが、其文章は一朝にして消滅し、何等較著の勢力を後代に残さざりしに似たり。

世は帝國となりてより、羅馬の文學は愈々衰頹の氣運を速めたり。歴世の諸帝は多く文學言論の自由を禁遏したるを以て、詩文の士は屏息して一に王者の讒笑を窺へり。ルーカン(Lucan)・セネカ(Seneca)等の天才ありきと雖も、又是頹勢を如何ともする能はざりき。ナルヴ(Nerva)・トラヤヌス(Trajanus)・ハドリアヌス(Hadrianus)諸帝の下に、羅馬は小康を得たると共に、文學も亦稍其自由の天地を樂むことを得たりき。是に於てか詩文人が忍びたる積年の鬱憤は一時に漏洩し、或はユエナール氏(Juvenal)の諷諧となりて、チロドミチアヌス諸朝の非徳を痛罵し、或はタチツス氏(Tacitus)の歴史となりて、過去歴世の偽君主を排撃せり。然れども是文運復興も一旦夕にして其氣焰を收め、羅馬文學は再び榮へざるべく其衰頹の途を速げり。

科學及法律。

文學の後に榮へたるものは科學及び法律のみ。所詮羅馬は詩歌の國に非ずして散文の國なり。文學の國にあらずして政治法律の國なり。非ルギリウス氏は尤も明に是國性を自覺せり、曰く、他國をして其欲するが儘に文學美術を獎勵せしめよ。羅馬は自國特有の事業を有す、法律及び政治即是れ也。

美術。

非ルギリウス氏が言の如く、美術は羅馬の土壤に榮へざりき。初めは「エトルスク」を學び、中ごろは希臘に擬し、終に至りて東洋に倣へり。然れども自國特有の長所として誇るに足る者少し。實にや羅馬人にありては、美術は希臘に於けるが如く國民的宗教の要求する所にあらず。只一種の裝飾に過ぎざる也。國家王室の權力を誇張して、下民を服するの方便に外ならざるなり。故に美術中最も力を盡したるものは建築にあり。其様式は「エトルスク」式の穹窿と希臘式の柱礎を結合したるものに過ぎず。然れども其輪奐の宏壯、規模の雄大は、其堅牢耐久と相待ちて世界的王國の權勢を體現せり。彫刻及び繪畫に見るべきもの少し、唯肖像の發達を珍とすべきのみ。蓋し一帝一王の主權を仰ぎ、神とし

美術史上羅馬の職能。

實用工事の發達。

以太利征服及
ひがルターゴ
没落後に於け
る羅馬の國家
征服の順序。

て之を崇拜したる國民にありては、是の如き帝王の肖像を表象する美術の發達するは自然の勢なりとす。
蓋し美術史に於ける羅馬の職能は其世界統一の點にあり。羅馬の戰勝に隨れて其美術は諸種の學藝法律と共に、東は埃及波斯より、北はガリア、ゲルマニアの諸國に波及し、古代希臘の文物と共に歐洲文化の種子を播布せり。
實用の工事は美術と異なり、夙に發達せり。水道、運河、市街、橋梁の築造は、已に紀元第一世紀に行はれ、殊に羅馬府の市街構造は、舉て後世の嘆美する所なり。

南部以太利の征服及びカルターゴ没落後、羅馬の國家は其形勢及精神を一變せり。以太利の全部を征服する迄は、國勢の皇張は極めて遅々たりしが、爾來旭日中天の勢を以て進み、殊にカルターゴ滅してより、戰勝の餘威は暫時にして地中海の沿岸を掃蕩せり。今征服の順序を配すれば、東方に於てはマケドニア先づ降り、イルリア、希臘之に次ぐ。紀元前百八十年には、リグリア、百七十七年には、イストリア、百五十四年には、ダルマチア、百五十年には、ルシタニア、百二十三年

版圖の膨脹と
國性の破壊。

より百十八年に誇りて南部ガリアは、何れも羅馬に征服せらる。スリアは百六十八年以來既に歸伏し、尙ほ凡そ八十年を越て小亞細亞の全部及びパレスチナ亦羅馬の版圖に入れり。亞非利加に於ては、埃及は紀元前三十年に、キレナイカは七十四年に、何れも羅馬の一州となれり。北歐羅巴に於ては、クイーザルのガリア戰爭後、ゲルマニア、レーチア、ノリクムの諸地亦降り、クラウヂウス帝に至りて、南部ブリタニア、ドミチア、帝に至りて今の英倫、及び蘇格蘭、何れも其領土に歸せり。

是の如き帝國版圖の無限の膨脹は、羅馬國性を全然破壊するの結果を生ぜり。之れ領土の擴張は、おのづから無數異種の民族を混淆し、隨て純粹なる羅馬民族の離散を致したるを以てなり。是の如くにして古代羅馬人の原型は、精神上に於ても、又肉體上に於ても、殆ど全く其跡を留めざるに至れり。蓋し羅馬は世界を統一し、悉く之を國性化して、永く其主權を掌握し得むが爲には、其國土人民餘りに狭小なるに過ぎしなり。羅馬は其過大の膨脹によりて、却て覆滅を招きたるものと謂ふべし。

當時社會の狀態。

今是時代の社會の狀態を一言せむに、風俗漸く奢侈に流れ、禮文繁縟なれども忠厚の徳全く地を拂ひ、輕薄洩季、靡然として風を成せり。平民婦人、奴隸は長へに凌辱せられ、貴族、富民は燕游臺榭の豪壯を競ひ、下に向て殘忍酷薄の所爲を意とせず。劇場及び諸種の競技場は、前代未聞の宏大華麗を以て人目を驚かし、鬪戰及び決闘は遊戯娛樂の資とせられたり。殊に決闘の如きは人命を弄ぶものなり。同胞の流血苦悶を觀て之を樂とせる當時の人情の如何に酷薄なるかを想見すべきなり。又注意すべきは外邦の風習雜然として輸入せられたる也。宗教の如きは、埃及、シリア、甚しきに至りては波斯の「ザラツストラ」教の神祇を混するに到れり。是に於てか羅馬本來の國性亦全く崩解し、唯無數民族の秩序無き混淆を現するのみ。國民の間に敬虔抑畏の宗教心無く、純然なる無信仰者あり、天文魔術を信する者あり、帝王を神拜する者あり。民族の歸向する所一ならず。哲學も亦淺薄なる折衷主義、もしくは中間主義を旨とし、遂に一般に懷疑の暗潮に投ぜり。獨りアレキサンデルアにありて、希臘哲學の思想と猶太教

宗教及哲學。

の教義を相抱合し、新プラトーン派の隆興となり、古代哲學の爲に最後の氣焰を擧げたるを僅に注意すべしとなす。羅馬の事業として万世に誇耀し得べき者は夫れ唯法律なるか。

道德の腐敗。

然れども道德は日を追うて腐敗し、羅馬の國家は漸く其末路に近けり。貧富の懸隔は上下の睽遠を致し、民心一致せず。一般豪奢の風は、國家經濟上、又社會道徳上、最も有害なる結果を貽せり。羅馬は三日間の決闘 (Gladiatorenspiel) の爲に五萬圓を費せしことあり。實に是殘忍なる遊戯の爲めにマルクス、アウレリウス帝の時は一年中百三十五日を費やし、四世紀の中頃は百七十五日を費せり。其豪華なる遊戯の百日以上繼續せるもの敢て珍らしからず。羅馬の一史家タチツス氏は「是遊戯は羅馬人が已に母胎より受け來たりたる先天的罪惡なり」と慷慨せり。實に羅馬人が其貴賤貧富、男女老幼に論無く、是遊戯に熱中したる情狀は、今人の想像し能はざるものありしが如し。彼等は一競技の輸贏に關心すること、尙國家の大事に於けるが如し。否、チロ、マルクス、アウレリウス二帝の何れが帝國を支配せむか、北蠻人の國境を超て亂入せむか、將た又羅馬軍の爲に擊

史家タチツス
氏の証言。

退せられむか、羅馬市民は是の如き疑問に對するよりは寧ろ一鏡馬に於ける青紫の輸贏を思愛したりしなり。道義の頹廢は基督教出現の當時に於て其極度に達したる者の如し。羅馬の史家マチツス氏(Mactius)は紀元一世紀の人なり。當時の世態を誌して曰く、宗教の神聖なる儀式は敗棄せられ、姦淫は到る所に行はれ、人之を耻辱とせず。近島は流竄の人を以て充され、山野には死屍横はる。羅馬府自らは實に一個の地獄なり。其處には徳義は零落を招き、富貴は滅亡を致す。其處には何物も安全ならず、誹毀、構陷、排擠、隲誣は普通の事として思惟せらる。上下相反目し、朋友相信せず。虚偽は社會の全面を掩蔽せりと。國內に於ける道義の腐敗と共に、ゲルマニア諸民族は羅馬に反きて數、其國境を侵し、又新波斯帝國と事あり。三世紀の末、オクレチアヌス帝が版圖を東西に分ちたる日より、世界的王國は事實に於て其統一を失ひたり。是時に當りて、コンスタンチヌス帝が基督教を公認したるは、實に西洋歴史の過程に一生面を開きたるものなり。吾人は茲に筆を更めて基督教の起原及び勢力を叙述し、其歴史の意義を明にせむ。

第三章 羅馬帝國と基督教

希臘、羅馬及び基督教。——羅馬の統一と各國の宗教。——信仰は死し道義は滅す。——羅馬の國家主上主義。——基督教は是の如き時代に興りぬ。——新宗教傳播の二條件。——基督教と多神教。——耶穌。——天國は近けり、悔ひ改めよ。——基督教の精神的勝利。——迫害。——其無功。——コンスタンチヌス帝の遷都。——遷都と基督教。——基督教内部に於ける神學爭論。——ニカイアの公會の願末。——二個の事實。——羅馬教會の發達。——羅馬の没落。——羅馬の没落と基督教徒。——アウグスチヌス氏の解釋。

基督教は西洋歴史の一大事實、近世人文史の中心核子なり。其勃興及び傳播は古代と近世とを分つ所の一大鴻溝なり。吾人今是を叙述するに當り先づ當時社會の情勢を一瞥せむことを要す。

抑も希臘は文藝の邦にして、羅馬は戰勝の邦なり。羅馬は希臘人文を継紹し、戰勝の威に藉りて之を世界に弘布し、茲に歐羅巴人文の根據を造り、基督教傳

希臘羅馬及基督教。

播の素地を設けたり。今日歐羅巴の諸邦國は是大帝國の遺材によりて建設せられたるものにして其人文精神的一致は羅馬統一の餘澤と共に基督教の勢力其多きに居る。

羅馬の統一と各國の宗教。

羅馬が地中海四岸の地を統一して之を唯一主權の下に隸屬せしめしや、各國の間に交通漸く開け、其知識貨物の交換頻繁となるに隨ひ、異邦の民族間に一様平等の思想を養成するに至りき。是事實によりて最大の影響を受けたるものは各國民族の宗教なり。國民各々自家特有の神を樹て、無上絶對の威靈として之を崇拜するの無意義なることが漸く各國民の間に認識せらるゝや、彼等は茲に冥々の中に一大統一的宗教の出現を愉快せり。國家の上より見るも、帝國の統一は即ち宗教の統一を預想す。多神教は實際上羅馬の主權と兩立せざるなり。殊に從來僧侶の間に於ける紛争の多神教を根柢より搖撼するあり。是に於てか愚者は之を疑ひ、智者は之を信せず、國國の民は殆ど無宗教の状態に陥れり。「一切の事物は腐敗と罪惡とに充つ」と之れ哲人セネカ氏が當時の時勢を喝破したるの言なりき。信仰は死し、道義は滅し、地中海岸の國民は互に相視て其一樣

信仰は死し道義は滅す。

羅馬の國家至上主義。

の悲運を嗟嘆せり。彼は缺焉として救済の光を憧憬せり、然れども帝國は彼等を救ふべき神を與へざりき。歐羅巴、亞細亞、亞非利加は失望の中に寂然たりき。羅馬は峻嚴なる國家至上主義を以て其國是となせり。個人人格の獨立自由を認めず、人よりは寧ろ物として之を扱へり。其國勢を振張せむが爲めには民人の塗炭に苦むを顧みず、人權の平等は夢にだも羅馬政治家の思想に入らず、慈悲博愛の感情は殆ど發揮せられざりしに似たり。殊に被征服者の如きは如何の輕侮壓制を以て統御せられたるかを想ひ見るべきなり。

基督教は是の如き時代に興りぬ。

シニリアが羅馬に奉るべき租税として其收穫の三分の一を貢進する時、猶太の農夫は「猶太の王」なる救世主の速に來るべしとの自國の傳説に傾聽し、杏蔭長息して其出現を翹望せるは極めて自然の事ならずや。是時に當りて獨一眞神の前に一切人類の無差別を説き、博大無際慈悲を傾けて罪惡の救済を説けるものあらば、天下豈靡然として之に赴かざらむや。耶穌基督は實に是の如き教

新宗教傳播の
二條件。

基督教と多神
教。

義を唱へたる者なりき。

凡て新しき教義の傳播に二個の制約あり。教義其物の性質及び傳播せられむとする社會の狀態之なり。是二點の何れより觀るも基督教は其傳播の過程に何等較著の障害を有せざりき。其反對者たる從來の多神教、基督教徒の所謂「パガニスムス」は前にも述べたる如く、已に内部の弱點を暴露し、毫も人心を結合し指導するの勢力を有せず。僧侶は自己の信神を偏執して互に權勢を争ひ、有識者の指彈を顧みず。徒に虚榮を衒ひて眞に貧苦罪惡の救濟を意はず、専ら現世を説て未來を説かず、一時の名利を推獎して永遠の利福を言はず、隨て其道義の觀念の如きは極めて陋劣なるを免れざりき。

基督教は則ち然らざるなり。其熱誠と燃るが如き信念とを以て、永遠の攝理を説き、未來世に於ける無究の幸福を説き、懺悔によりてなさるべき罪惡の救濟と天國の恢復とを説き、神の子なる耶蘇基督の十字架に流せる血の衆生濟度の爲なるを説き、更に其復活の奇蹟と、世界の末路と、天國と、判斷の日の近けることと、を説くや、基督教は實に一道希望の光明を當代の闇黒なる精神界に投射したり

しなり。殊に眼を家庭及び下層の人民に注ぎ、貧き者に施し、悲める者を慰め、其教會にありては囚虜の嗟嘆に聽き、垂死の精靈を救はむことを神に禱れり。主人にも奴隸にも同一の法律、同一の希望、同一の洗禮、同一の教主、同一の判斷あるのみ。正義に苦めるものには來世の淨樂を約し、如何なる罪業も悔悛の期を失せざるを訓ふ。基督教は、外面の形式禮文を打破し、直に人の肺腑に向て精靈の呼吸を通じたるもの。天下の人心翕然として之に謳歌したる素より自然の勢ならずとせむや。

耶蘇。

そも、猶太人は古より外邦の羈絆を脱する能はず、窮厄困苦の間に在りて尙其「シム」民族に固有なる一神教を固執し、曾て其豫言者の唱道せし如く、何時かは「猶太の王」なる救世主の出現して其國運を一轉するの期あらむことを信じたりき。茲に紀元前四年の頃、ベツレヘムの地に耶蘇なるもの生れ、豫言者約翰の教を受けて一新宗教を唱道せり。基督教即ち是なり。耶蘇は猶太人の勝利は政治上に在らずして精神上に在ることを説き、「其日を善き者にも悪き者にも照し、其雨を義しき者にも義しからざる者にも降らせ給」へる天なる父の前には一切

天國は近けり
悔ひ改めし。

の衆生盡く平等無差別なるを説き、自ら神の子救世主基督なりと稱し、『天國は近けり、悔ひ改めよ』と宣傳せり。羅馬の代官は其説を以て叛逆となし、彼を磔殺せり。然れども耶蘇の高足、即ち所謂十二使徒等は尙ほ其遺志を紹きて其教を傳へたり。

基督教の精神的勝利。

基督教は斯くて其生地なる猶太より漸く進み、羅馬の世界に向て其『精神的勝利』を繼續せり。世界は末路に迫りたり、悔ひ改めよ、天國は近けり。是野に呼べる人の聲は一世の人情を動かしたりき。キプロス、フリギア、ガラチア、小亞細亞の全部希臘以太利は暫時にして之に風靡せり。暴帝ネロの迫害は徒に同教徒の熱火に薪せしのみ。教會は到る處に建設せられたり。斯くて一世紀の終に到りては、教會組織の勢益々其旺盛を極め、羅馬の帝國も是新宗教を從來の猶太教と同一視するの迷妄を覺り、之に對する態度を變更するの必要を認めたり。然れども基督教の精神は遂に帝國の國是と同じからず。彼等は皆に一切現世の快樂遊戯に關與せず、冷然として帝政の榮華を看他した

迫害。

るのみならず、自ら精神的團結によりて一種特殊の帝國を自教内に建設せるの状あり。是れ羅馬の國家主義に不利なる事情なり。ドミチアノ、トラヤヌス、ハドリアヌス等の明君も亦之を迫害するの已むを得ざりし所以實に是に存す。然れども種々の殘酷なる迫害は徒に基督教の決心を堅うし、其内部の團結を鞏固にしたるのみなりき。ディオクレチアヌス帝の世に至りては、教會と帝國との間に彌縫すべからざる大破綻を見るに至りぬ。當時全帝國に基督教會の設立を見ざる一市一村だに無かりき。其勢力は延て政治上に及ぼし、帝國の主權を危殆にするの恐ありき。是に於てか一方に迫害に加ふるの傍ら、他方に於ては政治家、哲學者及び多神教徒の三角同盟を結成し、以て共同の敵者に當りたり。基督教徒亦一步を譲らず、破裂は先づ軍隊の上に出れり、即ち或儀式に除し基督教徒たる兵士は擧て國神を崇拜することを拒絶したり。ディオクレチアヌスは事甚だ急なるを見、茲に從來未だ曾て見ざる所の大迫害を決行し、教會を毀ち、信徒を害し、慘酷たらざる所なし。然れども毫も信徒の意氣を沮喪せしむるに足らざりき。彼等は詔勅を破毀し、宮殿に火し、死に臨みて聖教の爲に命を抛つ

其無功。

譽れを神に感謝したり。全帝國の士民は等しく嘆美の聲を放てり。之れ人を
して苦を喜び死を樂ましむる基督教の感化の如何に靈妙偉大なるかを示すこ
とに因りて益々同教の勢力を増殖するのみなりき。死を怖れざる民に向ては
國家の威烈はた何爲るものぞ。政治的羅馬は其劍を以て遂に基督教徒が組織
せる精神的王國を征服すること能はざりしなり。

是時勢に鑑みて同教徒に對する政策を一變したる者をコンスタンチヌス帝と
なす。帝が國教として基督教を公認したる必然の結果として茲に國家と教會
の結合を見るに到れり。之れ歐羅巴の人文史上の一大事實なり。而して是事
實の意義をして一層重大ならしめたるものは實に帝の遷都なり。

コンスタンチ
ヌス帝の遷都

吾人は茲に暫く筆を枉げてコンスタンチヌス帝が何故に羅馬の古城を捨
て、新に都を遙遠なるボスフラスの海角に移せしかの事情を述べむ。

一個の國民としての羅馬は世界統一の日に於て消滅せり。人種上よりも國性
上よりも古羅馬は已に見るべからざりき。今や權力の中心は軍隊の中にある。

遷都と基督教

幾代の帝王は軍國の競争によりて擁立せられたり。是等の軍人王は其族籍概
ね卑賤にして羅馬古來の歴史と何等親密の關係あるに非ず、陳營の中に人とな
りて禮文に嫻はず、古代文化の遺物に對して何等の興趣を覺へず。是の如き帝
王が首府の移轉若くは新首府創立の念慮を起すは極めて自然の勢なりとす。
殊にディオクレチヌス帝は自己の惡徳の爲に羅馬市民の怨府となれるを覺り、
一時は全府民の屠殺を計畫したる精神を醸し、遷都の平和手段によりて却て其
永遠の零落を企圖したり。帝が基督教を容認し、進で其保護者を以て自ら任じ
たるは、素より國家統一の政治的方便に出でたるなるべしと雖も、其極惡なる私
行に對して良心の慰藉を求めたるに外ならず。實に帝や名は基督教の保護者
なりと雖も、晩年に至るまで其行動は一として基督教の精神に率由せるものに
非ず。其惡逆非道は暴帝テロと伯仲の間にありしが如し。

遷莫、是遷都の事實は二個の點に於て基督教と重要なる關係を有せり。即ち今
や羅馬は中央政府の直接の監視の下に在らざるを以て、羅馬教會の勢力は大なる
障害に遇はずして、寢々平として増進し、遂に後年法王權の根據を爲せり。又

新首府コンスタンチノポリスに於ては羅馬に於けると異なり、舊來多神教の迷信少なきを以て、茲に基督教は何等激烈の抵抗を見ずして發達するを得き。是の如く、遷都は同教の傳播に少からざる便利を與へ、羅馬、希臘兩教會の根柢は漸く其確立を見るに至れり。

然れども顧みて基督教の内部を見れば、其間に神學上の爭論ありて、屢、其一致を殆うせり。尤も激烈なりしは三位一體に關する爭論なり。今其經行を畧説せむに、當時コンスタンチヌス帝の政略は、官職を餌して基督教徒を懐柔し、以て其國家に對するの野心無からしめむとするにあり。其結果として基督教徒か現世の名利に眩惑し、俗了したるは著しき事實なり。所謂神學上の爭論も其の原因を尋ねれば、教義の眞摯なる研究に本けるもの少く、多くは是權勢の爭奪に起源す。三位一體の爭論も亦是一例なり。其顛末は略、左の如し。

アレキサンドリアにアリウス氏なる僧侶あり。夙に僧正の位を望みしが、遂に志を得ず。失望の餘憤に乗じて反對黨を彈劾したり。是罪によりて、教會を破

基督教内部に於ける神學上の爭論。

ニカイア公會の顛末。

門せられき。アリウス氏即ち其論據を哲學上に求め、三位一體に於ける神子の位置に就きて異説を立て、曰く、子は其子たるの性質上必ず父より生れたるものならざるべからず。即ち子の未だ在らざりし時あり。而して初めて在りし時あらざるを得ず。父は子に先ちて已にありし者なりと。是説は明に三位の間に階級を立つるものにして、一體の説と兩立せず。反對派は痛く之を攻撃し、アリウス氏を以て神の唯一獨尊を潰す者となせり。是兩派の争は漸く昂まりて遂に政治上の争となり、一時は全埃及の男女は一人として是争論に關與せざる者なきに到りき。是に於てコンスタンチヌス帝自らは争に關涉し、紀元三百二十五年、有名なるニカイアの公會を招集して之を決定せしめたり。同會議はアリウス氏の説を以て異端と爲し、破門を宣告せり。

ニカイア公會以後、宗門教義の争は腫を接して起り、基督教徒は權勢争奪の渦中に沈溺し、又救濟博愛の眞面目を遺却せり。コンスタンチヌス帝の後を繼ぎて帝位に上れる者、ニカイアの決議に反してアリウス氏の説を容認しければ、正教派は公然是帝を非基督教徒となし、其精神上の主權を否定せり。是に於てか

二個の事實。

暫く其跡を止めざりし迫害又大に行はれ、基督教の内部は再び慘澹たる光景を現出せり。是に於てか宗教は滅び神學は亡はれ、存する所のみは只權力の争奪あるのみ。教會は自己の天分を忘れて現世的實力の收攬の外其他を知らず。是紛擾の中より二個の事實現はれたり。即ち(一)吾人の精神を支配するものは神の法律なり、靈魂に永遠の賞罰を與へ得る所の神の意志なり。之を代表するものは即ち僧正なり。是法律は帝王の法律以上の制裁を有す。帝王は唯身軀財産を左右し得べきのみ。(二)羅馬の僧正は基督教の主權を掌握す。是二個の事實は是より永く政教二者の争源となり、中世以後宗教革命時代に至るまで、歐羅巴の歴史上最も重要なる意義を有せり。

羅馬教會の發達。

羅馬教會は如何にして基督正教の主權を掌握するを得たりや。左に其經行の大略を述べむ。

初め基督教の西方歐羅巴に傳播せるや、其東洋的風度は漸く希臘的となれり。然れども帝坐東に遷り、羅馬は帝國の一蕃市に過ぎざるに及び、政治上の壓力の

羅馬の没落。

輕減すると共に、羅馬的精神は漸く希臘的基督教を羅馬化せり。是に於て羅馬教會は東方の諸教會と其性質を殊にし、アレキサンドリアに於ける三位一體の争議の如きも羅馬は毫も之に關らず、希臘教會とは全く別途の進路を執れり。其當初にありては其勢力微弱にして殊に言ふに足らざりしが、ニカイア公會以後の宗教會議が代議制度を採用するに及び、羅馬教會の中立的位置は幸にも其間に介立して權力平均の衝樞を握りしを以て、其舉動は争議を決斷するの勢力を有せり。是の如くにして判定者の實權のつから其掌中に落ち、漸く凜然として犯すべからざるの威重を占有するに到れり。其間羅馬、コンスタンチノポリス及びアレキサンドリアの三教會は、數々其主權を争ひしが、羅馬の僧正は常に勝利を得き。且其公明正大なる云爲は、他の陰險卑劣なる手段に對して自ら一世の望を得たりし者の如し。

是基督教會中に於ける權力消長の争の間に、歐洲政治歴史の局面一轉を警告したる一大事實は起りぬ。何ぞや羅馬の没落即ち是れ。時に紀元四百十年なり。初めコンスタンチヌス帝の歿後、幾ならずして歐羅巴は一の東方人種の侵入に

羅馬の没落と
基督教徒。

遭遇せり。之れ即ち匈奴なり。匈奴は人種上『ウラルアルタイ』派ニ屬し、秦漢の際支那を苦めたる蠻族なり。後漢の時逐はれて西方に移り、イステル河畔の『ゴート』人と戦へり。『ゴート』人は走りて羅馬の内地に住し、兵備を買して之に隸屬せり。テオドシウス帝歿して羅馬東西に分るゝや、西『ゴート』族の王アトラリツクは遂に羅馬を陥れ、其後嗣ガリアよりイスパニアに移り、其處に住せる『ゲンダル』人を逐て『ゴート』王國を建設せり。當時西羅馬の主權は已に空名にして、實力無く、其領地は夙に『チニートン』諸民族の侵略する所となり、國家の事皆其傭兵なる『チニートン』民族の左右する所となれり。羅馬府の没落後六十六年にして、東帝は傭兵の首領オドアカル(Othakar)に以太利の統治を托せり。事是に及びて西羅馬帝國は名實共に歴史の中に埋られ了りたり。

古より無窮不易と唱はれし羅馬府のアラリツクの爲に陥らるゝや、全帝國の人民は等しく眼を張りて事の意外に驚嘆せり。是に於てか平生基督教に反抗せる貴族、哲學者、多神教徒は揚言して曰く、神聖なる羅馬府の没落は、羅馬に勝利と光榮とを與へたる國民的神祇の所罰なり。國民が其祖先累代の國神を捨て、

アウグスチヌス氏の辨解。

基督教の如き異端左道を信したる應報なり。羅馬を滅ぼしたる者は即ち基督教なりと。一般國民は憂懼の中に是批難を默認し、基督教の信仰は將に其根柢に於て搖撼せられむとせり。教會は勢ひ辯護の衝に當らざるを得ず。有名な神學者アウグスチヌス氏は是目的の爲に十三年の日月を費やして『神の都府』なる大著述を成せり。其反對者に對する辨解は皆に當時基督教徒の精神及態度を察すべきのみならず、羅馬没落の小歴史として見ることを得べきを以て、吾人今是章を終るに臨み、左に其一節を譯載せむ。

羅馬の風教の頽廢、國家の崩解に對して、當に其實を負ふべき者は即ち多神教のみ。吾人基督教徒が有せる政治上の權力は厝に昨日の事のみ。是一千年間に増長し來れる華奢浮麗に就て與り知る所に非ざるなり。異教者よ、爾等の祖先は戦争を職業となせり。彼等は實に隣國を征服して已に隸屬せしめたり。然れども驕奢慢心は戦勝の必然なる結果には非ざりしか。以太利は奴隸を以て充されたり。羅馬人の懶惰は其避くべからざる結果には非ざりしか。豪富と赤貧との鴻溝は時と共に擴大せり。中等社會は漸く消滅し、シ